

---

# 美少女戦士セーラームーン Memories

来夏竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美少女戦士セーラームーン Memories

### 【Zコード】

Z8955M

### 【作者名】

来夏竜

### 【あらすじ】

時期はセーラースターズから半年。

ギヤラクシアとの戦いが終息し、平和な日々を送っていたセーラー戦士達。そんな中、セーラー・ムーンこと月野うさぎは、胸騒ぎを覚えていた。不安が募る中の皆既月食。月の光が消える夜、邪悪な王国がよみがえる？！ちびうさを守るために、交通事故にあってしまふうさぎ。セーラー・ムーンがない今、S戦士達は地球を守れるか？！

【 】この作品はセーラームーンの、ついでに言えばシリアス多めの二次創作です。二次創作の苦手な方、オリジナルキャラや展開、キャラ崩壊などが苦手な方はお控えください。】

【追記10月3日】ただいま、失踪中。申し訳ありません。時間が取れない。完結させる気はあるので、気長にお待ちいただけないと幸いです。

## 第一話 月の光 消えるとき、闇の王国 再び！

金曜日、最後の授業。連休に入る前の授業だという事もあってか、生徒達もよけい授業には身が入らない。それが苦手意識を持つ生徒が多い物理の授業なら、なおさらだ。天之川は最後の公式を黒板に書き終えると、パタンと教科書を閉じた。

「…と言つわけで、少し早いが今日はこれぐらいにしよう」天之川の言葉に、ほっとしたように生徒達は体をほぐす。そんな様子に天之川は苦笑しながらも続けた。

「そういうえば今夜は皆既月食が見られるぞ。夜中の3時頃だから、興味のある者は観察してみるといい。まあ、夜遊びする者は嫌でも見る羽目になるかも知れないが……」

笑みを浮かべながらそう言つと、教室は笑いに包まれた。

チャイムがなり、十番高校の前には帰途につく生徒達の姿で溢れていった。別れの挨拶が飛び交う中、いつものメンバーもそこにいた。亜美、美奈子、まこと、そしてつさぎ。揃つていつもどおり、喫茶クラウンに向つ途中らし。ふと亜美が思い出したように、口を開いた。

「みんな、聞いた？ 今夜、皆既月食が見られるんですって」

「聞いた、聞いた。天之川先生が言ってたね。夜中だつける？」

「夜中の3時なんて普通、寝ているわよね~」

美奈子の言葉に亜美はクスッと笑つた。

「でもね、美奈子ちゃん。一昨年の皆既日食ほどじゃないけど、皆既月食も珍しいのよ？ 見る価値はあるわ

四人はクラウンの自動ドアをくぐる。いつもの指定席にはレイ、アルテミス、ルナが座っていた。そして。

「ちびつわやん？！」

まじと、美奈子、そして畠美の声が重なった。いつも驚きの顔を挙げる。

「ちびつわあー何であなたがここにこむのよー。」

本人は至って涼しげな表情で、ピヨンと立上がりると美奈子のところに行き、封筒を差し出した。

「美奈子ちゃん、はい！」

「えつ？ 何？」

「ママからの手紙」

レイ以外の視線が一斉に美奈子に集まる。レイはもう手紙の内容を知っているのか、興味なさそうにドリンクを口に運ぶ。

「えーと、何々？」

『突然ですが、スマート・レディーを預かってください。よろしくお願いします』

「それだけ？」

あまりにも簡潔で短い手紙に呆気にとられ、まじとは思わず聞き返した。

「そつなのよー。それに見て？ネオ・クイーン・セレーネ、りんくない手紙なのよー」

「本当？！漢字で書けるといふのは全て漢字で書いてあるわ。間違いが一つもない？！」

「それにこの前に比べて、かなり読みやすい字」

「二人共お…」

大げさに驚くまじと畠美に、つむぎは思わず苦笑する。

「よつやく勉強する気になつたんじゃないのーー、つむぎも見習つたらうだうだ」

「あーまたレイちゃん、イジワル言つへー」

隣でじゅれ合つトイとつざきは放つておき、畠美は首をかしげながら

「わがままちゃんに尋ねた。

「わがままちゃん、今度は何も聞いていないの？」

「うん…。突然こっちに来るよつに言われて…」

「わからなーんじゃ、しょうがなーいか。とにかく、またよろしく、ちびうわわわわん」

「よろしく、まこちゃん！」

そんな様子を見守っていたルナがため息がちに呟いた。

「また、賑やかになるわね~」

「ルナ~！」

うわわとちびうわの声が重なり、ルナは小さくなる。

「じゃあさあ、じゃあさあ、歓迎パーティーをやひつよ。ついでにみんなで、円食を見るのは~？」

「いいね、いいね。あたしは乗った！」

「場所はやつぱり…？」

レイが諦めがちに訊く。

「レイちゃんのところ…」

田を輝かせながら答える美奈子に、諦め半分、苦笑半分でレイは返す。

「はいはー」

「亜美ちゃんも来るだろ?」

「ええ、もちろん」

「じゃあ、夕方6時、火川神社に集合ー！」

「もお美奈子ちゃん、勝手に仕切らないでよお」

張り切つて取り仕切る美奈子に、レイは困ったよつに笑う。そんな盛り上がった場を、うわわの一言が静まりさせた。

「あたしは…いいわ

「うわわわわわわん？」

「うわわー。」

みんなの心配そうな声が重なつた。いつも「うわわなら、パーティ」と聞いて美奈子と一緒に騒ぐのがお決まりのパターンなのだが……。そんなみんなの内心を代弁するかのように、アルテミスが訊く。「どうしたんだ? うわわらしくないぞ?」

アルテミスの言葉に亜美も続く。

「大丈夫うさぎちゃん? 頬色、悪いわよ?」

「みんな、『めん! あたし……帰る』

うさぎは突然立ち上がると、鞄をつかみ、クラウンを飛び出していつてしまつた。

「うわわー。」

レイも慌てて立ち上がる。

「急にどうしたんだろ? うわわせちゃん

「ねえルナ、何か知らないの?」

仲間たちに聞かれ、ルナは困つたような表情になる。

「それが……最近、ちゃんと寝れていらないらしいのよ。いつも何かにうなされているみたいで……。けど、起きても何も覚えていないらしいの。それで、たまにあんな風になっちゃうんだけど……」

「何も話さない……か。一人で悩む必要なんてないのに」

レイはうわわが出て行つた自動ドアを寂しそうに見つめると、そう呟いた。

「見守るしかないか。そうだ、ちびうさぎちゃん。今夜出かける前に、もう一度うさぎちゃん誘つてみてくれないか? もしかしたら気が変わっているかもしねりないからさ」

「うん、わかった」

夕刻、うわわは自分の部屋の窓際に座つていた。お気に入りのうさぎのぬいぐるみを抱え込み、夕暮れに染まつていく窓の外の景色をじっと見つめる。

「月の光が消える月食か…」

「『』おーりあー 一人で悩んでるなんて、つむぎはしひが部屋に入ってきたのに気付かなかつた。」

思ひにふけつていたため、つむぎはしひが部屋に入ってきたのに気付かなかつた。

「ちびうさー！」

驚いて振り向くと、ちびうさが心配そうな表情で立つていた。

「ねつ、だから一緒にレイちゃんの所にいこっ・きつとまこちゃん、おいしい物いっぺん作つてくれるよ?」

自分より幼いちびうさに心配をかけている事が心苦しかつた。きつと、ちびうさだけじゃない。みんなも心配している事だらう。でもうせきにはじうする事も出来なかつた。困つたようにつむぎは首を横に振る。

「『』めん、ちびうさ。一人で行つて?あたし、ちよつと疲れているみたいだから。ちびうさ、『』めんね。あんたの歓迎パーティーなのに

に

「ううん。でも、氣分良くなつたら、来てね?」

「わかつた」

「じゃあ、行つてきますー！」

「行つてらっしゃい」

まことじがレイの部屋に入ると、ちびうさの声が飛んできた。

「まこちゃん、おそーい！」

実は約束の6時を40分ほど過ぎている。

「『』めん、『』めん。でも美味しいものいっぺん作つてきたからね。これで許して?」

そつ言つと、テーブルに持つてきたタッパを並べ、ふたを取つていく。

「うわー。おいしそー」

「ま」ちやん、さつすが～」

美奈子とちびうさの感嘆の声があがる。

「ふふっ。ありがと。うさぎちゃんは…来なかつたか。大丈夫なのが  
かい、うさぎちゃん一人にして?」

不安そうな顔をするまことに亜美が答えた。

「ルナが傍にいるわ」

少し暗くなつた場の雰囲気を変えるため、レイは元気よく言った。  
「あんなおでんばは放つておいて、食べましょ?う?うさぎの事だか  
ら、明日になればきっと、いつも通りになつているわよ」

「それに今日はちびうさちやんの歓迎パーティーですものね」

美奈子も明るくちびうさに微笑む。みんな、口ではそんな事言いな  
がらも、うさぎの事を心配しているのだ。それでも自分を歓迎しよ  
うとしてくれている仲間達に、ちびうさは胸が一杯になつた。そん  
なちびうさの内心を知つてか知らずか、まことはグラスを注ぎ、皆  
に渡していく。

「じゃあ、まずは乾杯つて事で……」

まことは、確認するように一人一人と視線を交わす。レイ、亜美、  
美奈子はそれに対して笑顔で頷いた。

「ちびうさちやん、おかえりなさい」

「…………ただいま!—」

うさぎは寝返りを打つと、目を開けた。部屋の中は暗い。枕元の目  
覚まし時計は午前3時を指している。うさぎはゆっくりと起き上が  
つた。近くで眠るルナを起こさないように静かに起きたつもりだつ  
たが、彼女は眠たそうに頭をあげた。

「うさぎちゃん…？」

「ごめん、ルナ。起こしちゃった?」

ルナは立ち上ると、ピヨンとうさぎのベッドに飛び乗つた。

「どうしたの？」

「月の光が消えていくの」

月を見上げながら、うさぎは小さく呟いた。

「月食ね」

そう、月食だから当たり前の事。けれど月の光が消えるのを見ていて、あまり良い気分はない。

「みんなも見ているのかな……」

「どうして行かなかつたの？」

何も言わないうさぎに、ルナがそつと問い合わせた。

「みんな心配しているわよ。何か悩んでいる事があるなら……」

「わかつていい！でもあたしにも良くわからないのよー！」

「うさぎちゃん……」

驚くルナに、自分が思いがけず声を荒げてしまつた事に気が付いた。気がまづくなり、うさぎはベットから抜け出した。

「じめん、ちょっと顔洗つてくる」

「あたし、どうしちゃつたんだろう？」

タオルで濡れた顔を拭き、うさぎは鏡を見つめた。一瞬、何かが見えたような気がして頭を抑える。見える気がするのに、それが何なのわからない。何かが聞こえるような気がするのに、それが何なのかわからない。掴めそうで、掴めない。

ただ、不安な気持ちだけが強くなつていく。

「まだ……。疲れているのかな？」

流れっぱなしにしていた蛇口を、ふと我に返り閉じる。タオルをたたみ、定位置に置くと、うさぎは洗面所を出て行つた。もう少し長くそこにいれば気付けたかもしれない。黒い影が鏡に映つたことに……。

「あー、うさぎちゃん！」

次の日、うさぎがクラウンに行くと、こつもの指定席には仲間達がいた。

「みんな、『ごめん。昨日はちよつと調子悪くて』

「大丈夫、うさぎちゃん?」

「大丈夫。大丈夫。あたしはこの通りピーピンしているわよ~」

「何か悩んでいる事があるのなら、相談に乗るわよ?」

「ホント、なんでもないって」

心配そうに聞いてくる仲間達に、うさぎは困ったように、けれど嬉しそうに答えた。

「どうせ、お腹でも壊していたんじゃないの~?」

「ひつど~い」

「団星でしょ?」

「レイちゃん!」

一見ひどい事を言われているようではあるが、これでもレイの心配の仕方なのだ。そんな事、うさぎにだってわかつている。

「あれ? うさぎは一緒にじゃないの?」

ふと、ちびうさの姿が見えない事に気付く、うさぎは仲間達に聞いた。そんな問いに美奈子が何気なく答える。

「朝、お開きにした後、帰つたけど?」

美奈子の答えに、うさぎの顔からは見る見るうつむいて、血の気が引いていく。

「…」

「うさぎ?」

「… 昨日からまだ帰つていいな~。」

まるで悲鳴のような声をあげると、うさぎはクラウンを飛び出してしまった。

「うさぎちゃん?」

「あたし達も行こ~!」

四人も慌ててうさぎの後を追う。外に出てみると、うさぎの姿はす

でに見当たらない。

「つやめちゃん、どこに行つたのかしら？」

亜美の不安そうな声。

「つやめの取り乱しよひま、普通じやなかつたわ

「ちびうめちゃんの通信機は？」

「だめ、つながらない」

「あたし達も手分けして、ちびうめちゃんを探しましょ」

四人は頷きあうと、別れて違う方向へと走つていく。

「ちびうめー！」

あたし、何してこるんだろ？

「ちびうめー！」

どうして、こんなに取り乱しているんだ？

「ちびうめー！」

でも不安な気持ちで押しつぶされやつ。

うめは立ち止まつ、手を膝につき肩で息をする。呼吸をある程度まで整え、うめはまた走り出した。

ちびうめ、じー。

気がつくと、大通りまで来ていた。

「つやめー！」

道路の反対側を見ると、ちびうめが手を振つていた。隣には衛もり。つやめはほつと安心したように息をついた。ちょうどその時、信号が赤から青くと変わり、ちびうめがうめの傍へ来ようと走り出す。

「来ちゃダメー！」

「えつ？」

突然の叫びに、ちびうめが足を止めた。

「ばかっー。」

すべてが一瞬の事だった。

うさぎが飛び出し、ちびつとの小さな身体を突き飛ばす。そしてちびつとが立っていた場所には、暴走した車がつっ込んでいた。うさぎは跳ね飛ばされ、身体は道路へと放りだされる。

「うさぎ…？」

呆然と座り込んだ、ちびつとは声を掛けた。返事は返ってこない。

「うさぎ…」

「うさぎ…」

衛も我に返ったよううさぎに駆け寄った。

「うさぎ、うさぎ…」

「うさぎ、しつかりしつ、うさぎ…」

残酷に響き渡る救急車のサイレン。慌しく手術室に運ばれるうさぎ。声を掛けながら付いていく衛とちびつ。うさぎは手術室に運び込まれ、ドアは無情にも一人を締め出した。そして灯る、『手術中』の赤いランプ。

## 第一話 月の光 消えるとも、闇のH國 再びー（後書き）

「わざわざ…『ひて、なんつうーストーリーよ?』あたしがいきなり交通事故お?ー。』

レイ：『わざわざ主役交代ね、長かったわ~』

亜美：『ヒ言つわけで、次回から【美少女戦士セーラーマーキュリー Memories】をお送りします』

美奈子：『亜美ちゃん、ずるつこ~。次回、【美少女戦士セーラーヴィーナス Memories】をよろしく~。』

まこと：『おいおい、【美少女戦士セーラージュピターメモires】だろ?』

レイ：『みんな、遅れてる~。もちろんこの、火野レイちゃんが主役の【美少女戦士セーラーマーズ Memories】で決まりよ~』

うわざ：『いやだ、いやだ、いやだ…せえつたい、い・や・だ(グズッ)…』

「わざわざ…【美少女戦士セーラームーン Memories】ムーンがないのに!セーラー戦士危うし

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第一話 ムーンがいないの?—セーラー戦士 危うし

「来ちゃダメえ!—」

「えつ?」

突然の叫びに、ちびうさが足を止めた。

「ばかつー。」

すべてが一瞬の事だつた。

うさぎが飛び出し、ちびうさの小さな身体を突き飛ばす。そしてちびうさが立っていた場所には、暴走した車がつっ込んできた。うさぎは跳ね飛ばされ、身体は道路へと放りだされる。

「つやめー...?」

呆然と座り込んだちびうさは声を掛けた。返事は返つてこない。

「つやめー。」

「つやめー。」

衛も我に返つたよつてひに顎け寄つた。

「つやめー、つやめー!」

「つやー、しつかりしる、つやー。」

病院の廊下。手術室の前。

傍らのベンチに月野うさぎの両親が座つてゐる。近くの壁には衛が寄りかかり、彼にすがるようにちびうさが立つてゐた。月野うさぎ

の弟、進吾は世話をなく廊下を行つたりきたりしている。連絡を受けた仲間達が慌しく走つてきた。ちびうさはそつと衛から離れると、みんなを今にも泣き出しそうな目で見つめる。

「みんな……」

堪えきれなくなつたのか、ちびうさはレイに泣きついた。

「うさぎが…うさぎがあ！」

「ちびうさちゃん…」

「衛さん、一体なにが…」

亜美は静かに衛に訊いた。一見冷静そうに見えるが、よく聞くと亜美の声が震えている。衛は頭を抱えながら首を振つた。

「すまない。俺にも、何が何だか…」

バルコニーで不安そうに夜空を見上げる彼女を見つけた私は、そつと声をかけた。

「どうしたんだい？」

「あなた……」

彼女は振り向き、そしてまた月を見上げた。

「不安なの」

「スマール・レディの事かい？あの子ならきっと大丈夫さ」

私の言葉に彼女はゆっくりと首をよこに振つた。

「そうではないの」

そう言つてから彼女は言葉に詰まる。その胸に抱える不安があまりにも漠然としすぎて、説明しかねている様子だ。

「だったら行つてくるといい」

私の言葉に、彼女は目を丸くする。

「でも私はここを…」

「…離れられない？少しの間だつたら私だけでも大丈夫さ」

それでも泣る彼女に、私は微笑みかけた。

「迷うなんて君らしくないじゃないか。昔の君だったら、もう飛び出していく頃だよ？」

一瞬キヨトンとした表情で彼女は私を見つめ、彼女は小さく笑った。「ひどいわ、あなた。私だって、あの頃よりは大人になつたつもりよ？」

そして彼女は優しげな微笑を私に向けた。

「ありがとう、あなた」

『手術中』の赤いランプが消え、緑の手術服に身を包んだ医師が出てきた。後に続くように、つわざも運ばれていく。

「つさきちゃん！」

「つわざー。」

「つせー。」

視線が一斉に医師に集まる。まるですがるよつに、つわざの母親がゆっくりと口を開いた。

「先生、娘は……？」

「出来る限りの事はしました。幸い傷は酷くはないものの、頭をかなり打つたのが気になります。田覚めるかどうかは、正直などこう娘さんしだいです」

「そんな……」

あまりにも残酷な言葉に母親は床に崩れてしまう。

「大丈夫ですか？！」

「ママっ！」

「ママっ！」

父親と弟が駆け寄る。

「先生、休憩室、お借りできますか？」

「ええ、こちらです」

衛がそつとうさぎの母親を抱き上げた。父親と衛が医師についていく。進吾は自分の姉が運ばれていった先を見ながら、唇を噛み締めていた。どちらに付いているべきか、迷っている様子の進吾を優し

い田で見つめ、亜美はせつと囁いた。

「進吾君、お母さんのところに行つてあげて。『わがわがわんこは私達がついているから』

進吾は心細そつて亜美を見つめたが、何も答えず、衛たちが消えたまづくと走つていった。

「何も言わないで出てきちゃつたから、母に連絡してくれるわ」

亜美は振つ返ると仲間達に言つた。

「あつ亜美ちゃん待つて、あたしも行く」

何故か美奈子が慌てたように続く。

「あたしは何か飲み物買つて来るね。ちびつちやん、付きておいでくれるかい？」

「…でも…」

うさぎの傍を離れたくない。そう思い迷つていると、ま」との視線がレイをじっと見てゐる事に気付いた。釣られてレイを見る。驚きの声をあげそうになつたが、ちびつわせ押しとじめた。

「少し気分転換も必要だよ。ちびつちやんにまで倒られてしまふ、わざわざやん、悲しむよ?」

「…ひん、わかつた」

「レイちゃん、うさぎちゃんをお願い」

美奈子が引きつづながらも笑顔を浮かべ頼んだ。レイは静かに頷く。

「わやんと見ていろのか」

廊下を歩いていく仲間達を見送り、レイはうさぎの運ばれた部屋に入つた。暗く、静かな部屋。医療器具の音だけが無情にも鳴り響いている。レイは椅子を引き寄せるといつさぎが眠るベッドの傍に座つた。そつとうさぎの手を取る。

「死んだりしたら、私が許さないんだから」

仲間たちの前では我慢していた涙が、とめどなくあふれ出でてきた。

「だから、おねがい。田を覚まして、うわざー。」

同じ頃。ここではない、どこか。ここ、そこ、あそこ。そんな言葉では表せない場所。明るくて、暗い場所。狭くて、広い場所。そんな全てが矛盾する場所で、女性の声が響き渡った。声をしたほうを見ると、そこには玉座があり、一人の女性が座っていた。

「ジェダイト。ジェダイトはあるか」

その声に音もなく、一人の男が暗がりからスッと姿を現した。

「ここにあります、クイーン・ベリル様」

「一体どうなつていい!」

その問いにジェダイトの顔が一瞬、戸惑いの色に染まる。

「手違いにより王女<sup>プリンセス</sup>が傷を負い、伏せつております」

「王女<sup>プリンセス</sup>には手を出さな、と私は言わなかつたか! この私が受けた屈辱、何倍にもして返すまで、王女<sup>プリンセス</sup>に死なれては困る」

ベリルと呼ばれた女性は、右手を握り締め、怒りで身を震わせる。

「お言葉ですが、ベリル様。あの王女<sup>プリンセス</sup>が、そう簡単にくたばるとお思いですか? 事はまだまだ修正が効きます。それに……考え方によつては、今回の事はベリル様にとって有利に働きます」

ベリルはジェダイトの言葉に疑わしげな眼差しで答えた。まるで射抜くような眼でジェダイトを睨みつけ、そして疲れたように玉座に寄りかかった。

「まあ、いい。お前の好きにやつてみるがいい。だが、わかっているな。全てを奪うのだ。あの憎き王女の全てを」

「全では我らが支配者、クイーン・ベリル様の為に」

「ちびつちちやん、寝ちゃったね」

再び病室。亜美と美奈子は椅子に座り、レイとまじとは椅子が足り

ないため、床に座っていた。そしてちびつさは疲れたのか、レイの膝の上で眠り込んでしまっていた。

「無理もないわ。ずっと張り詰めていたみたいだっただし。それに何だか自分の事もす」く責めていた「

レイはそう言いながら、ちびつさの髪を優しくなでる。まじとは握り締めていた右手を振り下ろした。

「くそつ。いつたい何があつたんだ

「まこちゃん…」

美奈子は悲しそうにまじを見つめる。きつとこの場にいる全員が思っている事。

「大丈夫よ。いつわが起きたら、きつと話してくれる

「レイちゃん…」

病室のドアが勢い良く開いた。膝にちびつさを寝かしているレイ以外、条件反射的に立ち上がる。

「衛さん？」

衛ではなかつた。ナースがふらりと入ってくる。

「どう…」

…したんですか?と続けようとした畠美は途中で言葉を飲み込んだ。

「た…す…け…て…」

そう言い終える間もなく、ナースは悲鳴をあげた。黒いオーラに包まれたかと思つたら、見る見る内に姿が変わっていく。一瞬の内に醜い怪物がそこに立つていた。

「カンゴー!」

意味不明な奇声をあげる。

「妖魔?!

「怪我には包帯をしましょーう!…」

包帯のような白い物が妖魔から眠るいつわぎへと伸びていく。

「つわぎ!…」

「つわぎちゃん!」

四人はとっさに間にに入った。包帯のよつなもとに巻きつかれ、身体の自由を奪われる。

「力が…」

「ぬけてゆく」

「動け…ない」

呪縛は突然解かれ、四人は膝をついた。床には赤いバラが突き刺さっている。バラが包帯を切り裂いたらしい。

「何者？！」

いつの間にか窓が開き、そこには彼がベッドを守るように立っていた。

「ナースは病人を救う白衣の天使。皆を苦しめる悪魔は、この私が許さん！」

「タキシード仮面様！」

妖魔は悔しがるよつに地団駄を踏む。が、突然動きを止めた。

「私の邪魔をする細菌は、殺菌しましょ～～！」

緑色の液体をタキシード仮面に吹きかける。タキシード仮面はステッキで攻撃を簡単に防いだ。

「何…？」

騒ぎに目を覚ましたのか、ちびうさが声を挙げた。まるでそれが合図だつたかのように妖魔が身をひるがえし、標的を瞬時にちびうさに移す。

「キヤツ！」

ちびうさは白い布のよつなものに包まれた。

「ちびうさちゃん！」

レイは助けに入ろうとするが、妖魔はまた緑色の液体を撒き散らした。反射的に身を避ける。気付くと、ちびうさも妖魔も姿を消していった。

「くそつ」

「みんな、追うわよ！」

四人にタキシード仮面も続こうとした。

「うそ！」へーー

そんな声に四人は驚き、振り返る。意識が戻った様子はない。見るといづさぎの右手が、タキシード仮面のマントをしっかりと掴んでいる。レイは優しく眠っているいづさぎを見つめると、前へと進み出た。

「タキシード仮面様」

そう、言つてから首を振る。

「いや、衛さん。うづさぎの傍にいてあげて。彼女もそれを望んでる」「ちづさちゃんなら、あたし達が助けるからや」まことが付け加える。

「すまない、みんな」

衛は申し訳なさそうに頭を下げた。

「あたし達にまかせておいて」

美奈子がワインクをする。

「みんな、行くわよー！」

雨がシトシトと降る中、少女は歩いていた。お気に入りの赤い傘、お気に入りの赤いレインコート。雨は嫌いではなかつた。屋根のあるバス停の前を通りかかると、一人の女性が困つた表情で空を見上げていた。

『お姉ちゃん、どうしたの？』

『えつ？』

少女に気づいていなかつた女性は驚きの声を上げた。そして悲しそうな、不安そうな顔で呟く。

『大切な人のところに行かなればならないのに…雨が…』

少女は『なあんだ』といつ顔をし、自分の赤い傘を差し出した。

『えつ？』

『私の傘、お姉ちゃんに貸してあげる』

『でも…』

受け取ることを済む女性に、少女は屈託のない笑顔で笑いかけた。

『大切な人のところ、行かなきや行けないんでしょ？私、ここで待つていいから、会えたら返しに来て？』

女性は少女の顔をじっと見つめ、やがて傘を受け取った。

『ありがとう…えつと…？』

『私は…』

少女は自分の名前を言つ。

『ありがとう……ちゃん……！』

よほど急いでいたのか、女性は礼を言つと、傘を片手に駆け出していった。

すでにセーラー戦士に変身した四人は走っていた。ビルの間をすり抜け、人気のない工場地区へと入っていく。

「マークユリー、こっちでいいのか？」

「もうすぐ、追いつくはずよ」

マークユリーは立ち止まると、ポケットコンピューターとゴーグルで妖魔の位置を確認している。

「いたわ！」

マーズが指差す先に、妖魔がいた。脇にちびっさを抱え、工場の屋根から屋根へと飛び移っている。

「あたしにまかせて！ヴィーナス・ラブ・アンド・ビューティー・ショック！！」

マーズの声に、ヴィーナスが飛び出す。必殺技は妖魔をかすり、反動でちびっさを落とした。ジュピターがすかさず、ちびっさを受け止める。

「ちびっさちゃん、大丈夫かい？」

ちびっさは朦朧としながらも、ジュピターの姿に氣づくと笑顔を浮かべた。

「ありがとう、ジュピター」

「よかつた…」

安堵するジュピターの表情を確認すると、こんびはマーズが身構えた。

「あとは私が…！マーズ・フレイ…！」

「マーズ、待つて！」

マーキュリーがマーズを慌てて押しとどめる。

「どうして？！」

「あの妖魔は、人間だったのよ…」

マーズの頭にナースの助けを求める姿がよぎり、思わず唇を噛み締めた。

「だつたら、どうすればいいの？セーラー・ムーンはいないのよ…淨化する技は私達には使えないわ！」

一瞬の躊躇がいけなかつた。二人は包帯攻撃に身を取られ、エナジーを吸われ始める。

「しまつた」

「力が…」

「マーズ！」

「マーキュリー！」

ちびうさの悲痛な叫び。

「あたし達に何も出来ないの……？！」

その時だつた。

光の攻撃が二人の呪縛を切り裂き、妖魔に炸裂した。

「リフレッシュ！…！」

妖魔は叫び声をあげると、元の姿に戻り、その場に倒れこんだ。

「元に戻つた…？」

「今のは…？」

見回していると、男の笑い声が辺りに響きわたつた。

「セーラー・ムーンのいない戦士たちなど、雑魚に等しいな」

「誰…？」

声をしたほうを振り向くと、屋根の上に声の主が立つていた。

「そんなはずは……！」

マーキュリーが息を飲む。

「私はダーク・キングダム四天王が一人、ジェダイト。久しぶりだな、セーラー戦士共」

ジェダイトは不敵な笑みを浮かべる。

「覚えておくのだな。これは、ほんの始まりでしかない」

そんな言葉と共にジェダイトは消え、不気味な笑い声だけがその場に木霊した。

再びうさぎの病室。

窓の外を見ると夜は終わりを告げ、辺りは明るみ始めている。

「それにしても、ジェダイトなんて……」

「まさか、ダーク・キングダムなんて」

亜美もレイも戸惑いを隠せない。ダーク・キングダム。うさぎを含む、五人が戦士として目覚めるきっかけになった敵。前世からつながる、因縁の敵。全てを賭けて倒したはずの敵。そんな敵が目の前に現れたのだ。戸惑わないほうがおかしい。

「それに、私達を助けてくれた、あの攻撃。セーラー・ムーンの技に似ていたけど……」

「そんなわけ……ないわよね」

まことの言葉に美奈子の視線は、自然と横たわるうさぎへと向かった。

「新しい戦いが、始まるうとしているのか」

衛が何気なく呟いた。まるでそれに答えるかのように、うさぎのまぶたが微かに動いた。

「うさこ？！」

「うさぎちゃん？！」

「うさぎ？」

まるで呼びかけに答えるかのように、うさぎはゆっくりと目を開け

た。

「よかつた、ハヤハヤがん。本当によかつた」

「ハヤハヤ.....」

「ハヤハヤがん.....」

## 第一話 ムーンがいないの...セーラー戦士 危つし（後書き）

美奈子…『みやこちゃん、ひねりあわせんが田を開けてくれた』

レイ …『本物だ、よかつた…』

亜美 …『でも街って、なんだか様子が変よ』

めぐみ…『こつたて、びひしきめつたんだい、ひねりあわせん…』

【美少女戦士セーラームーン】 Me more...  
新しい戦いの予感 星々の集うとされ

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第三話 新しい戦いの予感 星々の集つ時

「よかっただ、いわせわせちゃん。本当によかっただ」「いわせーん……」

卷之三

卷之二十一

「夕に轟ひ 涙ぐむ仲間たち  
また視点があわせにくしのか  
」さ  
ぎの田は畠を泳いでいる。

卷之三

弱弱しく

「病院よ」  
「あは、おにぎりが声でうるさいに笑顔を口にしてた  
めに溜まつた涙を拭いながら、亜美は微笑んだ。声に反応し、うさ  
ぎの視線は亜美を捕らえる。やじてうさぎの口からは、信じられな  
い言葉が出てきた。

「誰？」

その場にいる全員が固まつた。

「何謂てござるか。」  
「野田美ちゃんなんやー。」

「人間の心」

「わざわざは思ひ出せりと必死に考えていたが、息をついた。

「一体どうしてあいつたんだい、うれしかん。」

「待つて、せいやん！」

亜美が取り出し気味のまことを遮った。まことは不満そうな顔で

「この中に名前、わかる人いるかしら？」

うさぎは一人一人見ていく。そして悲しそうに首を横に振った。

「自分の名前は、『じゅー』。」

「みんな、私の事を『うさぎ』と…でもわからない、わからない」  
うさぎはまた苦しそうに顔を歪め、横を向いてしまった。

「お願ひ、一人にして…」

「…『うさぎちゃん…』」

「私達は少し外に出ていましょう。」うさぎをお願い、「衛さん」

レイは仲間たちを促した。

「でも…」

「行きましょう？ねつ？」

レイのまっすぐな目で見つめられ、ちびうさは何も言いかえせなくなる。衛を残し、五人は廊下へと出た。

「まさかね…」

まことは前髪を搔き揚げながら、そう呟いた。

「私はお医者様と話をしてくるわ」

亜美が足早に去っていく。

「あたしは…『うさぎちゃんの家族』に…」

美奈子は亜美を追い、いなくなる。

「…『うさぎ』…元に、もどるよね…」

ちびうさはためらいがちに聞いた。

「大丈夫よ、ちびうさちゃん。絶対大丈夫」

まるで自分自身に言い聞かせるかのように呟いたレイは、病室のドアをじっと見つめていた。

病室の中。うさぎはまだ一人、部屋の中に残っているのに『氣』が付いた。傍らに座っている男性。やさしい眼をしている。そう、うさぎは感じた。

「大丈夫か、『うさぎ』」

「あなたは…？」

衛は一瞬悲しそうな顔をするものの、温かい笑顔で答える。

「衛だよ。地場…衛」

「地場衛さん？ごめんなさい。わからない」

衛は微笑み、優しく答えた。

「大丈夫だよ。また…知り合えばいいのだから  
……ありがとう。衛さん」

場面は変わつて、場所は何処かのリビング。

ソファーの上には天王はるかが横になつていた。ふと一人の女性が部屋に入つてくる。肩まである、ウェーブのかかった綺麗な髪が印象的だ。そう。彼女は天王はるかのパートナー、海王みちる。彼女はソファーの上ではるかが寝ているのに気付くと、静かに近づいた。彼女とは対照的に、短く揃えられたはるかの髪をそつとなである。

「みちる。帰つていたのか」

はるかは目を閉じたまま囁いた。そんな様子にみちるは小さく笑う。「でも、またすぐに出かけなくてはならなくてよ？」

はるかが起き上がつたので、みちるは背中を合わせるようにして、はるかに寄りかかつた。

「わかつてゐる。また、戦いに逆戻りだな」

「それが私達の運命ですもの。つまらない日々を送るより、良くなくて？」

「おいおい。この僕というのがつまらない、とでもいうのかい？」  
みちるはいたずらっぽく笑うと、答える代わりにそつとはるかの手に触れた。

公園というものは不思議な場所で、たとえ日中でも、時間が合わなければ人通りがなくなる。十番公園もちょうどそんな時間帯だった。人知れず、それは始まつた。まるで小石を投げ込んだかのように、ボート乗り場の小さな桟橋を中心に、波紋が広がつていいく。波紋は

だんだんと強くなり、ポート乗り場は光の柱に包まれた。

まるで幻だったかの様に、光は一瞬で消え、そこには一人の女性が立っていた。彼女はスカートの埃を払うと、あたりを眺めた。懐かしそうに周りを見渡す彼女の口元に、笑みが浮かぶ。けれどそれも一瞬だけ。真剣な目に表情も硬くなる。唇をキュッと結び、女性は公園を足早に出て行った。

そして十番公園はいつもの静けさに包まれた。

再び病室。「うさぎはぼんやりと天井を見つめながらポソリとつぶやいた。

「私……悪いことしちゃったな……」

自分の事を心配そうに見ていた人たちを、追い出すような事をしてしまったのだ。まるでそんなうさぎの考えを読むかの様に、衛はしずかに答えた。

「大丈夫だよ。みんな、わかってくれる」

突然、うさぎの表情が一変した。

「ちびうさは？ちびうさは大丈夫？ちびうさ？」

無理に起き上がろうとして、うさぎは苦痛に顔をゆがめた。衛はあわてて立ち上がり、うさぎの身体を抑える。反動で椅子が音を立てて倒れた。

「うさこ、落ち着け！ちびうさは大丈夫だ。君が守つたんだ」

そんな言葉にうさぎは安心したようにぐつたりとなる。

「よか……つた……」

うさぎが落ち着きを取り戻したのを見ると、衛は倒れた椅子を起こし、再び座つた。

「大丈夫か？」

「少し疲れました…」

「眠るといい」

うわわは田を開じると、またゆっくりと開き、衛に遠慮がちに聞いた。

「衛さん…？」

「何だい？」

「私が眠るまで、そばにいてくれますか？」

そんな間に衛は一瞬驚いたようだったが、すぐに笑顔になり頷いた。

「もちろんだよ。安心して休むといい」

「ありがとう…衛さん」

安定した寝息になつたのを確認すると、衛はそつと病室をでた。廊下にはレイとちびづさが立っている。

「衛さん…うわわは？」

「また眠つたよ。他のみんなは？」

「一旦帰りました。敵のことも気になるので、交代で側にいる事にしたんです」

レイが最初にその役目を買ってでたのだ。衛は頷くと、今度はちびづさに向き直った。

「じゃあ俺たちも、一度帰らつ、おびづせ。送つてこへよ」

「いや、いいの。だつてうわはあたしのせいだ…」

衛の言葉にちびづさは激しく首を振った。

「ちびづさけやん…」

衛は困つたような顔をすると、膝をつき、おびづせと視線の高さを合わせた。

「大丈夫だよ。うわは強い。それからうわの事は忘れないなかつた

「本当?」

優しくちびつとの頭を撫でながら、衛は繰り返した。

「本当にだよ。だから一度、家に帰つて休もう？」

まっすぐと見つめられ、何も言えなくなつたちびつはしぶしぶとうなずいた。

「…わかつた」

その答えに衛はゆきくつと立ち上がり、レイに頭を下げた。

「「つや！」を…頼む」

「それじゃあね、まもちゃん」

「ああ」

つらそうな笑顔、そう、ちびつとは思つた。見ていられず、まるで逃げるよつに玄関のドアに手をやる。育子ママが帰つているはず。でも、つさきがいないとわかつてゐるだけで、ドアを開けるのをためらわれてしまつ。みんな、つらいんだ。自分だけ逃げちゃだめ。そう自分に言い聞かせ、玄関のドアを開けた。

「ただいま！」

家に入ると、育子ママが居間から顔を覗かせた。疲れきつた顔をしながらも、微笑んで迎えてくれる。

「ちびうさひやん、お帰りなさい。お母さんが来ているわよ？」

ちびうさは耳を疑つた。ママが来るはずない。ママが、20世紀に…。そう思しながらも、居間へ向かう足が早くなる。

「ママ…！」

ソファーに座つていた人物が振り返つた。ちびつとは考えるよりも早く、彼女の胸に飛び込んでいた。

「つさきがあー・つさきがあー！」

涙が溢れ出してくる。止まらない。

「ちびうさひやん…」

育子ママがあたしのカップを持ってきてくれたことに気づいていたけど、あたしはただ泣きじゃくる事しか出来なかつた。そんなちび

うさを抱きとめ、女性は優しくあやすかのように繰り返した。

「大丈夫ですよ。スマール・レディ。大丈夫ですよ」

しばらくしてちびうさが落ち着くと、女性は育子に向き直った。

「育子さん。うさぎさんは、どこの病院に？」

「十番病院です」

「あたしが案内する！」

まだ目を赤らめながらも、ちびうさが答える。そんな様子を女性は眉をひそめ、心配そうに聞き返した。

「帰ってきたばかりですが大丈夫ですか、スマール・レディ？」

「あたしは大丈夫だから」

ちびうさはまっすぐと女性の目を見た。明らかに無理をしている娘を優しく見つめる。そして女性はそつとうなずいた。

「じゃあ、ちびうさちゃん。うさぎの着替え持つて行つてくれる？ 私も後から行くから」

「うん。わかった」

大通りを曲がり、二人は病院の敷地内へと入っていく。

女性はうさぎの着替えが入ったかばんを持ち、ちびうさは花束を持っている。

「ねえ、ママ。どうしてあたしをこの時代に…？」

ちびうさはすっと抱いていた疑問を女性にぶつけてみた。けれど女性はちびうさの問いには答えなかつた。

「スマール・レディ。一つお願いがあるのですが、いいですか？」

「何、ママ？」

女性は立ち止まり腕時計に目をやる。

「今は11時ですから…そうですね…。3時に皆さんを火川神社に集めてほしいんです。出来れば衛さんと、ウラヌス…いえ、はるかさん達も」

「わかった」

「私の事は話には出れなこでください。あと、つむぎちゃんの銀水晶も持ってきてください」

ちびうちは再度うなずいた。女性は花束を受け取ると、ちびうかの視線の先にレイの姿が映った。

「レイちゃん……」

走っていく娘を見送り、女性はまた歩き出す。

ふと誰かが入ってきたような気がして、つむぎは皿をあけた。

「…誰？」

近くの椅子に女性が座っている。不思議と懐かしい感じがする。「私は…セレーネ。じつしてお話するのは、初めてですよ」透き通った声。考えようとするほど、なんだか深い海に落ちていいくよくな気がした。

「でもそれは重要ではないですね。ゆっくり休んでください」田を開けていことが出来ず、つむぎはまだひとつ田を開じた。

しばらくして再び病室のドアが開いた。

「つむぎ?」

レイが入ってくる。開いている窓のそばで、白いカーテンが風に揺れている。

「また、寝ちゃつたか」

うさぎの寝息を確認し、椅子に腰を下ろしながら近づくと、レイは花束に気がついた。

「誰か来たのかしり……？」

花束から一枚のカードがひらりと落ちる。やっと拾い上げ、読み上げた。

『早くよくなつてくださいね。セレネ』

「セレネ……？」

「あとは亜美ちゃんとまもちゃん…」

考え込んでいると、車のクラクションがちびうさを現実に呼び戻した。黄色いスポーツカーが隣に止まる。乗っている人物は、もちろんあの一人。

「やあ、おちびちゃん」

「はるかさん！みちるさん！」

「お久しぶり」

「どうしたんだい、そんなに急いで」

はるかの問いに、ちびうさはまだ母親に頼まれた事を、一人には話していないことに気づいた。

「そうだ！今日3時に火川神社に来てください。出来れば、ほたるちゃんと、パーも！」

ちびうさの真剣な眼差しに、はるかの表情も引き締まる。

「わかった。一人も連れて行くよ」

「絶対来てくださいね！」

ちびうさは念をおすと、走り出していった。

「あらあら、行ってしまったわね」

「もう戦いは、始まつていいみたいだな」

「とにかく、一人を迎えて行きましょう？」

午後三時。火川神社には衛やセーラー戦士達が集まっていた。

「話つて何だい、ちびうさちゃん？」

「つかきちゃんを一人にしておいても大丈夫かしら？」

まことや亜美の問いに、ちびうさはうつむしかなかつた。話はちびうさも知らないので、答えられない。

「お久しぶり、子猫ちゃんたち」

「はるかさん！どうして！」

レイの驚きにみちるが答える。

「私達もちびうさちゃんに呼ばれましたのよ？」

「ちゃんと一人も連れてきたよ」

二人の影から、ほたるとせつなが顔を覗かせる。

「皆さん、お久しぶりです」

「ちびうさちゃん」

「ブー！ほたるちゃん！」

挨拶が終わり、衛がみんなを見回しながら呟いた。

「これでセーラー戦士が全員集まつたことに…」

視線はまた、ちびうさに集まる。

「私が皆さんを呼んだのです」

声がしたほうを見ると、一人の女性が神社の鳥居をくぐる所だった。ゆつたりとした足取りで戦士たちに近づいてくる。姿を見て、レイは息をのんだ。よく知った姿が女性に重なる。でも、そんなはずはない。だつて彼女は……気づくと、混乱するレイはその疑問を口にしていた。

「あなたは……？」

レイの問いを横目に、ほたる、せつな、はるか、みちるの四人がスッと跪いた。まこと、亜美、美奈子は、ポカンとその様子を見ている。混乱しているのはレイだけではないらしい。

「失礼だぞ、この方は…！」

「あなた方にはすぐに気づかれてしましたね。どうか立ってください。はるかさん、みちるさん、せつなさん、ほたるさん」

そう女性に促され、四人は立ち上がる。

「私は未来の月野うさぎ。そしてスマート・レディの母」

「うそ……」

「……まさか」

「そう。私はネオ・クイーン・セレーネティイです」

## 第三話 新しい戦いの予感 星々の集つ囃（後書き）

ジュピター :『そんな？攻撃が、効かない？！』

マーキュリー :『やつぱりセーラー・ムーンがいないと…』

ヴィーナス :『あたし達には何も出来ないの？！』

マーズ :『つわわ…－－』

【美少女戦士セーラームーン Memories

敵？味方？幻月の戦士

クレセント・ムーン現る！

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第四話 敵？味方？幻月の戦士 クレセント・ムーン現る！

「私はネオ・クイーン・セレニティです」

「え―――？」

まこと、亜美、レイ、美奈子。内部系四戦士達の声が重なった。

「もしかして、セレネット……？」

レイの言葉にセレニティが微笑みながら頷いた。

「私です」

そう答えてから、彼女の表情が悲しみの色に染まる。

「皆さんに集まっていたいだいたのは、今の時代での私。月野つかささんのお話したいことがあつたからです」

つかさの事と聞き、みんなの顔が引き締まる。

「つかさちゃんの事で…」

「スマール・レディ。持つてくれましたか？」

ちびうさは母親に頼まれたものを取り出した。

「それはつかさちゃんのブローチ」

セレニティはブローチを受け取ると、そつと開いた。銀水晶が姿を現す。けれど、いつもの強い光は感じられない。

「銀水晶の光が…弱くなっている」

「つかさちゃんが、あんな状態だから？」

亜美的疑問にセレニティは首を横に振った。

「もちろん、その事も関係しているのでしょうか。でも本質的な問題は、違う所にあるように私は感じます」

「ネオ・クイーン・セレニティ様。それは一体どういふことですか？」

「私の事は、セレニティだけでいいですよ。でもその前に、スマール・レディに事故のことを話してもいいべきでしょう」「自然と視線はちびうさに移る。

「そういえば、つさきちゃんも、ちびうさかわらんの事を探していたよな？」

まことはその日の出来事を思い出していた。

「それは…」

ちびうさが言いかけると、衛が遮った。

「俺が悪いんだ。あの朝、たまたま、ちびうさに会つて……」

「それでうさきが元気ない事を話していたら、遅くなつちゃつて「入れ違いになつちゃつたわけね。でも……「つさきちゃんの取り乱しようも、普通じゃなかつたわよね？」

美奈子は確認するように仲間達の顔を順々に見ていく。その場にいなかつた外部系戦士の四人は、静かに話を聞いている。

「それで何があつたの？」

亜美がちびうさに先を促した。

「大通りの向こう側にうさきを見つけて、「つさきの所に行こうとしたら突き飛ばされて……」

ちびうさはその時の事がまた頭に浮かんだのか、うつむいた。ほたるがそつと、そんな彼女の肩に触れる。

「そして田覚めてみると、記憶が……」

美奈子が言いかけて、言葉を飲み込んだ。わかっていること。でもまだ口にするのは怖い。認めるのが怖い。

「つさきさんが、必死に守りうとしたスマール・レディの事以外はほぼ全て」「

その言葉に場が静まる。しばらくして、みちるが口を開いた。

「セレーティ様、その事とうさきの銀水晶はどうつながるのです？」

まるでその問い合わせていたかのように、セレーティはうなずいた。「銀水晶とは、その守護者の心をあらわす、言つならば鏡のような物なのです。そうですね、説明するよりも見ていただいたほうが早いでしょ。皆さん、私に心を合わせてください」

その場にいる全員が目を閉じる。セレーティがつさきのブローチに

手をかざすと、銀水晶がキラリと光った。

レイが目を開けると、そこは暗く何もない空間だった。

「……」

「つさざさこの心の中です」

美奈子の疑問にセレーティが答える。

「何もない……」

レイも感じていたことだ。あのつさざさの心が、こんなに暗くて何もない？見回していると、小さな、でもしっかりとした光が現れた。ちびうわがおれるおれる触れてみる。するとつさざさの声が響き渡つた。

「わびわびわーわびわび、じーーーわびわー。」

「わわわー。」

ちびうわは思わず声をあげ、戦士達は再び火川神社の境内に戻された。しばらくの沈黙の後、考えこんでいた亜美が口を開いた。

「セレーティ様、何もない、というのはおかしくはありませんか？」「さすが亜美さん、すぐに気づかれましたね」

「亜美ちゃん、どういうこと？」

美奈子の間に、みちるが代わりに答える。

「つまりこういう事よ。一言に『記憶喪失』と言つても、記憶が消えてしまつ」とではないの

みちるの言葉にほたるが続く。

「心の奥底に封印して、思い出せなくなつてしまつだけなのです。あんなふうに、何にもないといつのは……」

「……おかしいと言つて訳か」

ほたるの言葉に納得したよつまことは頷いた。状況は違つが、自分達にだつて同じことが言える。きっかけがなければ、ここにいる全員、戦士して目覚めなかつただろう。けれど『戦士の記憶』は今自分とは関係なく、存在したのだ。ただ自分では思い出せなかつ

ただけ。

「これが蘇ったダーク・キングダムとどう関係あるのかは、私にもわかりません。でもうさぎさんが何かを感じていたのは確かでしょう。そしてうさぎさんの心は碎けてしまった。記憶喪失はその所為、と考えて間違いないと思います」

「うわあ…一人で…悩む必要なんてなかつたのに…」  
レイが聞き取れないぐらいかすかな声で呟いた。

「バカ…」

見ると唇を噛み締め、握り締めた右手は震えている。レイは怒っていた。何も言わなかつたうさぎ。そして自分に怒っていた。悔しかつた。また、何も気づいてやれなかつた自分が、情けなくてしちゃうがなかつた。

「レイさん、ごめんなさい。心配かけて」

独り言を聞かれていたとは思わず、レイはあわてた。  
「セレーティ様、私はそんなつもりで言つたのでは…」

うまく言葉にならず口ごもるレイに、セレーティは優しい眼差しを返す。何も言えない……。落ち着いた雰囲気を崩さない彼女に何も言い返すことが出来ず、レイはただ困つたように苦笑いするしかなかつた。目の前にいる人物はうさぎであつて、うさぎではない。でも全てを包み込む、優しい月の光のようなエナジーは彼女そのものだ。

「みなさん、変身ペンをだしていただけますか？」

そうセレーティに言われ、戦士たちは変身ペンを手に取つた。セレーティは新たなブローチを取り出し、立ち上がつた。ブローチをあけると、銀水晶が姿を現した。20世紀の銀水晶ではなく、30世紀の銀水晶。セレーティが触ると、銀水晶は輝き、戦士たちのペンがまるで共鳴するかの様に光つた。

「今は……？」

「皆さんに、銀水晶の力を少し分けました。これで皆さんにも浄化の……」

最後まで言いたいことが出来ず、セレニティはふらついた。

「クイーン！」

「セレニティ様？！」

「ママ！」

衛があわてて体を支え、ゆっくりと彼女を座らせる。

「ありがとうございます、もう大丈夫」

「ネオ・クイーン・セレニティ。まさか、うさぎちゃんの影響が、もう？」

今まで黙っていたルナが心配そうにセレニティの顔を覗きこんだ。少し青ざめたセレニティは優しくルナを撫でる。

「心配かけてごめんなさい、ルナ。うさぎさんがあの状態なので、必然的に私にも影響が出ています。けどまだ心配するほどではありません」

今度は戦士たち一人一人の顔を見ながら、静かに言つ。

「これで皆さんにも、セーラー・ムーンほどではありますんが、淨化の力が備わったはずです。使いこなせるかは、皆さんしだいです。

残念ながら私には、これぐらいの事しか出来ません」

セレニティはすっと立ち上がると、頭を深深と下げた。その様子に戦士たちは慌てる。

「皆さんにじつに心配という迷惑をおかけしてしまって、本当にじめんなさい。どうか、うさぎちゃんとスマール・レディをよろしくお願ひします」

「セレニティ様、頭をあげてください！」

皆を代表して、美奈子が歩み出た。

「うさぎちゃんの事はあたし達に任せてくれ！」

王子と王女を守る。そんなセーラー戦士の使命といつものもあったかもしれない。けれどそれ以上に、うさぎが戦士たちにとつてかけがえのない存在だからこそで、本心からの言葉だった。美奈子の言

葉に仲間達が次々に頷く。

「ねえ、ママ。こつまでこいつているの？」

娘の問いに、セレニティは申し訳なさそうに答えた。彼女が心細そうに自分の事を見つめていたからだろう。

「今晚、戻ります」

ちびうさを気遣つてか、亜美が続ける。

「もう少し、いらっしゃればいいのに」

「残念ながら、そういうわけにもいきません」

セレニティは亜美に近づくと、うさぎのブローチを差し出した。

「亜美さん、これを預かっていただけませんか？」

「うさぎちゃんのブローチ。こんな大切な物…」

「うさぎさんが、戻つてくるまで。お願ひします」

再度セレニティに頼まれ、亜美はブローチを受け取った。

その様子を安心したように確認すると、今度は衛の腕をとった。「帰るまでもう少し時間があるので、衛さん、デートしません？」

「はい？」

思いがけない申し出に、衛は間の抜けた返事しか返せなかつた。

「あ、ママ一人でずるい！」

「ふふつ。いいではないですか、スマール・レディ。こんなに若いパパとデートできる機会など、そうないのですから」

セレニティの言葉に衛は顔を赤らめる。見知った顔とは言え、やはり違う人物なのだ。

「さつさ、行きましょう、衛さん？」

腕をひっぱりながら、衛と歩いていく。

「あたしも！」

ちびうさの言葉に一人は振り返ると、二人で手をつなぎ、境内から

出て行つた。

そんな様子を呆気にとられながら見ていたはるかが、突然、愉快そうに笑い出した。

「あの方が、クイーンか。ハハハ…」

「ふふつ」

みちるも一緒に笑う。

「ネオ・クイーン・セレニティ様つて…」

これはレイ。

「…すつごおく大人なレディつて感じがするんだけど…」

そして美奈子、

「…やつぱりどこか…」

まことが続き、

「…うさぎちゃんのよね~」

最後に亜美。どこかため息交じりながら、内部太陽系戦士たちの苦労を物語っているのかもしれない。せつながクスリと笑った。

「あれでもあの方なりの愛情なのですよ?」

「えつ?」

聞き返す美奈子にほたるが続ける。

「ちびうさちゃん、ずっと張り詰めていたから。ずっと自分を責めていたから。だからせめて、せめて少しの間だけでも、三人の時間をと、思つたんじやないでしょつか?」

「やつぱり、うさぎだ」

困ったような、でも優しげな眼差しで、レイは三人が消えた方向をじっと見つめていた。

彼女は玉座に座り、頭を抱えていた。脳裏にちらつく、遠い日の記憶。向かい合つた王女の眼差し。世界に希望を持ったあの眼。思い出すだけで、虫唾が走る。終わらない痛み。彼女は自分の中のメタリアがエナジーを欲しているのを感じた。

「ジエダイト。ジエダイトはみらいにある。」

「うう」「元

彼女の声にジエダイトは暗闇から姿を現した。

「命じていたエナジーはどうなつていてる。まだまだ完全な復活にはエナジーが足らぬ！」

「心配」無用です。私の放った妖魔が、ベリル様のためエナジーを集めておつます

「その言葉、信じてもいいのだろうな？」

鋭い目つきでジエダイトを睨み付けた。そんな眼差しにむづびたえず、ジエダイトは笑みを浮かべながらうなずいた。

「もちろんでござります

「まあ、いい。思ひよつてみるがいい

「はっ

一礼すると、ジエダイトの姿は再び暗闇の中へと溶け込んだ。

夜。衛はちびつねをおんぶし、セレーネティと共に十番公園の中を歩いていた。

「スマール・レディは眠ってしまいましたね

「いろいろありましたからね…。俺がちゃんと送つてこりますから

「お願ひします

ボート乗り場の小さな桟橋に到着し、一人は足を止めた。

「衛さん。これは戦いの始まりでしかすぎません。これから皆さんには数々の試練が待ち受けていることでしょう

そしてセレーネティはゆっくりと頭を下げた。

「どうか、スマール・レディとつわざさんをよろしくお願ひします

「…う…ん?ママ?」

衛が何か言いかける前に、ちびつねが田を覚ました。衛はちびつねをそつと下りす。

「ちびつね…」

自分が十番公園にいることに気がつき状況を把握したのか、ちびうちはさびしそうにセレーティを見つめた。

「もひ……帰っちゃうんだ……」

「スマール・レディ……」

「帰る前に教えて。どうしてあたしをこの時代に……あたしの所為

でうざぎは……！」

「うう……かもしません」

唇を震わせ、涙を溜めるちびう。セレーティはそっとしゃがんだ。まっすぐとちびうを見つめ、優しく彼女の頬に触れる。

「あの事故はきっかけにしか過ぎません。たとえあなたが引き金にならなかつたとしても、違う形で何かが始まつていたはずです。スマール・レディ。今はうざぎさんがあなたが必要としています。どうか側についてあげてください」

「……うん。わかった」

ちびうとの返事に、セレーティは微笑むと立ち上がった。金色の鍵を取り出し、空に掲げる。次の瞬間、桟橋は光に包まれた。光の中、目を凝らすと、光の先に扉があるのがわかつた。セレーティはもう一度衛に振り返つた。

「衛さん、今日はありがとうございました。デート楽しかつたです

よ

「いらっしゃい。キングによろしく」

「スマール・レディ。がんばるのですよ」

そう言い残すと、セレーティは光の中に消えていった。

光が消え、公園は再び夜の静寂に包まれた。

「ママ……」

「帰ろうか、ちびう？」

衛が差し出した右手をちびうは握り返す。歩き出すとした瞬間、悲鳴が夜の静寂を引き裂いた。

悲鳴が夜の静寂を引き裂いた。

衛とちびうさは顔を見合わせ、走り出す。広場に出ると、そこには夜のデートに来ていたらしきカッフル達が倒れていた。そして中心には今まさに、妖魔<sup>よみ</sup>が掴んだ女性からエナジーを吸っている最中だつた。相手の男性は腰を抜かし、口をパクパクさせながら、呆然とその様子を見つめている。

「妖魔！」

ちびうさの声に妖魔は瞬時に掴んでいた女性を離し、攻撃の照準をちびうさに移した。

「ちびうさ！」

反応できずにいたちびうさの前に、衛は飛び出した。まるで枯れ木のように、ひょろりとした妖魔。見た目とは裏腹に、ものすごい力で衛は茂みへと突き飛ばされた。

「まもちゃん！…」

衛に気が移つた一瞬を妖魔は見逃さなかつた。骨ばつた手でちびうさの首を掴み、エナジーを吸い始める。

「しま…つた」

宙ぶらりんの状態では抵抗できない。力だけが抜けていく。

「マーズ・フレイム・スナイパー」

目の前が暗くなりかけた時、ちびうさは凛とした声を聞いた。マーズの必殺技が炸裂すると、妖魔は奇妙な金切り声をあげ、ちびうさを落とした。四人のセーラー戦士たちが妖魔とちびうさの間に割つてはいる。

「ただでさえ、いろいろ面倒な事になつていてるのに…」

「…ちびうさちゃんまで虐めるなんて…」

「…私達セーラー戦士が…」

「セーラー・ムーンに代わつて、お仕置きよー」

マーズ、ジュピター、ビーナスが交戦をはじめ、マーキュリーは倒

れていたちびうさを助け起した。

「大丈夫、ちびうさちゃん？」

「ありがとう、マーキュリー」

ふらつきながらも、ちびうさは立ち上がる。

「あたしも…戦わなきや！」

「無茶よ、そんな体じゃ！」

ちびうさは唇を噛み締める。

「あたしだって、あたしだってセーラー戦士だもん！あたしだって戦える！」

変身が終わると同時に、ジュピターとヴィーナスが突き飛ばされた。

「ピンク・シユガード・ハート・アタック！！」

妖魔は俊敏にちびムーンの攻撃をかわすと、再び掴みかかり、弱つたちびムーンのエナジーを吸い始めた。

「ちびムーン…！」

ヴィーナスとマーズの悲鳴が重なった。

「マーキュリー・アクア・ラプソディー！」

マーキュリーの必殺技が妖魔に命中した。けれど妖魔はひるまない。次の瞬間、技が跳ね返り、放つた本人は自分の技に突き飛ばされた。

「マーキュリー…！」

「スパークリング・ワイド・プレッシャー…！」

今度はジユピター。けれど彼女の放つた電撃も跳ね返ってきてしまつた。どうにか避けると、ジュピターは着地する。

「そんな…技が効かない？…」

「このままじゃ…ちびムーンが…」

ボロボロになりながらも立ち上がる戦士たち。その間にも、ちびムーンはエナジーを吸われ続けている。

「やつぱりセーラームーンがいないと…」

「…何も出来ないの…？…」

『うわあ……』

『…「つさぎわりやん』

『「つさぎわりやん』』

『「つさぎわりやん…！」』

『「つ… わ… わ…」』

想いが重なった瞬間、光の攻撃が妖魔にあたつた。妖魔は悲鳴をあげると、ちびムーンを呪縛から解放した。

「マーズ、今よ！」

振り向くと近くの木の上に、人影が立っている。

「誰？」

マーズが戸惑っていると、人影は厳しい口調で怒鳴った。

「守りたいんでしょ？！自分の力を信じて！」

その言葉にマーズは奥歯を噛み締め、妖魔をまっすぐと見据えた。

「マーズ・フレイム・スナイパー！！！」

マーズが放つた炎の矢は、妖魔を貫いた。

「リフレッシュ！？」

妖魔は叫び声をあげ、体からは黒い影が抜ける。再び人間の姿を取り戻した人影は、ドサッという音と共に地面に倒れた。服装からして、多分ストリート・ミコージャンんだろう。妖魔が人間に戻つたのを見ると、マーズはまるで気が抜けたようにその場に座り込んだ。

「やればできるじゃない」

声の主の姿を探してマーズはあわてて立ち上がった。木の人影は飛び降りると、月明かりの下へ歩み出た。被衣をベールのようにかぶつたその姿は、まるで昔話にでてくる『牛若丸』のようだ。金色の被衣に白い着物。被衣を深くかぶっているため、顔はよくは見えないが、声からして女性だとわかる。

「あなたは……？」

「私は幻月の戦士、クレセント・ムーン」

「クレセント・ムーン？」

聞き返すヴィーナスに、クレセント・ムーンの口元には笑みが広がった。

「じゃあね、セーラー戦士のみんな。また、会いましょう？」

「あつ待つて……」

そう言つて彼女が待つはずもなく、クレセント・ムーンは暗闇に姿を消した。

「幻月の戦士……」

「クレセント・ムーン……いつたい……？」

戦士たちは優しげに輝く月を見上げ、つぶやいた。

## 第四話 敵？味方？幻月の戦士 クレセント・ムーン現る！（後書き）

美奈子…『……あたしはずつと一人だつた…』

美奈子…『……本当はずつと寂しかつたんだ…』

美奈子…『……そんな時、あたしはあなたと出会つた…』

美奈子…『……だからあたし、決めたんだ…』

「ひわざわ」『【美少女戦士セーラームーン】Memories  
「ひわざわちゃんはあたしが守る！美奈子の友情』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第五話 「わがままなあなたしが守るー美奈子の友情

場所は教室。

教壇に立つ教師は名簿を確認し、クラスと見比べていく。

「欠席は、月野だけか」

その言葉に美奈子とまことはぽつんと空いた席を見つめた。一瞬、眠そうな顔をしたうわざが座っているような錯覚に陥る。でも、ここに彼女はない。

「木野。月野と仲がいいだらう？ 彼女の具合、聞いているか？」

「あと一週間ぐらいで、退院できるらしいです」

「やうか、早くよくなつてももらいたいものだな」

まことの言葉に教師は深くうなずいた。

「じゃあ、昨日の続きをから。教科書の57ページを…」

放課後、クラウンの自動ドアが開き、亜美とまことが店に入ってきた。レイは飲んでいたコーヒーを置く。それぞれの肩にルナとアルテミスが乗っているのを確認すると、またカップを手に取った。

「そつか、今日は美奈子ちゃんの番だったわね」

「事故から、一週間たつたけど…」

座りながらまごとが呟いた。

「うさぎちゃんの記憶を消えたままだし…」

彼女の肩からピヨンッと飛び降りたルナが続ける。

「それに敵の動きも気になるしな…」

アルテミスも考え深そうに目を細めた。

「それにクレセント・ムーン…。あたし達を助けてくれたけど…」

「焦つてもしようがないわ。今私達に出来ることをするだけよ」  
レイの強い言葉。亜美はふと外を眺めながら呟いた。  
「つむぎちゃん…どうしているかしら？」

うさぎもまた、外を眺めていた。開いている窓からは気持ちの良い風が入ってくる。けれどうさぎの表情は暗かった。頭と腕にまかれた包帯が痛々しい。けれども、表情の暗さの理由は、怪我の所為ではなかつた。

『わからない……』

うさぎは起こしたベットに寄りかかり、白い天井を見つめた。

『なんだか全てがぼんやりとしていて……』

まるで頭の中にもやがかかつたようで、思考が働かない。思い出そうとすればするほど、もやが濃く、深くなつていくような気さえする。

考えるのに疲れて目を閉じると、誰かが病室のドアを叩いた。

「はい？」

「こんにちわ、うさぎ」

「お見舞いに来たよ、お団子頭」

返事を返すとドアが開き、二人の人物が入ってきた。一人は肩まである、ウェーブがかつた髪の女性。手には花束を持っている。もう一人は短く切り揃えられたショートヘアのかつこいい男性?と一瞬思つたが、うさぎは違うと感じた。でもやっぱり一人が誰なのか、わからない。知つてているはずなのに、わからない。

「…誰?」

申し訳なさそうに、うさぎは一人に聞いた。

「僕は天王はるか。そしてこつちが…」

「海王みちるよ」

うさぎは一人の名前を心の中で何度も繰り返した。でもやっぱりわからない。うさぎは悲しげに首を振つた。

「はるかさんみちるさん…?」「めんなさい、わからない」

そんな言葉にみちるは優しげに微笑んだ。

「大丈夫よ、つむぎ。焦らなくても」

「少し、外の空気を吸いに行かないか？ 気分転換にどうだい？」

「……」

何も言わないつむぎを、みちるがもう一度誘った。

「行きましょう、ねつ？」

うさぎは一人を見つめた。一人から強い力を感じる。強くて、まつすぐな力。でも悪い人たちではない。なぜかはわからないが、それだけははつきりと言えた。うさぎがうなずくと、はるかが病室のドアを開ける。

「じゃあ車椅子、借りてくれるよ」

「お願い、はるか」

病院の中庭をはるかが車椅子を押しながら、隣をみちるが歩いていく。車椅子に座つたつむぎはゆっくつと深呼吸をした。

「本当…気持ちいい」

「よかつたわ」

うさぎの表情が少しでも明るくなつたを見ると、みちる安心したようには微笑んだ。しばらく歩き、みちるとはるかはベンチに腰掛けた。

「どう、気分は？」

みちるの言葉に、うさぎの表情に影がかかる。

「わからないの。何もかも、よくわからない。自分の事も、みんなの事も」

「大丈夫よ、つむぎ。あなたには心強い仲間がいるのだから」

「仲間…？」

不思議そうに聞き返すつむぎは、はるかはクスッと笑つた。

「子猫たちの事だから、毎日のように来ているんじゃないのかい？」

「レベ、さん、達の事…？」

つむぎの言葉にみちるは何も言わず、そつとうなずいた。つむぎは

晴れ渡つた空を見上げる。

「火野…レイさん。水野亜美さん。木野まことさん。そして愛野美奈子さん。みんな良い人だけど…私…何も思い出せない。それが…すごくもどかしい」

うさぎの握り締めた右手が、微かに震えているのに気づいたみちは、そつとうさぎの肩に触れた。

「大丈夫よ、うさぎ。みんなわかつてくれている」

「……みちるさん…」

ふと、うさぎは一つの場面が見えた。公園、だらうか？はるかが座つていて。視線の先にみちるが居た。二人とも、制服を着ている。む、げ、ん、学園？聞き覚えのない名前が頭の中に響く。みちるは優雅にヴァイオリンを演奏しながら、はるかはそんな彼女を優しげに見守っている。そつか。私、一人に憧れていたんだ。いつも優雅で、可憐な二人に。

「うさぎ」

でも心がうずくのはどうしてだろう。何かあったのかな。他にも何か…。

「お団子頭？」

私、すごく大切なことを忘れている…。思い出せない。

「うさぎ？」

「えつ？」

気づくと、みちるが覗き込んでいた。

「大丈夫、うさぎ？」

「気分が悪いなら、戻るうか？」

無言になつたうさぎを一人が心配そうに見ていく。

「あつ 大丈夫です」

うさぎは安心させるように笑顔で答えた。そして一瞬考えた後、うさぎはみちるに恐る恐ると聞いてみる。

「…みちるさん？」

「何？」

「ヴァイオリン、聴かせてもらえないません？」

うさぎの問いに、一人は非常に驚いた表情へと変わった。聞いてはいけなかつたのかと思い、うさぎは戸惑つた。やつを見えたのは、ただの幻？

「ダメ…ですか…？」

うさぎの申し訳なさそつ眼差しに、みちるはあわてて首を横に振る。

「あつ、いや。やうこいつわけじゃないの。楽器は車においてしまって…」

「大丈夫。僕が取つてきてやるよ、みちる」

そつ言つて、はるかはスッと立ち上がつた。

思考を働かせようとするたび、頭に激痛が走る。

クイーン・ベリルは顔をしかめた。こんな時に限つて、思い出したくもない記憶ばかりが蘇つてくる。

「まだ足りぬのか、メタリアよ」

頭を抱えながら、ベリルは奥歯をかみ締めた。

「ジエダイト！ ジエダイトは居らぬか！」

間を置かずに、ジエダイトが現れる。

「エナジーはどうなつている！ 完全なる復活にはまだまだ足りぬ！」

「私にお任せください」

「最近、失敗続きだが、大丈夫だろうな？」

イラつくベリルにジエダイトはたじろぐ。

「も、もちろんでござります」

「わかっているな？ 私はそう、気は長くはない」

女王の間を後にしたジエダイトは、乱暴にワインを注いだ。中身を

一気にあおり、グラスを床に叩きつけた。

「くそつ！」

「おひ、荒れているな。ジェダイト」

振り向くと、ネフライトが立っていた。

「何しに来た、ネフライト。俺をあざ笑いにでも来たのか！」

今にも噛み付きそうなジェダイトにも、ネフライトは挑戦的な笑みを崩さない。

「四天王の好みで、助言でもしてやるつかと思つたんだがな」「貴様が助言だと？」

「クイーン・ベリル様の乾きは底を知らない。ちまちまHナジーを集めていただけでは、満足していただく事は到底できぬだろ？」「どうしろと言つのだ！」

「大量のHナジーを内に秘める銀水晶。その守護者である、プリンセス王女は今や抜け殻も同じ」

ネフライトの言葉に、ジエダイトは目を細めた。

「…奪うのは、簡単と言つわけか…」

「聞くかどうかは、お前の勝手だが」

「ふんっ」

ネフライトはニヤリと笑つた。ジェダイトは返す言葉が見つからず、ただ顔を背けた。

みちるが弾き終わると、いつの間にか出来ていた観客の輪から拍手が起つた。みちるは優雅なお辞儀で返す。

「つせきちやん～！」

つせきちが振り向くと、そこには近づいてくる美奈子の姿があつた。

「美奈子さん？」

「あつ、みちるさんに、はるかさん」

「やあ」

「ここにちわ」

つむぎは疲れたのか、少しボンヤリとしている。みちるは楽器をケースに片付け、はるかも立ち上がった。

「みちる、僕達はそろそろ失礼しようか?」

「ええ、そうね。つむぎ、早く元気になつてね」

「じゃあ、あたし達は病室に戻ろうか? みちるさん、はるかさん、それひづな?」

つむぎの車椅子を押していく美奈子を見送りながら、みちるが呟いた。

「それにしても驚いたわね……」

「ヴァイオリンの事か……」

「私達の事はわからなかつたのに」

「良い傾向じやないか。今はどんなに小むことでも大切だ」

「そうね。早く良くなつてほしいわね」

「ああ」

病室に戻り、つむぎはまたベットに寄りかかっていた。あたしは持ってきた物を広げていく。

「はい。これが今日のプリント。勉強はやつぱり畠中ちゃんよね~。あたしは漫画持つてきたわよ。セーラーの漫画、面白いくんだから!」

「ありがとう、美奈子さん」

目覚めてから、つむぎちゃんの表情があまり変わらなくなつた。表情には影がかかり、何に関しても、どこか無関心な表情をみせる。そんな心配をしつつも、あたしは精一杯明るく振舞う。多分、あたしが出来るのはこれぐらいだから。だから、今のつむぎちゃんの前では、弱氣は見せなつて決めた。

「つむぎちゃんの好きなチコロも買つてきたよ。お茶でもいれてよひか?」

「うん」と、つむぎちゃんは静かに首を横に振った。

「ねえ、美奈子さん」

「つむぎちゃんは、しばらくボンヤリと外を見ていた。もつ大方だ。そんな事を考えていると、ふとつむぎちゃんが訊いてきた。

「なあに？」

「美奈子さんはどうして、こんなに優しくしてくれるんですか？」  
思いがけない問いに、あたしは一瞬目を丸くした。あたしには当たる前のこと。そんなわかりきった事だったから、聞かれるとは思っていなかつた。

でも彼女の不安そうな眼差しに、あたしは理解した。彼女は心細いのだろう。かなり前になるが、彼女に同じ問い合わせられた事がある。その時も同じ田をしていた。その時は自分が月の王女プリンセスと知つて、心細かつたのだった。  
そして今は…。

「つむぎちゃんは、あたしの大切なお友達だからよ。それだけじゃ、理由にならない？」

「どうして、ですか？」

「うして、か。彼女が月の王女プリンセスで、あたしがセーラー・ヴィーナスだから？ それも多分あると思う。  
けど、それ以上につむぎちゃんの存在はあたしの中では大きい。うさぎちゃんに出会い前、あたしはずつと一人だつた。

いち早くセーラー戦士として目覚めていたから。セーラー戦士としての使命。そして普通の女の子でありたい、という気持ち。そんな誰にも言えない二つの対照的な感情にはまれ、あたしは孤独だつた。

出会つた頃は彼女が月の王女プリンセスだから、そんな気持ちのほうが強かつた。

たかもしれない。いや、そう自分に言い聞かせていたのかもしれない。

ふと、初めてのこの会話が蘇る。

『感動お～！憧れのセーラーちゃんが田の前にいるなんて…。』

『じゃーん。えっへん』

彼女は、あたしの全てを認めてくれた。ヴィーナスとしてのあたしも、美奈子としてのあたしも。

だから、決めたんだ。あたしがつとめやんを守るって。どんなことがあつても、守るって。

「美奈子さん？」

少し考え込んでしまったのだろう。「つとめやんが不思議そうにあたしの顔を見ていた。

「あたしは明るくて、元気なつとめやんが大好き。いつもあたし達に元気を分けてくれるのですもの。だから早く元気になつてもらいたい。せつ、思つの。きつとみんなだつて、そう思つているわ」「美奈子さん…」

あたしの本心からの言葉だった。本心すぎる言葉だったため、思わず言つた後に恥ずかしくなるぐらじ。あたしは照れ隠しのために、腕時計に目をやつた。見ると、もう五時を廻ろうとしている。

「いけない！もうこんな時間？そろそろあたし、帰るね？明日はまこちゃんが来てくれるはずだから。きつとおいしいもの作つてきてくれるんじゃないかしら？」

あたしはあわてて荷物をまとめた。五時に火川神社に集合のはずだったのに、これでは遅刻決定だ。

「ありがとう、美奈子さん」「じゃあね～」

美奈子が病室を後にすると、つとめやんは疲れたよつべつたりと横に

なった。けれど、気持ちは温かかった。みちるさん、はるかさん。そして美奈子さん。今日来てくれた人達の事を思い返す。みんない人だ。何も思い出せず、心細いことが多いけど、一人じゃない。そんな気持ちにみんなはさせてくれる。みんなの事を考えると、自然と笑みがこぼれた。

眠ってしまったのだろう。

しばらくして田を覚ますと、部屋は暗かつた。窓の外を見ると、銀色の三日月が輝いている。

「月…？」

どうしてだろう。月を見ると不思議と優しい気持ちになれる。うさぎは起き上ると、近くのカーディガンを羽織った。周りの家具でうさぎは自分の体を支えながら、ゆっくりと病室を後にした。階段を数段ごとに休みながら上がっていく。

近くで月が……見たい。

「レイちゃん、怒っているだろうな」

火川神社へ走りながら、美奈子は苦笑した。べつに走らなくても大幅遅刻が確定なのに、走ってしまうのは毎朝の癖の所為だろうか？赤信号で一息つく。まっすぐ進めば、すぐに火川神社が見えてくる。右に進めば、うさぎちゃんのいる病院。

「あれ？」

一瞬、めまいに似た感覚に襲われた。妖魔が現れた時に、いつも感じるもの。

「まさか！？」

美奈子は迷わず、病院へ向かつて走り出した。

よつやく屋上に着くと、うさぎは息が切れていた。体力がすっかり衰えている。ベンチに座り、月を見上げながらうさぎは苦笑した。こんな事じや、また怒られちゃう。

あれ？誰に？

田を閉じると、声が聞こえてきた。

『まつたぐ、つせきつてホント、のりまなんだから～』

そつ言いながらも誰かが手を差し出してくれる。

いつも側にいてくれる。あれは…。

面接時間を過ぎた病院で田立つわけにもいかず、美奈子はもじかしく思ひながらも、足早につせきの病室を田描した。そして病室のドアに手をやつ、勢いよくあける。

「つせきやん？！」

けれど病室のベッドは空だった。部屋の中を見回しても、ここの中は見当たらぬ。

「つせきやん、どこに行つたの？」

美奈子は顔を曇み締めた。

「美奈子、頭を働くせるのよ。今のつせきやんは、そつ遠くここにけるはずないわ。この病院をでるとせきえなー」

美奈子は必死に病室を見回す。

「今のつせきやんだったり、どこへ行く？今のつせきやんだつたら…」

ふと、窓が開いていたことに気がついた。外はもう暗く、あれこな三田月が空に浮かんでいる。

「月？もしかしたら、月を？」

そこまで考えると、美奈子は病室を飛び出していた。階段を一段飛ばしで、駆け上つていいく。

おねがい、つせきやん…屋上にいて…

セヒドつせきは現実に引き戻された。男の笑い声がしたからだ。

「誰？！」

「自分から、ノロヘロと田てへるとは愚かなやつだ」

その言葉と共にジェダイトが現れた。ただでさえ弱っているつさきには何も出来なかつた。ジェダイトの影から現れた妖魔に、簡単に自由を奪われてしまつ。

「さあ、吐いてもらおうか。銀水晶はどうにある

「銀…水…晶? わ…から…ない」

その時、攻撃が妖魔にあたり、つさきは自由を取り戻した。凜とした声が屋上に響く。

「そこまでよ!」

「誰だ!」

屋上のドアが勢いよく開き、ヴィーナスが姿を現した。

「つさきちゃんをいじめるなんて、この愛と美貌のセーラー服美女戦士、セーラー・ヴィーナスが、愛の天罰、落とさせていただきます!」

「セー…ラ…ヴィ…ナス…?」

朦朧とする頭でつさきは、ヴィーナスの名前を繰り返した。

「邪魔者が…! 後は任したぞ、ドクトル」

悔しそうに舌打ちをし、ジェダイトは姿を消した。残された妖魔は大きく咆哮をあげる。

「ヴィーナス・ラブ・アンド・ビューティー・ショック!!」

巨体なくせに俊敏な動きで技をかわし、ヴィーナスに掴みかかった。彼女は壁に叩きつけられ、エナジーを吸われ始める。

「しまつた…体が…」

『あたしは明るくて、元気なつさきちゃんが大好き。いつもあたし達に元気を分けてくれるのですもの。だから早く元気になつてもらいたい。そう、思うの。きっとみんなだつて、そう思つているわ』

『つさきちゃんは、あたしの大切なお友達だからよ。それだけじゃ、理由にならない?』

「美奈子……ちゃんと……を……はな……して……」

呪縛が解かれ、むせながらヴィーナスはしゃがみこんだ。見るといつさぎが妖魔に掴みかかっている。でも弱つていのつせきでは適つはずがない。すぐに形勢は逆転してしまった。

「つかさちやん……！」

どうしたら、どうしたら……「つかさちやんが！」

心中で何度も叫んだ瞬間だった。光の刃が妖魔に炸裂し、つかさを落とした。

「今は……」

まるで一匹の蝶のよう、「幻月の戦士、クレセント・ムーン、ただいま参上」

「クレセント・ムーン！」

「今よ、ヴィーナス！決めたんでしょう！」

その言葉に、ヴィーナスはハッとした。そうだ、あたしは決めたんだ。つかさちやんを守るって。

「ヴィーナス・ラブ・アンド・ビューティー・ショック！……！」

「リフレッシュショット！」

ヴィーナスの必殺技が炸裂し、妖魔は悲鳴をあげ、人間へと戻った。その様子を確認すると、クレセント・ムーンはクスリと笑った。

「やれば出来るじゃない？また会いましょう、セーラー・ヴィーナス」

現れた時と同様、クレセント・ムーンはまるで月の光に同化するようにふわりと消えた。

「クレセント・ムーン……」

「つかさちやん……！」

ヴィーナスの姿のまま、美奈子は倒れたつかさに駆け寄り、彼女を

抱き起こした。美奈子の声に「つかせゅうへつと田を開ける。少し視線が泳ぐが、美奈子の姿を捉えると、つかせは弱弱しくも笑顔を浮かべた。

「美奈子……わん？」

「つかせりやん、良かつた……！」

つかせは美奈子に助けられながら、起き上がる。

「助けてありがと、美奈子さん」

その言葉に、美奈子はまだ自分が、ヴィーナスの姿をしてこねりに氣がついた。

「つかせちゃん、そりゃあたしの事を……『美奈子』……って……！」

「違つた……？」

キヨトンとしながら訊き返すつかせに、美奈子は首を振った。

つかせちゃんが、あたしの事をわかつた……

うれしさのあまり田に涙を溜め、美奈子はつかせに抱きついていた。

「つかせりやん……！」

## 第五話 「つかれちゃったはあたしが守るー美奈子の友情（後書き）

まいと …『つかれちゃん、退院おめでとひー。』

レイ :『怪我だけでも良くなつてくれて。本当によかつた』

美奈子 :『みんな氣をつけてー!追いつめられたジニアイトが襲つてきたわー!』

亜美 :『つかれちゃんにも、銀水晶にも手出しませないわ!  
水でもかぶつて、反省しなやー。』

つかれ :『【美少女戦士セーラームーン Memorises】

狙われた銀水晶!つかれ大ピンチ』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第六話 狙われた銀水晶—「さき大ピンチ

眼を閉じると、広がる風景。

神秘的で、輝いていたあの王国。

私はあの王国を滅ぼした。

妬ましかつたから。

憎らしかつたから。

……まぶしすぎたから。

滅び行くあの王国の中でも、  
あの人は王女プリンセスを選んだ。

だから私は…。

そこまで考えると、クイーン・ベリルはふっと息をついた。  
目の前にあの女王オーチャードが立ちふさがった。一瞬だったが、鮮明に覚えて  
いる。あの眼だ。母子して憎たらしい。

二人の幻影を振り落とすかのように、ベリルは激しく首を振った。  
「ジョダイト！ ジョダイトはおらぬか！」

「ここに」

ベリルの声に間を置かず、ジョダイトが現れる。

「エナジーはどうなつていい！」

もはやこの終わりを知らない渴きが、メタリアが欲するがゆえの乾  
きなのか、自分自身の乾きなのかも、ベリルにはわからなかつた。  
どちらにしても結果的には変わらないこと。

「しばしのご猶予を。今、銀水晶を奪つ作戦を進めております」

「ほお。銀水晶だと？」

思いがけないジェダイトの言葉にベリルは眉を上げた。確かに銀水晶なら大量のエナジーを身に潜めている。だがジェダイトごときが扱えるものではあるまい。その事を自覚しているのかどうか…？まあ、いい。

ベリルが右手に集中すると、そこには黒い水晶が現れた。指を動かすと水晶は飛んで行き、スッとジェダイトの手の中に納まる。

「これは…？」

「それは銀水晶へと導くもの、黒水晶。銀水晶が近くにあれば、反応するであろう。必ずしも、プリンセスが銀水晶を持っているとは限らないからな」

ベリルの言葉にジェダイトは再び一礼をする。

「ははっ！ かならず、この命に代えてでも」

「期待しているぞ、ジェダイト」

いつもの面々は、いつもどおり、喫茶クラウンのいつもの指定席に座っていた。レイ、亜美、美奈子とまこと。そしてルナ、アルテミスの一匹。

「明日、ようやく退院ね。良かつた」

安心したように言つ亜美に、まことは同調する。

「本当によかったです。怪我だけでも、良くなつてくれて」

喜ぶ一人に釘をさすかのように、アルテミスが口を開いた。

「けれど、これからが大変だぞ。敵が銀水晶をねらっているんだからな」

美奈子はこの前の出来事を思い出したのか、表情が硬くなる。

「たしかにそうだけど、今は素直に退院を喜んであげるべきじゃないかしら？」

レイが言つ。その言葉に美奈子もまた笑顔に戻った。

「そうと決まつたら、やっぱ、パーティでしょー！」

お祭り好きの美奈子に苦笑しながら、盛り上がる場の雰囲気を、涼しげな声が一瞬にして変えた。

「その話、僕達も混ぜてくれないかな？」

「はるかさん、みちるさん！」

内部系戦士達四人の声が重なった。この二人が現れるだけで、場が優雅に変わるのは、やはり、この一人だからだろう。

「みなさん、こんにちわ」

「お元気ですか？」

「せつなさんとほたるちゃんも」

「あら？ 今日はうさぎの所には……？」

みちるは戦士達が全員そろっているのを見ると、不思議そうに首をかしげた。

「今日は衛さんとちびうさちゃんとが行っているから」

レイはそつ答えてから外を見た。うさぎ、何しているかな？

うさぎは病室にいた。

怪我はほぼ治り、今日の検査の結果も大丈夫との話だった。でも……。

「やつぱり、もやが晴れない」

うさぎはそう呟いた。みんながいる時、たびたび聞こえる声。見る風景。けれどまだ、全てがぼやけ、鮮明に見えたことは一度もなかつた。考えこんでいると、ノック音がうさぎを現実に連れ戻した。

「はい？」

ちびうさと衛が入つてくる。

「聞いたよ。検査も良好で、明日退院だそうじゃないか？」

ちびうさはうさぎに抱きついた。

「じめんね、うさぎ。あたしの所為でこんなことに……」

うさぎはそつと、ちびうさの髪を撫でた。不思議と、この子の事だけは、はつきりとわかる。絶対守らなきや、そつ思つていた子。だから……。

「じめんね、ちびうさ。私には何があったのか、まだ思い出せない。でも、一つだけはわかるの。私はあなたを守りたかった。だから、

あなたが今こいつして無事でいてくれる事が…す」「うれしい」

「うさぎ……！」

次の日、うさぎは病院を後にし、母親と共に家に戻った。タクシーから降りたうさぎは、家を見上げる。

「ここが、私のうち…」

見上げている間に、玄関の鍵をあけたのか母親は家に入り、うさぎも後に続く。

「おかえりなさい、うさぎ」

「…た、ただいま」

うさぎはためらいがちに答えた。母親が家を案内していく。見覚えがあるような、ないような…。けれど、良くわからない。それがうさぎの正直な感想だった。

「ここが、あなたの部屋よ」

ドアを開き、うさぎは中へとはいつた。見回すうさぎを一人にしたほうがいいと思つたのか、母親はそっとドアを閉めると一階へと降りていつた。

「ここが…私の部屋…」

ベットの上に腰掛け、ゆっくりと部屋を眺める。ふとたんすの上に写真たてが飾つてあるのに気がついた。近づき、手に取つてみると

一枚目の写真。美奈子、まこと、レイ、亜美。そして真ん中に、自分の姿が写つている。場所は遊園地だろつか？

二枚目の写真。美奈子たち四人に加え、はるかにみちる。ちびうさに衛。そしてこの二人は…そうだ、せつなさんにほたるちゃん。みんなで写つている。

そして三枚目の写真。そこにはうさぎ、衛、ちびうさの三人が写っていた。まるで親子、そんなおかしな考えがよぎる。

「そんなはずないのにね」

ふとチャイムがなり、少し遅れて母親の呼ぶ声がした。

「つさぎーーはるかさん達が迎えにきたわよ  
はるかさん達が？」

不思議に思いながらも階段を下りていくと、そこにはみちるとはるかの二人が立っていた。

「やあ。退院おめでとう」

「迎えにきたわよ」

「ほら、せっかくはるかさん達が迎えに来てくれたんだから、断つたら悪いでしょ？」

意味がわからず戸惑つていると、母親が二口二口しながら声をかけてきた。彼女はこの一人が何故来たのか知つていてるらしい。

「…うん」

外に出ると、そこにははるかの黄色いスピーツカーが止まっていた。はるかに促され、うれしが車に乗る。

「はるかさん、一体どっこく？」

「着いてからのお楽しみさ」

はるかはハンドルをにぎりながら、いたずらっぽく笑った。

車を降り、階段を上つていた先で、つさぎは足を止めた。

「火川神社…？」

なんだか知つているような気がする。

「さつ行きましょう？みんな、待つていてるわよ？」

レイの部屋の障子をあけると、つさぎはみんなの声で出迎えられた。

「つさぎちゃん、退院おめでとうー！」

見ると部屋はパーティー風に飾り付けられ、テーブルには飲み物や食事が置かれている。

「私のために」……？」

「さあ、さあ。主役は座つた！ 座つたあー！」

美奈子の声に背中を押され、つむぎは席につく。早速、亜美に重たい紙袋を手渡された。

「これ、私からの退院祝い。つむぎちゃん、入院中、お勉強遅れちゃつたからね。良くわかる参考書」

「亜美ちゃん……」

参考書をにこやかに手渡すのが、また亜美らしいところのか、なんとこりか…。キヨトーンとするつむぎの隣で美奈子は苦笑した。

「ここにある料理は、あたしが腕によりをかけて作ったんだよ？」

料理の説明をするのは、もちろんまこと。

「あたしとほたるちゃんも手伝つたんだよー。」

「私は何も……」

ちびうさの面葉に少し恥ずかしそうに口元もむほたる。

「ありがとう、まことにせん、ちびうさ。それにほたるちゃんも」

「まことは乾杯とこれましょー？」

「やつね」

場はすっかり美奈子のペースだ。仲間達は苦笑しながらも、美奈子に任せること。

「みんな、グラス持つたかしら？」

「じゃあつむぎちゃんの退院を祝つて…」

「かんぱーーー！」

グラスのぶつかる音。

「ありがと、みんな」

盛り上がりがついている最中、つむぎは外の空気を吸いこ、部屋を出た。縁側に座り、空を見上げる。あたりはもうすでに暗く、月や星達が輝いていた。ルナも部屋から出でてくると、つむぎの隣に座った。

「どうしたの、つむぎちゃん？」

「あールナ。月が……見たくなかったの」

記憶をなくしてからとこつもの、月を見上げる」ことが多くなった。不思議と心を落ち着かせてくれるのだ。

「月ね…」

「うさぎの言葉にルナも空を見上げる。

「あつそういういえば、驚かないの？ 猫の私が喋つていて？」

ルナの問いにうさぎはふきだした。

「やうだね。私、猫と喋つているんだよね」

うさぎはそつとルナを抱き上げ、自分の膝の上に座らせる。

「でもね…不思議とルナと喋つても、おかしいとは思わないの」「うさぎちゃん…」

「見つけたぞ、プリンセス！」

その言葉と共にジョダイトがうさぎたちの前に姿を現した。

「ジョダイト！？」

反射的にルナが飛び掛るが、所詮は猫。簡単に払われてしまう。

「ルナ！」

ルナに氣をとられた瞬間だった。ジョダイトがうさぎに黒水晶を向けた。黒水晶からは影が伸び、うさぎに絡みつく。

「キヤー！」

「うさぎちゃん…！」

うさぎの悲鳴にて、戦士たちが部屋を飛び出してきた。まことは手に持ったグラスをジョダイトに投げつける。グラスはまるで見えない壁に当たったかのように、ジョダイトの目の前で碎けた。けれど、ジョダイトの氣を逸らすのには十分だったらしい。うさぎは影から開放される。

「うさぎちゃん、大丈夫？」

「亜美ちゃん、うさぎを連れて逃げて！」

「わかつたわ！」

亜美はうさぎを助け起しすと、手を引き、走つていく。

「逃がしあせん！」

「待ちなさい！」

追おうとするジェダイトの前に立ちはだかり、レイたちは変身した。マーズ、ヴィーナス、そしてジュピターが道をふさぐ。イラつきながら、ジェダイトは指をならした。

「お前達の相手など、こいつで十分だ！」

ジェダイトの影から雄一郎が現れた。目が虚ろで、様子がおかしい。雄一郎が苦しげに奇声を上げた。見る見るうちに身体が変化し、醜い妖魔<sup>よつま</sup>の姿へと変つていく。

「ゆうじちりづー！」

マーズの悲鳴。けれど、もうマーズの声さえ、雄一郎の耳には届かなかつた。戦士達はぎりぎりのところで避けると、振り下ろされた妖魔のつめは、地面を深くえぐつた。

「しまつた！ ジェダイトが！」

見るとジェダイトがいない。

「はるかさん達はうわせちゃんをお願い！」

「わかった！」

はるか達、外部太陽系の四人、そしてちびっ子たちはさきたちが走つていった方向へと消える。五人を追おうとする妖魔の前に、マーズは立ちはだかつた。

「あなたの相手は私達よ！」

そしてマーズは穏やかに微笑んだ。

「大丈夫。すぐに元に戻してあげるから、雄一郎」

走つている亜美とうわせの前に、ジェダイトが道をふさぐよつて現れた。

「逃がしはしない」

「追いつかれた？！」

亜美は「うわせを守るよつて前へと出る。

「つかあらやんは、下がつていて」

亜美は変身ペンを取り出し、掲げた。

「マークリー・クリスタル・パワー・メイクアップ！」

亜美は水のようなさわやかな光に包まれ、セーラー戦士へと姿を変える。変身を間近で見たうさぎはめまいに似た感覚に襲われた。

「亜美…さん…？」

この感覚…覚えがある。亜美さんはマークリー。亜美さんはセーラー戦士。いろんな考えが頭の中をぐるぐると廻る。

「うさぎちゃんにも、銀水晶にも手出しませないわ！水でもかぶつて反省しなさい！」

「マークリー・アクア・ラプソディー！」

ジェダイトはマークリーの放った技を簡単に跳ね返した。自分の技で、マークリーは突き飛ばされる。

「マークリー！」

「これで邪魔者がいなくなつたな」

「えっ」

ジェダイトは改めて、黒水晶をうさぎに向けた。黒水晶から伸びた影がうさぎを包み込むと、黒水晶が妖しく光りはじめた。

「これでベリル様も…」

けれど黒水晶の光はどんどん弱くなり、次第には影も消え、うさぎは地面に倒れた。

「何？プリンセスは銀水晶を持っていない？」

「マークリー大丈夫か！」

倒れたマークリーを目にし、ウラヌスは彼女に駆け寄った。少し遅れて、マーズたちも現れる。

「マークリー！」

セーラー戦士が集まつたの確認すると、ジェダイトはニヤリと笑つた。

「ちょうどいい。どうせ、お前達の誰かが、銀水晶をもつてているの

だろう。銀水晶をわたせ！ もなこと、プリンセスの命はないぞ」  
ジエダイトは右手をいまだ意識を失つているつさぎに向けた。右手  
からは炎をはなち、今にもつわせを包みこむやつだ。

「くそっ

手出しが出来ず、ジュピターは悔しそうに歯を噛み締めた。

「わかつたわ」

ボロボロのマークьюリーが立ち上がり、歩み出す。

「いい心がけだ。そこにおいて、下がるんだ。一歩でも動いたら…  
わかつているな」

マークьюリーはつわせのブローチは言われたままに置き、下がる。

全ては一瞬だった。

ジエダイトがブローチを拾い上げると、銀水晶はまばゆい光を放つ  
た。田がくらみ、苦痛の叫びをあげるジエダイト。仄づくと、セー  
ラー戦士達の前には人影が立っていた。手にはつわせのブローチを  
持つている。

「何？！」

「これはあなたの持つべきものではないわ！」

「誰だ！」

銀水晶の光から回復したジエダイトが彼女をにらみつける。

「私は、幻月の戦士、クレセント・ムーン」

「ひつなつたら…！」

ジエダイトの右手から巨大な火の玉が現れ、倒れているつさぎを包  
み込んだ。

「つさぎ…！」

「つせきちやん…！」

戦士達の悲鳴。まるでそれに答えるかのように、炎に包まれたうさ  
ぎの身体がゆっくりと浮かび上がった。額には田のマークが浮かび  
上がっている。

「う、たぎ…！」

うさぎの額のマークが輝くと、炎は術者へと跳ね返った。

「何？！」

ジェダイトは悲鳴をあげ、次の瞬間その姿を消していた。再び倒れたりうさぎに、内部太陽系戦士達が駆け寄る。額のマークは、もう見えない。

「おそろしい力だ」

見守っていたウラヌスが呟いた。

「さすが、幻の銀水晶といわれるだけあるわね」

「そして、プリンセス。どうべきでしようね」

「でも…」

「どうしたのです、サターン？」

不安の表情を拭い去れずにいる、サターンにプルートは訊いた。

「心配なのです、あの力。今のうさぎさんは抜け殻も同じ。暗くも明るくもなる」

「サターン…」

一時期、ミストレス<sup>9</sup>に操られていたサターンだからこそその言葉なのだろ？ ウラヌスは返す言葉が見つからず、ただうさぎたちを見守る事しかできなかつた。

「うさぎー！」

「うさぎー！」

ちびムーンとマーズの呼びかけにうさぎは目を開けた。

「よかつた、気がついて」

「あれ？ 私、一体？」

うさぎは今の出来事を覚えていないらしい。そんな事を考えていると、マーキュリーは後ろから声をかけられた。

「亜美ちゃん」

振り向くと、クレセント・ムーンが立っている。

「私の名前…！」

クレセント・ムーンは意味ありげに笑うと、つむぎのブローチを差し出した。

「これは亜美ちゃんが持つていて」

「ねえ、クレセント・ムーン。あなたは一体？」

「これはマーズだ。」

「時が来ればわかるわ。また、会いましょう？」

それだけ言うと現れたとき同様、一瞬で姿を消した。

「行っちゃった…」

「…相変わらず…」

「せつかちな人ね…」

転移が終わり、ダーク・キングダムに戻ると、ぼろぼろのジェダイトは膝をついた。

「くそつ、あの忌々しいセーラー戦士共めが！」

「ジェダイト。銀水晶はどうした」

その声にジェダイトはよつやく、自分の置かれている立場を自覚した。自分で転移したわけではなかつた。クイーン・ベリルに呼び戻されたのだ。ジェダイトは顔から血の氣が引いていくを感じた。

「今一步のところで…」

「言い訳など、聞きたくはない。やはつお前には荷が重すぎたようだな。しばし眠りにつくといい

「ベリル様、ご猶予を…」

ジェダイトの言葉には耳を貸さず、ベリルは指をならした。瞬間、ジェダイトは黒い炎に包まれる。

「ベリルさま――――――！」

断末魔だけをその場に残し、ジェダイトは暗闇へと消えた。スツとネフライトが歩み出る。

「ふつ…俺の出番だな、ベリル様」

「ネフライトか、好きにやつてみるがいい」

## 第六話 狙われた銀水晶—「つさき大ピンチ（後書き）

美奈子 :『やつぱり、みちるさんのヴァイオリン弾いている姿つて、優雅で素敵よね～？』

レイ :『まつたく、こんなところにも妖魔が？！』

ネプチューン :『コンサートを台無しにしてくれるなんて…許さなくてよ？』

マーズ :『ね、ねえ…ウラヌス…？ネプチューンつて…（汗）』

ジユピター :『…怒ると…』

ヴィーナス :『怖いんだ～』

ウラヌス :『あつああ（苦笑）』

ネプチューン :『監さん、何か言いまして（微笑み）？』

内部系四人 :『いっいえ！（汗）』

うさぎ :『【美少女戦士セーラームーン Memories】  
美しい調べは悪夢への誘い？！みちる怒り大爆発』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第七話 美しい調べは悪夢への誘い？！みちる怒り大爆発

ネフライトの持つ水晶から、映像が浮かび上がった。

ジェダイトがブローチを拾い上げると、銀水晶はまばゆい光を放つ。目がくらみ、苦痛の叫びをあげるジェダイト。やけになつたジェダイトがうさぎに攻撃を放つた。ゆっくりと浮かび上がるうさぎの身体。炎の渦は跳ね返り、術者を業火に包み込んだ。そしてうさぎの額にきらめく、月のマーク。

「私にこんな物を見せてどういうつもりだ、ネフライト」「俺に言わせれば、エナジーをちまちまと集めたり、プリンセスの影響を濃く受けた銀水晶になど手を出すなど、愚かの一言」

ネフライトの言葉にベリルは目を細めた。

「ほあ？お前だつたら、どうするというのだ？」

「見てのとおり、抜け殻となつたプリンセスも、いまだ強大な力を持つてゐる。これを利用しない手はない」

「この私にプリンセスを乗つ取れ、とでもいつのか？」

「いや、彼女のエナジーを利用するのです。そしてプリンセス自身も利用しない手はない。味方同士で戦う。一番、プリンセスが嫌つていた事ではないだろうか？」

ネフライトはニヤリと笑つた。

「おもしろい、好きにやつてみるがいい」

「じゃあ、うさぎひやん！また後でね！」

「うん」

うさぎは手を振つて、美奈子と別れた。美奈子の姿が見えなくなり、うさぎはふつとため息をついた。公園に入り、うさぎはベンチに座

る。空は晴れ渡り、雲ひとつない。けれど……気持ちがいまひとつ乗らない。そしてその理由もわかっていた。

「どうしたんだい、お団子頭」

「元気ないわね」

凛とした声に顔をあげると、まるか達が立っていた。

「みちるさん、はるかさん」

「せつかくだからお茶でもどうだい？」

「はい」

飲み物をはさみ、「わざと向かい合つたみちるは話題を切り出した。

「悩み事でもあるのかしら？」

「もうこいつわけではないんですけど……」

口ごもる「さきに」はるかは苦笑する。

「そんな顔で言われても説得力ないよ?」

「みんなとケンカでもしたのかしら?」

みちるの言葉に「さきはあわてて首を横に振る。

「みんなは良くしてくれる。でも……私はいまだ何も思不出せない。

それが……つらいの」

「つさぎ……」

まったく、この子は……。はるかは困ったよつに苦笑した。  
みちるも優しく「さきを見つめる。

いつもさう、自分よりも周りを一番に考えて……。

優しきるのよ、あなたは……。

心中で、みちるは「さき」に話しかけた。

でも……だから……『貴方』なんでしょうね、プリンセス。

「焦っちゃダメ。思い出せないなら、これから思い出を作ればいい

い

「これから……?」

不思議そうに聞か返す「さきにみちるが続ける。

「はるかの言つとおりよ。焦つてもしょうがないわ。あつ、そ�だ  
わ」

何かを思い出したよつて、みちるは鞄から数枚のチケットを取り出した。

「明日、コンサートがあるの。良かつたらみんなでいらして？」

「みちるさん、ありがとつ。あつ、もうこんな時間？私、行かなき  
やーはるかさん、みちるさん、さようなら！」

チケットを受け取り、さきは去つていった。

「あらあら、行つてしまつたわね」

みちるがクスリと笑つ。

「みちる」

うさぎの姿が見えなくなり、はるかの目つきが厳しいものへと変わ  
つた。

「風が…ざわめいている」

みちるはそつと紅茶の入ったカップを口へと運んだ。

「わかつてゐるわ。氣をつけてあげなくてはね、彼女の事を」

ネフライイトは古い教会の前に立つていた。壁は所々崩れ落ち、ステ  
ンドグラスがあつたと思われる箇所には、破片しか残つていない。  
廃墟。そんな言葉がぴつたりの場所だった。

ネフライイトは落ちぶれた様をも気にすることもなく、扉を押した。  
ズッシリとした木の扉は、ゆっくりと音を立てて開いた。中の様子  
は外とはあまり変わらず、かつて参拝者たちが座つたはずのベンチ  
は壊れ、十字架は埃をかぶり、床に落ちていた。

ネフライイトは教壇まで進んでいくと、上を見上げた。天井のあるべ  
きその場所には、星空が広がつてゐる。ネフライイトが集中すると、  
星空はうずを巻き始めた。しばらくすると、一つの光に影響されて

か、小さな星が光り輝く。

「そうか、今は海王星の影響を受け、モノケルロスが光輝く時。これを利用しない手はないな」

『星は全てを知っている』

それがネフライトの考えだつた。星に問い合わせすれば、道を示してくれる。星本来の力で全ては動き出す。自分はただ、きっかけを与えるべきいいだけなのだ。そう、たとえそれが小さな小石としても、波紋は起こせる。

「モノケルロスが守護するものは……」の男か。あさひな もとなり朝比奈基成、俺のために働いてもらつた

そんな事を知りもせず、朝比奈はコンサートホールの舞台に居た。正確にはグランドピアノの前に座り、ヴァイオリンと共に美しい調べを奏でていた。演奏が終わり、スタッフの声で、その場の緊張がふつと途切れだ。

「OKです。リハはこれで終了です。お疲れ様でした！」  
優雅にヴァイオリンを弾きこなしていた女性が、ピアノ奏者の朝比奈に近づいてくる。

「朝比奈さん、ありがとうございます。明日はコンサートにこましょうね？」

「いらっしゃる光榮ですよ、海王さん。あなたみたいに才能があつて、美しい方と共演できるとは、

朝比奈の言葉にクスリとみちるは笑う。

「まあ。お上手ですね。ではまた、明日お会いしましょう。失礼します」

去っていくみちるに、朝比奈は手を振り、見送った。そして少し弾

き足りない朝比奈は鍵盤に手を置き、再び弾き始めた。

しばらくして物音に朝比奈は演奏を中断した。

「誰かいるのか？」

もうスタッフの大半は帰ったはず……？

朝比奈がそう思っていると、舞台のそでから、ダンボールを持った見慣れない男が出てきた。スタッフTシャツを着ているところを見ると、彼もスタッフの一人らしい。

「すみません、思わず聞き惚れてしまいました」

「ありがとう」

彼はダンボールを床に置くと、近づいてきた。男はまるで壊れ物に触るかのように、そつとピアノに触れた。

「このピアノから、あんな綺麗な音色が…。コンサートがんばってください。応援していますよ」

そう言いつと男は去つていった。

朝比奈は静かに笑い、再び弾きはじめた。

次の日。

人であふれるコンサートホールの中で、つむぎはあたりを見回した。

「つむぎー！」

「じゅぢゅ、じゅぢゅ！」

手を振つていてる四人をみつけ、走つていく。

「みんな。遅くなっちゃって、ごめんなさい」

「大丈夫、大丈夫。まだ始まるまで十分時間あるからさ？」

まことは安心させるように言いつ。

「あら？衛さんは？」

衛の姿が見当たらないので、レイは不思議そうに首をかしげた。

「大学の関係で、今週いないの」

「そう、残念ね」

「子猫ちゃんたち」

はるかの涼しげな声に五人は振り返った。

「はるかさん！」

「こんばんわ、みなさん」

「みちるさん！」

「もちろんみちるも一緒にだ。

「光榮だわ、みんなで来ててくれて。コンサート、ぜひ楽しんでいらして」

「コンサート、がんばってください」

「ありがと。コンサートの後にでも、また会いましょうっ♪」

「コンサートが始まり、一曲、二曲と順調に過ぎていいく。

『あら？ 朝比奈さん？』

三曲目の中盤に入り、みちるはヴァイオリンを弾きながら、二曲目から湧き出した違和感がだんだんと強くなつてくるのを感じた。おかしい…。テンポがかすかだが、狂い初めてている。朝比奈に限つてこんなこと…？

残念なことに、違和感はすぐに確信へと変わった。演奏の最中、朝比奈が突然立ち上がつたのだ。腕を振り上げ、手を鍵盤に叩きつける。不協和音がホールの中に響いた。耳障りな音がやまない。みちるは思わず耳を覆つた。

見ると朝比奈が床に倒れている。

「うひ 何？」

「ピアノーン！」

突然グランドピアノが黒い炎に包まれた。驚いたことに、ピアノが動き出す。

「妖魔？！」

みちるは観客席をみた。ほとんどの観客が先ほどの不協和音で氣を失っている。エナジーも同時に吸い取られたのに違いない。まことやレイたちが舞台の方へ走りでてくるのが横目で見えた。

「私のコンサートを台無しにしてくれるなんて、いい度胸ね。ネプチューーン…！」

変身しようつとペンを掲げた瞬間、妖魔はみちるに氣づき、襲い掛かってきた。真っ黒な巨体に似合わず、動きが早い。攻撃を避けた反動で、変身ペんがみちるの手を離れ、遠くに転がる。

「しまった」

変身ペんに氣をとられた一瞬を逃さず、妖魔は攻撃を放つた。不協和音と共に、まるで超音波のよつたな攻撃がみちるを襲う。

「みちるー！」

駆けつけたはるかが見たのは、みちるが舞台の端へと突き飛ばされる姿だった。

「ウラヌス・プラネット・パワー・マイクアップ！！」

はるかは瞬時にウラヌスに変身し、必殺技を放つ。

「ワールド・シェイキング！！！」

光の球体が地面を這いながら妖魔へと飛んでいく。強力な技は妖魔をひりますのには十分だった。その間にウラヌスはみちるに駆け寄つた。レイ、美奈子、まこと、亜美の四人も飛び出す。

「私達も変身よー！」

「大丈夫か、みちる」

みちるは少し咳き込みながらも立ち上がる。

「私は大丈夫。ネプチューーン・プラネット・パワー…」

今度は邪魔されず、みちるはネプチューーンに変身した。見ると内部太陽系の四人は交戦しながらも、少し苦戦している様子。

「よくも『ンサートをぐちやぐちやにしてくれたわね？許さなくてよー。」

ネプチューンはすつと前へと出た。

「ディープ・サブマージ！」

ネプチューンに気づいていなかつた妖魔は、大きな悲鳴をあげた。  
「す、すごい」

技の威力に驚くマークユリー。

「ね、ねえウラヌス」

ウラヌスが振り向くと、いつの間にか後ろにはマークスが立っていた。

「ネプチューンって……」

「……怒ると……」

これはジユピター。

「恐いんだ～」

そしてヴィーナス。

「何か言いまして？」

振り向いたネプチューンにマークスたちはビクッとなる。いつもと変わらない優雅な笑顔だが、目が笑っていない。  
それが逆に怖い。

「いいえ！」

「ウラヌス！」

「ああ！」

ネプチューンの声にウラヌスは力強くうなずき、もう一度右手に光の球体を作り出す。

「ワールド・シェイキングツ！！」

技は妖魔に炸裂し、断末魔をあげた。妖魔の代わりにボロボロになつたピアノが音を立てて、舞台の上に落ちた。

息をつく戦士達の姿を横目に、ネプチューンはつむぎを探した。見つからない。

「ウタノカニ」

「あれ、さつせまでいたの?」

胸騒ぎがある。みちるは顔を隠し締めた。

「探しましょ」

ウイリ・カスの言葉に5人は驚きあい、散らばっていく

一  
「れわく」

一  
階

卷之三

卷之三

ホーリーの周囲。

「アーティストの心」

ホールの入り口に六人の戦士達が集まつてくる。

いた？

二三  
しなじわ

卷之三

イラついて舌打ちをするウラヌス。ポケコンにずっと何かを打ち続けていたマー・キュリーが声をあげた。

あくにかたむけむ

つづけて、暗く何もない場所を歩いていた。

「あれ？ 私はどうして…」

何も見えない。何も聞こえない。見渡す限りの暗闇だった。

「みんな...どー!...?」

『惨めだな』

「誰？」

突然声が響き、うさぎは立ち上がった。けれど声の主は見えない。  
『記憶をなくし、一人になり。友と名乗っていたものはいない。惨めだな』

淡々とした声は、まるで刃のよつにうさぎの心に突き刺さる。うさぎは耳を覆った。

「やめて！」

『一人は恐いだろ？ 一人はさびしいだろ？ 一人はつらいだろ？ 一人は苦しいだろ？』

「やめて…聞きたくない」

うさぎはしゃがみこむ。

『自分の事が知りたいのか？』

しばらくの沈黙の後、声が聞いてきた。思いがけない問いに、うさぎは顔をあげる。

『私の事、知つているの？』

『さあな』

そつけない反応にうさぎは声を荒げていた。

『お願い、教えて！私は誰なの！』

うさぎ！

うさぎちゃん！…

自分の名を呼ぶ声。そしてうさぎは光に包まれた。

目を開けると、うさぎはなぜかホール近くの公園に居た。

「うさぎ！…」

振り向くと、マーズが走つてくるところだった。少し遅れて、他の五人も姿を現す。

「良かつた。本当によかつた」

「レイさん…」

「つさぎを囲む戦士達、けれど再会は男の笑い声で邪魔された。

「誰だ！」

「姿を見せなさい！」

ウラヌスとネプチューングがつさぎを守るように前へとでる。笑い声は大きくなり、そして声の主が姿を現した。

「あなたは…」

「ネフライト！」

「そう、俺はダーク・キングダム四天王の一人、ネフライト」

「無駄口は聞きたくはないわ！ディープ・サブマージ！」

ネプチューングはネフライトに向かって必殺技を放つた。けれどもバリアがネフライトを守っているのか、ネフライトにあたる前に技は消滅した。

「そんな…効かない？！」

「だつたら…これならどうだ！」

ウラヌスが飛び出す。右手にはウラヌスのタリスマントリニティ【スペース・ソード】が握られている。

「スペース・ソード・ブラスター！！」

ネフライトは微動だにせず、右手で刃を受け止めた。

「くっ！」

「初対面の相手に、失礼だな」

「僕達はあの子たちのように、甘ちゃんではないのでね」

挑戦的にウラヌスは笑う。

「いい心がけだ」

ネフライトが剣を離すと、ウラヌスは見えない力で突き飛ばされた。

ウラヌスは空中で体制を立て直すと、どうにか着地をする。

「ウラヌス！」

ネプチューングが駆け寄った。

「せいぜい、プリンセスを守つてやるんだな！」

現れた時のようにネフライトは笑い声だけを残し、夜の暗闇に溶け

ていった。

メンバーは火川神社にもどり、うわせみちるは縁側に座っていた。

「じめんなさいね、コンサート…」

「うん、みちるさんの所為じゃないから…」

まるで次の言葉を言うのが恐いのか、戸惑いのうわせは続ける。

「私の…せになんでしょう？」

「そんな事…」

「だつて…」

反論しかけるみちるを、うわせは止めた。

「みちるさん、うそ…つかないで！いつも、私を狙っている。そしてみんな私を守りうとして、危険な田に…！」

うさぎのあまりない取り乱しように、みちるは掛ける言葉が見つからなかつた。

「私は誰なんですか！みちるさん！」

そこまで言い切ると、うさぎはハッとしたようになりつむいた。ようやく自分が声を荒げていたことに気づいたのだらう。

「じめんなさい。私…」

みちるはそつと、うさぎを抱きしめた。

「大丈夫よ、うさぎ。大丈夫よ」

こんなにも苦しんでいるのに、何も出来ないなんて…。声に動搖がないように、みちるはゆっくりと深呼吸をした。

「きっとうりういと思うわ。きっと苦しいと思うわ。でもね、うわせ。あなたは一人じゃない」

うさぎは顔を上げた。

「あなたの側にはあの子達がいるわ。それに衛さんだつているじゃない？せつなやほたる。私やはるかだつて」

「一人…じゃない」

うさぎは空を見上げた。月は雲に隠れ、ぼんやりとしか見えない。

「つさぎはもう一度だけ、繰り返した。

「私は一人……じゃない」

## 第七話 美しい調べは悪夢への誘い?—みちる怒り大爆発(後書き)

美奈子：『私達にはそんな表情ぜんぜん見せないけど……』

亜美：『「ひやせりあやん相変わらず「元気ないわよね……』

まこと：『やつだ、これに誘つてみようよ』

レイ：『植物園?』

美奈子：『あつ確かに、今日からバラ園がはじまるんでしょ?』

亜美：『「ひやせりあやんバラ好きだから、あつといい気分転換になるわ』

「ひやせりあ・『【美少女戦士セーラームーン Memories】

悪夢はバラの香り?植物園の恐怖』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第八話 悪夢はバラの香り？植物園の恐怖

ジョギングから帰ってきた衛は、簡単な朝食を用意し、コーヒーを飲んでいた。そつとカップを置き、郵便受けから取ってきた物をチックしていく。ふと、衛は一枚のチラシに目が止まった。

【あなたも美しいバラの世界に迷い込んで見ませんか？植物園『プラント』、バラ展 本日OPEN！】

衛の視線は自然と、サイドテーブルの上に飾つてある写真に向かつた。うさぎ、ちびうさ。三人で撮った写真だ。

「うさこ、好きだったよな…。誘つてみるか」

同じ頃、うさぎは悪夢につなされていた。

響き渡る女性の声。

『何故。何故そこまでして私にはむかう？美しき未来を夢見るお前も氣づくだろ？この世界はすでに醜く、汚れきつていることを』  
彼女の声がまるで刃のように心に突き刺される。うさぎは思わず耳をふさぎたい衝動に駆られた。

その時、まるで光のように新たな声が響いた。

『いいえ！あたし、信じている』

私の声？でもなんだか別人のように聞こえる。

本当に…私？

『いいえ？愛か？友情か？人同士の信頼か』

最初の女性が見下したように笑つた。それでも相手はひるまない。

『信じている！みんなが守るうとしたこの世界を信じている』

強くて、まっすぐな心。そんな想いが伝わってくる。

『馬鹿め！この腐り果てた世界に信じられるものなどないわ！』

全てを飲み込むとする闇の力、全てを照らすとする光の力。  
一つの対照的な力がぶつかった。

「「つかわー。」

目を開けると、そこには母親の姿があった。

「「つき? 大丈夫? かなりうなされていたよつだけど…?」

「つかわは心配させないために、無理やり微笑んだ。そんな「つかわ」の気持ちを知つてか、知らずか、母親はスッと立ち上がる。

「さあ、早く起きて。着替えてしまいなさい。衛さんが来ているわよ?」

「衛さんか?」

リビングに入ると、衛の「つかわ」を出迎えた。

「おはよう、「つか」」

「あつ衛さんー! おはよー!」

「さあさあ、早く朝」はん食べちゃつて?」衛さん、コーヒー、もう一杯どうですか?」

「いただきまーす」

「衛さん、朝からじうしたんですか?」

「衛はうきひにてチラシを渡した。

「「つか」を誘いに来たんだよ。好きかな? つて思つてた」

「バラ展?」

肩越しに母親が覗き込んできた。

「せつかくだから行つてらつしゃい、今日またおひつけんも進吾  
もないし。楽しんでいらつしゃい」  
「はいー!」

植物園に着くと、チラシの効果もあってか、そこは人であふれてい

た。

「うわっ、人がいっぱい」

「入場券を買ってくるから、うさこはここで待っていてくれ」  
それだけ言つと、衛は人の列に向かつて走つていった。うさぎは空  
いているベンチを探し、そつと腰掛ける。

「やあ、子猫ちゃん」

「はるかさん、みちるさん！」

いつもの優雅な二人が近づいてきた。

「」きげんよう、うわぎ。奇遇ね。あなたもバラ展がお目当てかし  
ら?」

「はい」

はるかが辺りを見回しながら、不思議そつに聞いた。

「おや? 今日は一人かい?」

「なわけないじゃないの、はるか。休日こんな場所にいるのは、デ  
ートのカップルかハートだけよ」

みちるがクスリと笑う。

「デートかい?」

「ええ、まあ。衛さんと一緒に。今、券を買いに行つて  
うさぎのまつすぐな言葉に、はるかは微笑んだ。

「じゃあ、僕達は退散しようか、みちる」

「恋人達の一時は邪魔したくはないですからね。」きげんよう、う  
さぎ

みちるは強引にはるかを引っ張つていく。

「つたた…いたいよ、みちる」

「そう?」

みちるはいたずらっぽく、はるかを見上げる。

「もつと、優しくしてほしいな」

「よくつてよ。後で一人きりになつたらね」

「まつたく、あの二人は…」

ルナは去つていくるか達を木の上から見つめながら、思わず苦笑した。

「おい、ルナ」

隣のアルテミスに言られて、下を見る。衛がちょうど戻ってきたところだった。

「すまない、待たせたな。かなり混んでいて…。行こうか、うさこ？」

うさぎは立ち上がり、衛と二人で植物園の中へと歩いていく。

「こうして見ると、ぜんぜん前と変わりないのにな…」

アルテミスが呟いた。

「苦しんで、悩んでいるはずなのに、そんな素振り、ぜんぜん見せなかつたわね」

心配そうなルナの視線の先には、衛とうさぎが入っていた植物園の入り口があった。

「何もしてあげられないなんて……」

「ルナ…。側についてあげる事ぐらいは僕達にだつて出来るさ。側にいてあげる事ぐらい…」

アルテミスはまるで言ひ聞かせるよつこ、何度も繰り返した。

衛とうさぎはゆっくりと植物園の中を廻つていく。

「次はどこに…？ん…？うさこ…？」

温室で衛が振り向くと、うさぎは小さな植木鉢の前で立ち止まつていた。

「見て衛さん。かわいらしい青い花」

衛は近寄つて、うさぎの肩越しに眺め、そして微笑んだ。

「忘れな草だね」

「忘れな草？へえ…」

うさぎは花の名前を繰り返した。

「そうだ、うさご。忘れた草の花言葉、知っているか？」

うさぎは首を横に振った。

「【私を忘れないで】、それに【真実の愛】とこの二つのがあるからしこ  
「くえ～。よく知っていますね、衛さん」

「うさこが前、教えてくれたんだよ」

うさぎは驚いたように目を丸くした。

「私が？」

うさぎはもう一度、青い、小さな花に向き直る。

「せつかあ。【私を忘れないで】それに、【真実の愛】か…」

「いい感じじゃない」

2メートルも離れていない場所から、一人を見守っている人影があ  
つた。正確には、うさぎ達の後ろにある、棚の影からといふ、あん  
まり隠れていない場所。

「元気ないことが多かつたから、心配していただど…」

「さつすが、衛さんつてよね～」

「みんな、や、やっぱりいけないわ、覗き見なんて…」

「あつれえ～？じゃあ亜美ちゃんは、『何故』ここにいるのかなあ  
～？」

まことはいたずらっぽい目でニンマリと笑った。亜美は顔を赤く染  
め、たじたじだ。けれど先頭で覗いているレイが小さな声をあげる  
と、亜美も飛びついた。やはり亜美も好奇心は抑えられないのだ。

「覗き見なんて、感心しませんね」  
肩を叩かれ亜美が振り向くと、そこには思いがけない人物が立つて  
いた。

「せ、せつなさん？！」

驚いた拍子に思わず他のメンバーを押してしまつ。  
「うつ、うわ～？」

「あつあつ？！」

「うわ、みんな押さないで、キヤツ！」

レイがバランスを崩した。そして悲鳴とドタドタといつ物音。

うさぎと衛が驚いて振り向くと、そこにはレイ、美奈子、まことiga倒れていた。一番下になつているレイが不機嫌そうな顔をしている。

「みんな？」

「や、やあ……うさぎちゃん」

とりあえず挨拶をする事にしたのか、まことは軽く手をあげた。困ったように美奈子も笑う。

「ハハ、うさぎちゃん、こ、こんなにちわ

「まじめちゃんも…美奈子ちゃんも…いいから早く降りて…」

場所を植物園内のカフェにうつし、7人は丸いテーブルを囲んでいた。

「あたし達もうせめちゃんを誘おうと思つて、家に行つたんだけど

それ

「衛さんに先を越されていたつてわけ」

「ハハハ…」

「ンマリとするレイに、衛はただ笑うしかなかつた。

「さつきたまたま見かけて、決して覗き見なんて…」

思い切り口を滑らしている亜美を美奈子は大声で遮る。

「う、うさぎちゃん達はもう、バラ迷路行つた？」

「いや、これから…」

「せつかくだから、みんなで行こうよ~」

まことの誘いにうさぎは頷く。

「せつなさんもいかがですか？」

「じめんなさい、私は用事があるのでみなさんで楽しんでいらっしゃいください」

「そつか。残念。じゃあ、こいつか？」

レイはメンバーの飲み物が空になつているのを確認すると、立ち上がりた。

せつなはカフュの前で仲間達と別れると、足早に歩き出した。建物に入り、しつかりとした足取りで廊下を進んでいく。  
そして一つのドアの前でとまり、あたりを確認後、スッと部屋に入った。監視モニターやコンピューターなどが並んでいる。ここは警備室のようだ。

「なんだ、せつなか。驚かさないでくれよ」

入ってきた人物がせつなだと分かつて、はるかは肩の力を抜いた。

「どうでしたか？」

みちるは首を横に振る。

「そうでしたか…。私も大体はまわってみたんですが、何も。あとは…」

せつなは視線はモニターの一つへと向かう。そこにはバラ迷路に到着した仲間達が映し出されていた。

「うわ、全部バラだー」

入り口のバラのアーチを見上げ、うさぎは驚きの声を上げた。

「ほらほら、うさぎちゃん、立つていないで入りましょう！」

先導をきるのは、もちろん美奈子だ。そんな姿にクスリと笑いながら、うさぎも後に続く。

「右よ」

「左だ」

美奈子とまことの声が重なる。メンバーは数度目の分かれ道で立ち止まっていた。

「Jの愛と美貌の女神、美奈子様にまつかせなさい！絶対、右よー！」

「へえ～？どうしてわかるの～？」

まことが疑わしそうに美奈子を見た。当の美奈子は力強く答える。

「カンよ！女の、カン！」

「ずっとこのける、まこと。

「レイちゃんのカンならまだしも、美奈子ちゃんのカンじゃね～？」  
「あーまこちゃん、どうじう意味よ？」この愛野美奈子様もやるとき

や、やるのよ！」

こんな一人のじゃれあいに、一人の笑い声が加わった。見ると「さきが笑っている。目に涙まで溜めているところを見ると、本当に可笑しく感じたのだろう。美奈子とまことも顔を見合させ、二人も一緒になつて笑い出した。

色鮮やかなバラに囲まれ、仲間達は進んでいく。先頭に美奈子とまこと。真ん中には亜美とレイの二人。そして一番後ろに衛と「さきが」。

「今日は本当にいい天気になつてよかつたわね、うさぎちゃん」  
亜美は振り返りながら、つむぎに話を振った。けれど振り返った先には誰もいない。

「キヤー！」

美奈子の悲鳴が響き渡つた。バラがまるで触手のように伸び、彼女の右足を絡め取る。逆さづりなつた美奈子は抵抗できずに、振り回される。

「ハアアアアー！」

まことは飛び出し、「ぶしに力を入れた。まことの助けて呪縛を解いた美奈子は、空中でバランスを立て直すと、ふわりと着地した。

「大丈夫かい、美奈子ちゃん？」

「まこちゃん、ありがとう

「いつたい…」

少し離れていた亜美が走つてくる。

「みんな大変よ、うさぎちゃんたちがいなくなつたの」

四人は顔を見合せた。

「うさぎちゃんが危ない！」

衛とうわざ。四人の後を歩いていたはずだったが、角を曲がったところで一人は四人を見失つてしまつていた。

「みんなとはぐれちゃつたね」

「ゴールで待つていれば、合流できるさ」

少し違和感を感じたが、一人は気にせず迷路を進んでいった。しばらくして一人はバラのアーチをくぐりぬけ、迷路を抜けた。

「バラ迷路クリアおめでとうございます。チェックポイントは通つてきましたか？」

出口にいた男性に声をかけられ、うさぎはチェックシートを渡した。このバラ迷路ではチェックポイントでスタンプを集めると「スタンプラー」のイベントも開催されていた。

「スタンプは全部埋まっていますね？では、景品のバラです」  
うさぎが男性から植木鉢を受け取つた瞬間だった。邪悪なエネルギーがまるで爆発のように広がる。

「うわー！」

とつさに気づいた衛は植木鉢を奪い取つたが、突き飛ばされてしまった。

「衛さん！」

落ちて割れた植木鉢は黒い影につつまれ、形を変えていく。

「ブラック・ローズ！」

変化が終わつた影が、奇声を上げた。妖魔ようまだ。水を求めるバラの根のように、うさぎに向かつて触手を伸ばしていく。いきなりの出来事にうわざは反応することができない。

「デット・スクリーム」

うさぎは誰かの声を聞いたような気がした。落ち着いた、静かな声。触手は光に包まれ消し飛んだ。けれど妖魔は弱つた様子は見せず、

怒ったよつに声を上げた。

「何者!」

「天空の星、天王星を守護に持つ、ひじょう飛翔の戦士。  
セーラー・ウラヌス」

「深海の星、海王星を守護に持つ、ほひよう抱擁の戦士。  
セーラー・ネプチューーン」

「時空の星、冥王星を守護に持つ、へんかく変革の戦士。  
セーラー・ブルート」

「外部太陽系三戦士、新たな危険に誘われて、参上！」

「ウラヌス、ネプチューーン、ブルート…？」

『犠牲者が出るのは知つてゐる』

『それが私たちの使命なのよ』

『その子を殺さない限り、サターンは田覓めます』

耳鳴りに頭痛。さまざまな声がつむぎの頭の中に渦巻く。

「私は…」

「あぶない！」

つむぎはネプチューーンに飛びつかれ、一緒になつて倒れた。つむぎが立っていた場所を、妖魔の触手がまるで鞭のよう地面をえぐる。

「ありがとう」

うさぎのお礼にネプチューンは嫣然<sup>えんぜん</sup>と笑つた。次の瞬間、足首に触手が巻きつき、ネプチューンは引きずられる。

「みちるさん！」

「ネプチューン！――」

ネプチューンの危機に飛び出すウラヌス。

「ワーレード・シェイキング！」

突然、呪縛を解かれたネプチューンの身体は宙を舞う。地面に転がつた彼女をウラヌスは迷うことなく助け起こした。

「大丈夫か、ネプチューン？」

「ええ。ありがとう」

「よく来たな、セーラー・ウラヌス、セーラー・ネプチューン、そしてセーラー・ブルートと言つたか」

その言葉と共にネフライトが戦士達の目の前に姿を現した。身構える戦士達。

「光榮だね、名前を覚えてくれるなんて」

目の前に現れた男性に対し、ウラヌスは挑発的な笑みで返す。

「ふつ」

けれどネフライトは不敵に笑うと、指を鳴らした。バラの壁がうさぎとセーラー戦士達の間に出来上がつていく。

「うさぎさん！――」

ブルートがガーネット・ロープを片手に走り出そうとした。

「あんた達の相手はアタイだよ――」

妖魔が行く手をふさぐ。

「うさぎー。」

「お団子頭！」

壁の向こうで、うさぎの名を呼ぶ戦士達の声が聞こえた。

「みんな！」

「これで邪魔者はいなくなつたな」

「あなたは… いつたい誰なの…」

うさぎは声が上ずりそうになる。そんな様子も気にかけず、ネフライトは続ける。

「それより、お前は誰なんだ」

「私は…」

「知りたくないか？いや、そんな事ないだろ？」「

そう、自分が誰なのか。見える風景。聞こえる声。けれどそれはいまだにもやに包まれ、はつきりとはしない。

「私の事… 知つているの？」

「知つているわ。全て知つていて、セレニティ」

「セレニティ？」

まるで囁くよひご、男は自分を『セレニティ』と呼んだ。セレニティ。その名がうさぎの心の中に波紋を広げる。そう、まるで小石を投げ込んだかのように。小むくとも確かに波紋。男はゆっくつと手を差し出した。

「俺と一緒に来れば、わかるさ。自分の事も、悪夢のわけも。まあ、セレニティ」

『私の悪夢の事もこの人は知つていて…』

うさぎは無意識の内に手を伸ばしていた。ネフライトの手に触れる寸前、うさぎは手を戻す。

「何故ためらう？お前の仲間達は何かを教えてくれたか？何も教えてはくれなかつただろう？何故だかわかるか？」

何も言わない彼女に、ネフライトは淡々と続ける。

「本当は何も知らないからだ。何も。何も知らないから、何も言えない。そしてセレニティ。何故、彼女達が仲間だと言える？もしかしたら本当は敵同士なのかもしけれない」

「みんなが敵…？」

思つてもいなかつた言葉にうさぎは動搖する。  
みんなが敵？

『「つやめりあさんー。』

『「つやめりー。』

『「つやめりー。』

『「お団子屋』

『「つやめりー。』

まるで泡のよひで浮かんでは消える、みんなの笑顔。

「わあ、ヤシーネトヤ」

『「信じてこるー。みんなが守りつとしたりの世界を信じてこる』

「つやめりはハツと伸び伸ばしかけていた手を止めた。明らかな表情の変化にネフライトは目を細める。

「私、やっぱりここにいる」

「何故?」

「確かに今の私には何もわからない。でも……」

「でも……?」

「つやめりは顔を上げ、ネフライトをしっかりと見据える。

「みんなの想いはつそじやないー。だから私はみんなを信じる」

ネフライトはふつと微笑んだ。不思議と、優しさを感じさせる微笑

だ。

「変わらないな、セーラー・ムーン」

地面が揺れた。つやめりはバランスを崩し、膝をつく。いや、地面が揺れたわけではなかった。視界がゆれ、ぼやけてくる。

「…？」

「言い忘れていたが、ここは異空間。変身できないお前にね、少しばかりつらいかもしえないな」

ゆっくりと近づいてくる、ネフライト。

「少し強引だが、ついてきてもらおう」

「…いや…！」

その瞬間、まるでうわさを守るかのよつて、一本の赤いバラが地面に突き刺さった。同時に締め付けていた重い空気も軽くなっていく。

「くつ」

うつとうと現れる、黒いタキシードに身を包んだ彼。うわさを抱き起こす。

「大丈夫か、うわさ？」

うわさは不思議そうに、彼の白い仮面に触れた。

「あなたは…衛さん…？」

「そうだよ、うわさ」

「バーニング・マンダラー！」

詠唱の声が響き、バラの壁が燃え上がった。

「うわさ！」

マーズを先頭に、四戦士達が走つてくる。横のバラの壁も消し飛ぶ。

「うわさ！」

こつちは外部太陽系の三人だ。七人はタキシード仮面とうわさを守るよう、ネフライトとの間にいる。

「形勢逆転のようね」

ヴィーナス。

「まだやるつもりかい？」

そしてウラヌス。

「そうだな、今日のところは退散しよう。また会おう、セレニティ」

ネフライトが消え、うわさはマーズ達に囲まれた。うわさはふと輪

からでると、何も言わず去つていこうとする三人に声をかけた。

「はるかさん、みちるさん、せつなさん！」

呼ばれた三人は振り返る。

「ありがとう」

「うさぎの礼に、三人はそれぞれそつと微笑んだ。

そしてメンバーは植物園の出口にいた。頭のうしろで腕を組みなが  
ら、まことが不満そうに言つ。

「ああ～あ。散々だつたね」

「気分治しにみんなで夕御飯食べに行きましょうよ～。

変わらずのハイテンションなのは、美奈子だ。

「いいわね、どこにしようか？」

盛り上がる三人を笑顔で見つめていると、うさぎは亜美に声をかけ  
られた。

「あら？ うさぎちゃん、衛さんは？」

「売店でちょっと買つてくるから、待つてくれ、つて…  
話をしていると本人が走ってきた。手には紙袋を持っている。  
「すまない」

「衛さん、何を買つてきたんですか？」

亜美の言葉に衛は微笑み、うさぎに紙袋を手渡した。

「うさ！」

「えっ？」

驚きながらも、うさぎは紙袋を受け取り中身を取り出す。まじとは  
亜美の肩越しに覗きながら言つた。

「おや？ 忘れな草だね」

「ありがとう、衛さん！」

## 第八話 悪夢はパーの香り？植物園の恐怖（後書き）

レイ：『うわあ、デジで、まぬけで、おつかよこひよこ。加えて泣き虫』

レイ：『でも友達の事になると一生懸命になる、がんばりやれんで…』

…

レイ：『今もわいわい、うわわ』

レイ：『たとえあなたの記憶が戻らなくとも、私はずっと側にいるから』

【美少女戦士セーラームーン Memories  
お化け屋敷にい用心—夢ラングは悪夢の王国】

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第九話 お化け屋敷にて用心一夢のソノヤセ懸夢の王國?!

「おひそ～い、美奈子ちゃん」

走ってきた美奈子とアルテミスに、レイは声をかけた。

ここは火川神社。

「うひめ～ん！」

走ってきたはずなのに、息も切らさず美奈子は謝った。遅刻常習犯の美奈子にどうしては、もづ挨拶のようなものだ。レイも本気で怒っているわけではない。

「みんな集まつてくれたみたいね」

ルナが見回す。亜美とうさぎはない。

「今日は亜美ちゃんの番だつけ」

「やつ、今日は亜美ちゃんが側にいてくれる。でもこんなこと、ずっと続けていくことはできないから、みんなに集まつてもらつたの」「やつよね～側にいるついたって、限界があるし。ルナ、何か案あるの？」

レイの当然の問いにルナは困った顔になる。

「ないから、困っているのよね…。今のやせかわちゃんは戦えないし

…」

「やせかわちゃんが狙われているのは、わかっているのにね」

美奈子は悔しそうに呟いた。三人は考え込む。ふと、まことが不思議やつに口を開いた。

「そういえば、やせかわちゃんつて…『何を』覚えているのかな？」

「どういふこと、まことちゃん」

「考へてもみなよ。事故のあと、やせかわちゃん、あたし達の事をえわからなかつたんだよ？でも変身した後の姿でも、彼女はあたし達がわかるみたいだし。それに…よくハッとする事があるんだよ、彼女と話していると」

まことの言ひ方と思つたるふしがあるのか、レイも美奈子もつ

なずいた。

「たしかに…」

「そういえば、クレセント・ムーン。一体誰のかしら」  
美奈子の咳きに、二人はまた黙り込んだ。

クレセント・ムーン。

金色の被衣かつきに白い着物。まるで牛若丸のような姿をした彼女。これまで何度も彼女にピンチを助けられていた。

「結局、わからない事ばかりね…」

三人はふっとため息をついた。

「やっぱり、今は彼女を守る事しかできないみたいだな」

アルテミスの言葉に、三人はうなずく。

ふと美奈子が新しい話題を切り出した。

「そうだ、話は変わるんだけどさ、明日、つさきちゃんとちびつちゃんの誕生日じゃん！そこで提案があるんだけど…」

所変わつて、亜美的部屋。

テーブルの上には教科書やノートが散乱している。亜美は本を閉じながら、つさきに言った。

「ちょっと一休みしましようか？」

本を置くと立ち上がり、ジュースを持ってくる。

「亜美さん、ごめんなさい。私の勉強につき合わせちゃって」

「私はぜんぜんかまわないわ。中三の頃、だって、みんなでレイちゃん家で勉強会をしていたのよ」

申し訳なさそうにするつさきに、亜美は明るく答えた。

「みんなで…勉強会？」

「ええ」

「ねえ、亜美さん」

「なあに？」

ふと、つむぎはグラスを置くと、亜美に訊いた。

「亜美さんが、セーラー・マーキュリー。

美奈子さんが、セーラー・ヴィーナス。

レイさんが、セーラー・マーズ。

まことさんが、セーラー・ジュピター」

つむぎの意図がわからず、亜美は静かに彼女の言葉に耳を傾けた。

「はるかさんが、セーラー・ウラヌス。  
みちるさんが、セーラー・ネプチューン。  
せつなさんが、セーラー・ブルート。  
ほたるちゃんが、セーラー・サターン。  
そしてちびうさ。あの子は……セーラー・ちびムーン」

つむぎはそこまで言つて、またグラスを口に運ぶ。そして恐る恐ると疑問を口にした。

「私も……セーラー戦士なの？」

つむぎのまっすぐな目に、亜美は静かにつなずいた。

「ええ、そうよ。つむぎちゃんはセーラー・ムーン」

「私は……セーラー・ムーン……？」

まるで壊れものを扱つかの様に、つむぎはその名前を繰り返した。

「ねえ、亜美さん。私達の事を話して」

突然の質問に、亜美は思わず訊きかえした。

「私達の事？」

「私と亜美さんがどうやって知り合つたのか、亜美さんから見て私はどうだったのか。知りたいの。亜美さんの事。みんなの事。そして……私の事」

「つむぎちゃん……」

あまりにも真剣なつむぎの表情に、亜美は返す言葉がすぐには思いつかなかつた。

真剣で、まっすぐな田。それだけは知り合つた頃から、変わらない。けれど、どこか焦りを感じさせる口調が、亜美は気になつた。

うさぎちゃん、どうしたのそんなに焦つて？

そんな問い合わせ何度も喉まで出掛かり、声になりそうになる。けれど彼女の眼差しがそれを許さなかつた。

もしかして……記憶が戻りかけている？

そんな考えが不意に浮かんできた。根拠は何もない。けれど、思い当たる節はこれまで何度もあつた。

話すべきか、話さないべきか。そんな迷いが亜美を惑わせる。

そして

次の日、廊下で受話器を取ると、亜美は電話に出た。

「はい、水野です。あつ、レイちゃん」

「うさぎ、いるかしら？」

「いめんなさい、昨日うちに泊まる」とになつて、連絡し忘れていたわ

「いるなら、いいわ。お風呂、衛さんが迎えにいく事になつて、これから、彼女、それまで家に引き止めておいて？そして一緒に来て」話の見えない亜美はレイに訊いた。

「彼女のバースデー、夢ラングドでしたのかよ。まつりや、ダメよ？」

レイのいたずらっぽい口調に亜美は笑顔になる。

「ええ、わかつたわ。うさぎちゃん、おはよつ

「亜美さん、おはよつ」

起きて来たうさぎに声をかけ、電話にもびびる。

「じゃあ、また後でね」

「『めんなさい、電話していたの？』

「大丈夫。今、終わつたところだから。今日、みんなと会ひ」と云なつたから。後で衛さんが迎えに来てくれるつて

「えつ？でも私」

いきなりの話に戸惑いを隠せないつむぎに、亜美はそつと微笑みかけた。

「みんなからも話を聞く、いいチャンスじゃないの？」

つむぎは納得したようにうなづいた。

私、もう逃げない。そう決めたから。

何がきっかけだったのか、それは自分でもわからなかつた。でもみんなを信じる、そう決めた時から、つむぎの心には変化が起つていた。同時に湧き上がる焦り。

思い出さなきや、思い出さなきや、思い出さなきや。  
そんな想いを亜美にぶつけたのだった。亜美は逃げずに受け止めてくれた。心が温かくなると同時に、照れにも混じつた笑みがつむぎの口もとに広がる。

「さあ、朝ごはんにしましょ~」

アパートの前で待つていると、赤い車が亜美とつむぎの前に止まつた。車からは衛とちびうさが降りてくる。

「おまたせ、さあ乗つた乗つた」

車に乗り込むと、衛はエンジンをかけた。

「どこへ行くんですか？」

つむぎの言葉に、亜美とちびうさは視線を交わし、小さく笑う。

「ふふつ。着いてからのお楽しみよ」

「さあ、着いたよ」

衛の言葉につむぎは車をおりた。

「...セ...セ...セ...セ...」

駐車場の向こうには観覧車が見える。

「ハヤシラニ・ヨハニ・ハヤシラニ」

ちひけわからせきの手を引き、走り出す。

卷之五十一

走り出す一人を見たがのよには  
衛と亞美は後ろから歩いていく

「あつ  
来た来た」

「トロイ」

全員集まつたのを見ると、レイは確認するよつに仲間達の顔を見て

l  
<

「誕生日……？ 私とちびうさの……？」

「田はあなたとひしむかの謡[田]」

レイコ美奈子。

「みんな、ありがとう。」

ジエットコースターなどのアトラクション。みんなでソフトクリーム。ちびつせと美奈子に手をひかれ、うさぎは楽しんだ。一時だけは心配事も、不安も、焦りも忘れて、心から楽しんだ。

「アーティストの心」

「アーヴィングは、ソロモンに手紙を書いた。」

つてせなた二

「わざわざの言葉に間髪入れず」にレイも続く。

卷之三

「やうかい？」

「じゃあ、行きましょう」

一瞬躊躇するものの、レイが側にいるところと安心したのか、

ちびうさ達はメリー「ゴーランドへと歩いていく。

「まもちゃんも早くう～」

「おじおい、待ってくれ」

「うさぎは息をつくと、ベンチに腰掛けた。

「うさぎ、大丈夫？ すこし疲れた？」

「うん。でも大丈夫」

顔をあげると、レイがスポーツドリンクを差し出してくれている。近くにあつた自動販売機で今買ったのだらう。うさぎに缶を手渡すと、レイもブシコツと言ひ音と共に、自分のドリンクを開け、うさぎの隣に座った。

「ちびうさちゃん以外にも子供みたいにはしゃいでいる人がいるからね」

レイの視線は美奈子へと向かう。その事に気づき、うさぎは小さく笑った。

「ねえ、レイさん」

「なーに？」

「レイさんって、セーラー・マーズなんでしょう？ それでいつも私を守ってくれる。でも……どうして？」

うさぎの言葉にレイはそっと微笑んだ。

「うさぎが私にとって大切な人だからよ」

言つてから、レイは自分でも驚いていた。普段のうさぎにだつたら、こんなに素直には言えなかつただろう。どうしても少しき上ゲの混ざつた言葉になつてしまつ。

「私が……？ ねえ、レイさん。私ってどんな人間……いやどんな人間だつたんですか？」

少し驚いた様子のうさぎに、レイは困ったような笑みを浮かべながら答えた。

「アヤセ……エビで、ねつねつがまごで、味噌で、焼物だ……」

すいぶんな言われように、つむぎは苦笑する。

「けどね。友達の事になると一生懸命ながんばり屋さんで」

「ハイめへんー。つたわニー。」

見ると、衛と共に木馬に乗ったちびうさが手を振っている。レイは立ち上ると、ちびうさに向かつて手を振った。

「今」でも

ホノヒロ留ムハ物語にレトニ書寫した  
。 。

「私にひとつは同じよ。今も世間もわざわざうるさい。たゞえあなたの

讀性本風氣也。一時之利口者，固可取，但不可恃。

私は  
……。

「アラモード」？

「うそ」

「まー」と同期する亜美。視線は衛の背中で眠っているちびうさぐに向かう。遊びつかれ、眠ってしまったようだ。

「えへ？まだお化け屋敷いくんじゃない？」

美奈子ちゃん

まるで子供のように駄々をこねる美奈子。

፳፻፭፻

セタタシ

「じゃあ行こいつ、つたえちゃん！」

美奈子がつたえの手を取り、駆け出した。思わずバランスを崩しそうになるつたえ。

「つわつ 美奈子さん？！」

「ほらほら、つたえちゃん、早く早く！」

そんな姿に苦笑しながらも、一人についていくレイ、亜美、そしてまこと。

「うわ～。結構、気味わるいね～」

お化け屋敷に入り、まことはそんな言葉をこぼした。すると前を歩いていた美奈子がクルリと振り返る。

「大丈夫。大丈夫。この愛と美貌の女神、美奈子様にまつかせなさい。お化けが出てきたって、あたしが追い払ってあげるんだから！」

美奈子は自信満々にガツツポーズをする。

「美奈子ちゃん、頼りにしてるわよ～」

レイの言葉に、美奈子は先陣を切つて歩き出す。

そして次の瞬間、お化けに驚かされ、悲鳴と共にレイに抱きつく、

というのも美奈子らしいのかもしれない。

「まことさん」

「なんだい？」

隣を歩くうさぎちゃんが話しかけてきた。

顔を見ると彼女は慌ててそっぽを向いてしまった。考えがまとまる前に話しかけてしまった、そんな感じがする。あたしはあえて自分から話題を切り出してみた。

「ちゃんづけは、まだ無理かい？」

事故直後に比べると、心を許すようになつてきたけど、相変わらず彼女はあたし達の事を、『さん』づけで呼ぶ。少しだが、寂しく感

じでいたのは事実だ。

「『めんなさい』

申し訳なあひますねあがめさんにおたしは慌てて頭をよこして振

つた。

「謝る必要なんてないわ」

そこまでよくあたしが『くびぐべ』。

あたしひて鋭感だな。

前髪をかきあげ、思わず苦笑する。

わいわい亜美ちゃんと話してたばかりじゃないか。

『多分… ひびきちやん、確認しようとしてるのよ』

『確認？』

『セーラー・ムーン、円の王女、そして田野うわわと叫ぶ自分。<sup>プリンセス</sup>そんな自分が見えないから、今の自分が立っている場所が見えないから、だから余計焦つてしまふんだと思つた。だから、今どきに立つてこるのかを、確認しようとしてこるのだと思つた』

亜美ちゃんとは昨日一緒にいたし。わいわい亜美ちゃんと何か話している様子だった。

「思に出に關しても、同じだよ。焦る必要なんてない。あたしからも話を聞いたかったんだろ？」

直球すぎたかな、と一瞬思つたが、そのままの言葉をぶつけたまる。

「……はい

小さな答えが返ってきた。

「でももうわかっているんじゃないのかな？ あたしの気持ち。わいわいちゃんと何じだと思つよ」

わいわいちゃんはあたしの顔を、考え込むかのようにじっと見つめた。

そして結論に達したのか、違う質問を口にする。

「私、まことさんの事、どう呼んでいたんですか？」

ふと、初めて出会った時の事が蘇る。

あたしが十番中学に転校した一日。中途半端な季節の転校だったこともあり、クラスの中でも、どうしても浮いてしまっていた。まあそれ以上に、前の学校でしでかしたケンカのうわさで、みんなが怯えていた、というのもあるかも知れないけど……。

そんな時だつた。彼女が話しかけてくれたのは。

『ねえ、まこちゃん！』

屈託のない笑顔で、うさぎちゃんはあたしに話しかけてくれた。その笑顔にどれだけあたしは救われたことか……。

「『まこちゃん』、だよ」

「ま、こ、ち、や、ん」

たどたどしく、自分の名を口にするつむぎ、まことが頷いた瞬間だつた。悲鳴が一人を現実に引き戻した。

「レイちゃん？！」

レイが悲鳴をあげるのは珍しい。特に靈感のある彼女が、作り物のお化けで驚くことはまずない。

「つむぎちゃん、待つて！」

まことが動くよりも早く、うさぎは走り出し、前を歩いていた亜美の横をすり抜けしていく。

「亜美ちゃん、あたし達も行くよ」

「ええ！」

角をまがると、少し広めの場所にでた。ダンスホールだ。このお化け屋敷はイベントでもよく使われるため、広く作られている。周りには人が倒れ、真ん中では植物のような怪物が陣取つていた。

「妖魔！」

妖魔は触手を伸ばし、女性のエナジーを吸い取つていて。レイだ。

近くで美奈子が座り込んでいる。

「あたしに任せておいて。スパークリング・ワイド・フレッシュヤー！…」

ジコピターの放った電撃が、触手を焼き切った。レイはむせながら、座り込む。

「レイさん！」

「…私は…大丈夫よ」

駆け寄るつわきに、レイは気丈な表情を見せた。マーキュリーは美奈子を助け起します。

「美奈子ちゃん、大丈夫？」

「『めん、足、やられたみたい』

「怪我人はじつとしている…つわき、美奈子ちゃんを見ていて！」

「レイさん…」

ふらつきながらも立ち上がるレイに、つわきは心配そうに声をかけた。レイは微笑み、ポンっとつわきの頭に手を載せる。

「そんな顔しないの、この泣き虫さんが。この炎の戦士、セーラー・マーズ様がそう簡単にやられるわけないじゃないの」

「レイさん……！」

「マーズ・クリスタル・パワー・マイクアップ！」

炎のような光に包まれて、レイはマーズへと変身する。そしてマーキュリーと共にジコピターを加勢するため、走っていった。

「あたしだって…つづく…セーラー戦士…なのよ…つわき！」

美奈子は無理やり立ち上がりをして、しりもちをついた。右足首が赤くなっている。

「美奈子ちゃん…そんな足じや無理だよ…」

「えつ？」

思いがけない言葉に美奈子はつわきをじつと見た。

今あたしの事、『美奈子ちゃん』、つて…。

本人は気づいていないらしい。つわきは隣に座り込むと、ポケット

からハンカチを取り出した。ハンカチを裂き、包帯のよつにしつかりと美奈子の足に巻いていく。

「うさぎちゃん…」

「うさぎが巻き終わり、美奈子は足を少し動かしてみる。痛みはさつきよりだいぶ少ない。これなら戦える。

「ありがとう、うさぎちゃん」

「無理、しないでください」

「まつたく、きりがないな」

ジュピターは飛びのくと、そう呟いた。触手はいくつも攻撃を当てても再生してしまう。

「いい加減に、しにてほしいわね」

マーズが触手の攻撃を避けようとした瞬間だった。視界がゆれ、反応が遅れる。

「危ない！」

ヴィーナスに飛びつかれ、マーズは一緒になつて倒れた。

「ヴィーナス？！」

「これで、さつきの借りは返したわよ？」

レイがエナジーを吸われる事になつたのは、美奈子をかばつたからだった。

「ちやつかりしているわね」

マーズのいつもの口調に、ヴィーナスはクスリと笑う。

「みんな大丈夫か！」

「この愛と正義の美少女戦士、セーラー・ちびムーンが許さないんだから…」

仲間達の危機を察したのか、ちびムーンとタキシード仮面が現れた。

「妖魔の弱点がわかつたわ！あの赤い石に、エナジーが集まつてい  
る。あれを破壊できれば…」

「よし、私が妖魔をひきつけよ。その間に頼む」

タキシード仮面が飛び出した。

「みんな、セーラー・プラネット・アッタクよー！」

ヴィーナスの言葉に戦士達は力を溜め始める。

「ヴィーナス・クリスタル・パワー」

「マーキュリー・クリスタル・パワー」

「マーズ・クリスター・パワー」

「ジュピター・クリスター・パワー」

「ムーン・クライシス」

タキシード仮面が飛びのいた。五つの力が一つになる。

「セーラー・プラネット・アタック！！」

まばゆい光が妖魔を包み、同時に弱点の赤い石が割れた。まるでもやが晴れていいくように、妖魔の出現で重くなっていた空気も軽くなつていく。

「やつたー！」

妖魔が消えたのを見ると、ジュピターが嬉しそうにガツッポーズをした。

戦士達が息をつくと、パチパチという手を叩く音があたりに響いた。

「誰！」

声が響き、拍手をした主が姿を現す。

「さすがだ、セーラー戦士達よ」

ネフライトの登場に身構える戦士達。

「やる気？」

強気に構えるのはジュピターだ。

「あなたは一人。不利よ！」

「たしかに俺は一人。そつちはセレーネティをいれて七人。けれど、

それが必ずしも不利とは限らない。マークュリー「

マークュリーの言葉にもネフライトは不敵な笑みを崩さない。まるで勝利を確信しているかのよう。

「どうこうこと…」

「どうせ、負け惜しみにきまつていいるさ」

その言葉と共にジユピターが飛び出した。得意の格闘戦に持ち込もうという考え方らしい。マーズとヴィーナス、そしてタキシード仮面もジユピターの援護のため交戦を始める。四対一という不利な状況にもかかわらず、ネフライトは華麗に攻撃を避けながら、反撃をする。

マークュリーは戦闘には加わらず、ゴーグル越しにあたりを見回した。ポケットコンピューターで分析も始める。

ネフライトの含みのある言葉がこだまのよう、脳裏で繰り返される。何か、何があるはず。

ふと、ゴーグルが反応した。さつきまでなかつた反応。エナジーが一点に集中してくる。

「もらつた！」

勝ち誇ったようにネフライトは叫び、その姿は空中へと飛び上がる。パチン、と指をならす。

「何？！」

戸惑つたようにあたりを見回すマーズ。

「ちびムーン…！」

「えつ」

マークュリーの悲鳴に、ちびムーンはゆっくりと振り向いた。

ちびムーンはまるで時間が止まったかのように思えた。

キラリと光る、ネフライトが作り出した氷の刃。尖ったその刃がま

つすぐと自分を狙っているのが見える。

避けられない。そう、感じた。

そんな中、視界に入つてくる黒い影。黒い影は田の前で、自分を守るかのように手を広げる。

そして次の瞬間、刃が突き刺さり、黒い影は声をあげた。

「う！」

影が自分に向かつて倒れ、支えきれなくなつたちびムーンは一緒になつて倒れこんだ。

そしてようやく氣づく。黒い影が誰なのか…。

「こやあああああ……！」

悲鳴をあげ、ちびムーンは倒れこんだうわきを抱き起し、大声で何度も何度も呼びかけた。

「うわきー！うわきー！」

「セーラー…ちび…ムーン…、大…丈夫？怪…我は…ない…？」

ちびムーンの呼びかけに、うわきはまゆつくつと皿を開け、一言一言、苦しそうに口にする。

「う…ん…」

「よかつた…」

安心したようじまつとするうわきに、ちびムーンはただうなずく事しか出来なかつた。何か言おうとしても、涙があふれてきて言葉にならない。そんなちびムーンの様子を、うわきは弱弱しくも困つたように笑つた。右手でそつとちびムーンの頬に触れる。零れ落ちた涙が、うわきの手を濡らした。ちびムーンは手をギュッと握り返す。「な…んて…顔…して…いるの…？せい…きの…み、かた…なん…でしょ…？し、つか…り、しな…」

うわきは最後まで言つことができず、意識を失つた。ちびムーンの手から、冷たいうわきの手が滑り落ちる。

גַּתְּנָה

果然とする戦士達。

卷之三

タキシード仮面がつざぎに駆け寄りついた瞬間、いつきの身体は黒いもやに包まれ、消えた。

「うたわ...？」

၁၂၀

「ネフライト、それがあー」

ジエビターが飛び掛つたが、簡単に避けられてしまう。

そんな言葉を残し、ネフライトは消えた。

1  
-  
1  
-

「うれしがさんせりがひ」

マーズはぐくりと膝をつく。果然として言葉が出てこないようだ。

「ノルマニーリー」

## 第九話 お化け屋敷にて用心一夢ワンドは悪夢の王国?!(後書き)

ジュピター :『ネフライアーツアラウナをアリヤンサしたんだ!』

ネフライア :『そりゃ歯み付くな、ジュピター。今回の事に關しては、俺はただの傍観者だ』

マーズ :『おしゃべりは嫌いよ、マーズ・フレイ!』

声 :『私を撃てる? セーラー・マーズ?』

マーキュリー :『そんな...』

「わざわざ...」【美少女戦士セーラームーン Memories】

月を覆う影!闇の剣士の目覚め

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十話 月を覆つ影！闇の剣士の目覚め

「もうすぐキングもお戻りになりますよ」

私が声をかけると、彼女は一瞬遅れて反応した。ここ数日、彼女の体調は良くない。公務にもキングが一人で出ていた。彼女の白い肌が、その白さを増し、まるで今にも消えてしまいそうだ。

「顔色、悪いですよ？ 大丈夫ですか、クイーン？」

彼女は疲れたように、静かに微笑んだ。

「私は大丈夫。マーズ、一人だけの時は、昔のように話してくれて構わないのよ？」

そう言われて、私は一瞬戸惑う。そんな様子に彼女は小さく笑った。

「あなたは昔からそうよね、『レイちゃん』？」

『レイちゃん』か……。

そう呼ばれ、私の心は懐かしさで溢れそうになる。

「スマール・レディはどうしていらっしゃるでしょうね？」

「あの子なら、大丈夫」

彼女は優しい眼差しで、水の入ったグラスを口元に運ぶ。

『な……んて……顔……して……いるの……？ セイ……ぎの……み、かた……なん……でしょ……う……？ し、つか……り、しな……』

白いレースのカーテンが、風でなびいた。近くにおいてあった本が、パタッと音を立てて床に落ちる。私は拾い上げるため、しゃがみこみ、本に手を伸した。パリン。小さな音だった。聞こえてきたガラスの割れる音。私は本を片手に立ち上がり、ゆっくりと振り返った。

「セレーティ、様？」

手から拾い上げた本が滑り落ちた。パタッと音を立てて、本は再び床に落ちる。

ちびうさんは叫んだ。目の前を歩く彼女。一生懸命走つているはずなのに、距離が縮まらない。逆にどんどんと離れていく。

ג' ינואר ۲۰۱۷

ふとうだの姿

を流すその女性は……。

፳፻፲፭

女性がすつと消えた。

「マヤ、マヤー」

ちびうさの部屋。

声に気づき、ルナが部屋に入ってきた。ベットに飛び乗り、うなされているちびつを揺さぶる。

「わびしあちゃん、しつかりー。」

けれど、ちびつは起きない。ふとちびつが寝言を呟いた。

「わざわざここにいるの？」

ちびうさが寝返りをうつた。ルナは反応が遅れ、腕の下敷きになってしまった。

「おひつねちゃん、重いよ。おひつねちゃん」

したはだと川ナには暴れた

۱۷۰

「おじいちゃん

同じ頃、歩道橋の上で行きかう車を眺めている一組の男女の姿があつた。正確には女が歩道橋を見下ろし、男はそんな彼女の姿を見つ

めていた。

「本当にこれでよかつたのか？」

女性の後ろに立っていた男性が声をかけてきた。

「いまさら何言っているの？やつたのはあなたじゃない」「

「だが提案したのは、お前だ」

女性はうんざりしたように、ため息をついた。

「私が信じられないの？」

「安心しろ。話に乗るといった以上、約束は守る。単なる好奇心だ」

女性は面倒そうに口を開いた。

「現状では何も動かない。そう感じたから、あなたに動いてもらつただけ。あの子達にも自覚してもらわないと、何も動かないわ」

女性は振り返り、いたずらっぽく男に笑いかけた。

「そういうあなたはどうなの？あの娘はいいの？せっかく戻つてくれたんでしょう？」

女性の言葉に、男はあからさまに眉をひそめ、顔を背けた。

「過去の話だ」

「そう……」

女性は又手すりに寄りかかると、空を見上げた。街の明かりで星はほとんど見えない。見えるのはボンヤリと光る月だけ。女性はもう一度小さくため息をつくと呟いた。

「まったく……一人で突つ走るから、こんな事になるのよ、うさぎ……」

場所も時も変わって、次の日の火川神社。

レイ、亜美、まこと、美奈子。そしてアルテミスヒルナの一匹。

「そうなのよ。夜もろくに寝ていらないらしいし。寝たと思ったらうなされているみたいなの。それでいて起きているときは、元気そうにしているから、余計つらいのよ

「かわいそう……」

「そう、でも元気出せとは、なかなか言い出しへこし」

美奈子が困ったように言つた。

「まだ衛さんがいるけど、衛さん自身も……」

大切な人が目の前で傷ついたのは知っているのに、その安否がわからない。そもそもかしさ、不安、心配。亜美は無意識の内に唇を噛み締めていた。

「まだうさぎの手がかりは見つからないの！」  
すこしイラついた声なのがレイだ。

「すまない、ぼくも亜美も手はつくしてくるのだけど……」

謝るアルテミスに亜美が切り出した。

「実はその事で、気になることが一つあるの」  
「なんだい、亜美ちゃん？」

「実は……」

亜美は切り出したのは良いものの、まだ少し迷っている様子だ。  
「亜美ちゃん……？」

心を決めたのか、亜美は思い切って話しだした。

「実は今日、ここに来る途中、なるちゃんと会ったの」「なるちゃんって、うさぎの中学の時の……」

大阪なる。違う高校に入り、今では会う機会は減ってしまったが、うさぎの中学校の頃の親友。もちろんこの四人も面識がある。「彼女、さんじょういんまさと三條院正人を見かけたつて……」「それつて……」

「ネフライトの使つていた偽名じゃない！」

レイが驚いたように声をあげた。

ネフライトとなる。何があつたかは割愛するとして、お互い、面識はあつた。いや、面識以上の関係だった、と言うのが正確だらう。そんな関係だった以上、見間違いという可能性は少ない。

「女人の人と一緒にいたという話なんだけど……」「もしかしてうさぎちゃん？！」

「それはわからなかつたらしいの。けど一人を見かけた場所が問題なのよ……」

亜美は小さなため息をついた。

「どこなのよ、それは…」

まるで知るのが怖いかのよつて、レイがゆつくつと疑問を口にする。

「ここ…なの」

「そんなはずないわ！それなら私が…」

「わかつているわ！」

取り乱しそうになるレイを亜美は大声で叱った。

「だから、気になるのよ」

「実は私も気になることがあるのですが…」

突然の声に振り返ると、せつなとほたるが立っていた。

「つてうわ？！せつなさんにはたるちゃん？」

「いつたい、いつからそこ…」

相変わらず神出鬼没な二人である。

「せつなさん、気になる事とは…」

先を促す亜美。

「実は私達も見かけたのです、つむぎさんらしき方を」

「どこで…」

「十番街にある、ギャラクシービルを」存知ですか？」

「ギャラクシービル…」

まことはまるで噛み締めるよつて、ビルの名前を繰り返した。

「私は十番中学のほうで…」

「十番中学？！」

ほたるの言葉に、そこへ通つていたまことと亜美が反応する。

「もしかして…」

亜美が言いかけた時だった。せつなのが通信機が鳴った。かなりノイズが混じっているが、相手がはるかだと叫つことだけは、どうにかわかる。

「せつな、聞こえるか？十番倉庫まで来ててくれ！お団子頭を……。  
そこで通信は途切れてしまう。

「みなさん！」

「行こう！」

せつなの声に皆は頷き、走り出した。

夕暮れの街を駆け抜けていく。レイ、美奈子、亜美、そしてま」と。  
その後ろにせつなとほたるが、まことほふと、隣を走る亜美に声を  
かけた。

「亜美ちゃん、さつき、何を言いかけていたんだい？」

「みんながうさぎちゃんや、ネフライ特を見かけた場所で何か気づ  
かない？」

「何かつて……」

会話を訊いていたレイが振り返った。

「今はもうないけど、私、ギャラクシービルに入っていた塾に一時  
期通っていたの。その塾は私とうさぎちゃんが知り合つきつかけに  
なった、って言つても過言ではないわ」

亜美の言葉にレイはハツとする。

「…そういうば、私はうちの神社でうさぎに…」

「あたしは十番中学に転校してきたのがきっかけだつたけ…」

まことはその時の事を思い出しているのか、目を細める。

「そして今向かっている、十番倉庫。あそこは私達が初めて、ヴィー  
ナスに会った場所よ」

「一体どういうことなのかしら…」

美奈子は走りながら、静かに呟いた。

倉庫前、そこは不自然なぐらい妖魔であふれていた。中心で戦つて  
いる一人。ウラヌスとネプチュー。背中をあわせ、戦う二人の姿  
は、まるで二人の信頼を表しているかのようだ。

「ワールド・シェイキング！」

ウラヌスが放つた光の球が、敵をなぎ倒していく。けれど、数が減るのは一瞬だけ。すぐに新たな影が現れ、二人を囲む。

「まったく、きりがないな」

うんざりしたように、ウラヌスが言った。そんな様子にネプチューンはクスリと笑う。うんざりした口調でも、彼女があきらめるような人間ではない事を知っている。

「でも戦わなくては、いけなくってよ? だって…」

「わかっている。中には…」

「彼女<sup>あのこ</sup>がいるのですもの」

そう言つてネプチューンは敵に右手に持つたタリスマニ、【ディープ・アクア・ミラー】を突きつけた。鏡から一直線に光が伸び、敵を消滅させていく。

「ネプチューン!」

「ウラヌス!」

隙ができた妖魔<sup>ようま</sup>の包囲網を、マーズ達が駆けてきた。

「おそくつてよ」

「つさぎは?」

「あの中だ」

マーズの問いかに、ウラヌスが倉庫の一つに視線を向かわせる。「私達が敵をひきつけます。その間はみなさんは中に!」「わかった」

ジユピターが頷いたのを見ると、プルートはウラヌスとネプチューンと視線を交わす。

「デット・スクリーム」

「ディープ・サブマージ!」

「ワールド・シェイキング!」

三人の放つた技が重なり合い、敵をなぎ倒していく。

「今です！」

サターンの声に、内部太陽系戦士の四人は倉庫へと駆け込んだ。四人が中に入った途端、まるで待っていたかのように、シャツターが倉庫の出入り口を塞ぐ。

「悪魔でも彼女たちだけ、と言つわけか…おもしろい」

ウラヌスがまるで戦闘を楽しむかのようにニヤリと笑った。そんな言葉にブルートが静かに微笑んだ。

「教えてあげなくてはなりませんね、セーラー戦士たちが彼女達だけではないことを」

倉庫に入った途端、四戦士たちは違和感に襲われた。まるで水中にいるかのように、なんだかフワフワして安定しない。

「みんな気をつけて、空間がゆがめられているわ！」

マーキュリーが叫んだ瞬間だつた。炎の柱が戦士達の足元で突如噴出す。どうにか飛びのく戦士達。けれど攻撃は間髪いれず続く。安定しない空間では、避けるしかない。

「くそっ！」

攻撃できぬもどかしさに思わず舌打ちをするジュピター。そんな時、マーズが飛び出した。

「見つけたわ！」

手には『悪霊退散』と書かれた御札を持つている。

「臨・兵・鬪・者・皆・陣・列・在・前」

マーズの手から離れた御札はまるで、刃のようなくるを切る。

「悪霊退散！！」

御札は何かに張り付き、燃え上がつた。途端に空間のゆがみは消え、戦士達はスタッツと地面に着地する。

「さすがだな、セーラー戦士たちよ」

その言葉と共に現れたのはネフライトだった。

「つむぎちゃんはどこにいるんだ？」

「そう囁み付くな、ジュピター。今回の事に関しては、俺はただの傍観者さ」

ジュピターの言葉にも、ネフライトは不敵な笑みを崩さない。

「どうこいつ」と?!

「無能なジェダイトはお前達に敗れ、四天王の座を失った。そして

新しく四天王として加わった剣士

「おしゃべりは嫌いよ! マーズ…」

詠唱に入るマーズの前に、黒い影が現れた。マーズは目を見開き、言葉を失う。

「私を撃てる? セーラー・マーズ」

ネフライトと同じ軍服に身を包んだ彼女は、そう訊いて来た。

「うそ…」

呆然とするヴィーナス。

後ろで爆発音がするとシャッターが吹き飛び、ウラヌスたちが入ってきた。同じく目を丸くする外部太陽系戦士達。まるで搾り出すかのように、マーズは彼女の名前を口にした。

「う… わ… わ…」

「私を撃てる? セーラー・マーズ」

もう一度彼女が訊いて来る。次の瞬間、マーズは宙を舞つた。壁に叩きつけられ、変身もとける。

「レイちゃん!」

ヴィーナスが駆け寄つた。

「私はそんな名前ではないわ。私はダーク・キングダムの指揮官、セレニティよ」

「そんな…」

絶句するマークьюリー。

「うわ…どうしてなんだい、うわああやん…うわああやん…」

ジコピターの悲痛な叫び。セレーティは不敵に笑つた。そしてジコピターもまた、見えない力に突き飛ばされる。

「ジコピター…くそつ！」

地面に転がるジコピターを見ると、今度はウラヌスが飛び出した。  
手にはタレスマン【宝剣】【スペース・ソード】を持っています。

「ウラヌス、やめてええ…！」

レイの悲鳴。けれどウラヌスはためらわず、セレーティに向かつて剣を振り下ろした。切つ先はまるで見えない壁にあつたかのようこそ、跳ね返りやうになる。

「一体どうしてしまったんだ。彼女達の声すら、もう君には届かないのか…？」

「セーラー・ウラヌス、好きよ、強い人は」

ウラヌスはようやくマーズやジコピターが飛ばされたわけを知つた。セレーティの右手からの波動攻撃。咄嗟に飛びのくが、かすつたのか、足がふらつき思わずしゃがみこんだ。

「ウラヌス！」

ネプチューンが駆け寄る。

ボロボロになつたセーラー戦士達を見て戦意をなくしたのか、セレーティはつまらなさうにネフライドに振り返つた。まるでおもちゃに遊び飽きた子供のようだ。

「帰りましょう、ネフライド」

しうがないな、そんな表情をすると、まずはネフライドが消える。

「待つて、うわざわ」

振り向くと、ボロボロのレイが無理やり立ち上がつた。左腕を押さえ、立ち上がる際にも苦痛で顔をしかめる。

「今日はほんの挨拶代わり。また会いましょう、『レイさん』」

それだけ言うと、セレーティも姿を消した。レイは足がもつれ、倒れこむ。田からあふれ出てくる大粒の涙。そしてレイの悲痛な叫び

だけが、倉庫の中にいました。

「ハヤシ……」

## 第十話 月を纏ひ影一闇の剣士の田観め（後編）

「わわわ…『レイちゃん』

レイ …『わわわ…』

声 …『私を撃てる、ヤーラー・マーズ?』

レイ …『わわわ…』

声 …『ヤーラー・マーズ!今は迷わないで戦つて!』

レイ …『私は…』

「わわわ…【美少女戦士セーラームーン Memorial】  
争るべきものため!レイ苦悩の選択」

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十一話 守るべきものため！レイ計画の選択

「セレニティ！」

その言葉に間を置かず、呼ばれた本人が現れた。  
皮肉だな。ベリルはそう思つた。一番滅ぼしたいと思つていた顔が  
目の前にある。だがセレニティを引き入れたことで、私は以前の力  
を取り戻しつつある。彼女の心を蝕む闇のエナジーが、私に新たな  
力を与える。

「何でしうか、クイーン・ベリル様」

「まだまだセーラー戦士共への復讐は始まつたばかり、完全なる復  
活のため、エナジーを集めてきておくれ」

「よろこんで」

その言葉と共にセレニティは消える。ベリルは表情を変えず、側に  
いるネフライトに声をかけた。

「ネフライト！」

「はっ」

皆まで言わずに、ネフライトはセレニティを追いつき消えた。い  
や、実際追つたのだ。闇のエナジーで洗脳したとは言え、仮にも彼  
女は月の王女<sup>プリンセス</sup>。どんな事で洗脳が切れるかわからない。  
いや、洗脳が切れても別にかまわない、ベリルはそうも思つてもい  
た。洗脳が切れた時、認識するであろう。自分が仲間達と敵対した  
という事実。その事実は消えない。ただそれだけの事が、彼女を悲  
しみと絶望のどん底へと突き落とすのに違いない。

「それまで存分に私のために働いてもらつぞ、セレニティ」  
「まったく、皮肉な話だ。

ベリルはもう一度、そう思つた。

声が聞こえた。

「あついたいた。あの子よ、靈感少女  
誰かの声。心がうずく。

「なくした財布とか、すぐにに言い当てちゃうんだって~

「うわ~ 気味悪~い~」

気にしちゃ駄目、そう自分に言い聞かせてきた声。

昔から私はカンが鋭かつた。人から見たら、鋭すぎたのかもしれない。だから気味悪がれること多かつた。

ふと違う声が響く。

「レイイ、ちゃん」

目の前で笑う彼女。

屈託のない笑顔で私に微笑みかける。私は手を彼女に伸ばした。触れるど、彼女の幻影は消える。今度は右から声が聞こえてきた。見ると驚いた顔をしながら、私を尊敬の眼差しで見つめる彼女がいた。

「すつご~い、レイちゃんってがんばり屋さんなんだあ~?」

あまりにもまつすぐな表情に私は苦笑するしかない。

「レイさん」

またうわざの姿は消え、違う幻影が再び現れる。自分を『レイさん』と呼ぶのは、記憶をなくしてからの「うわざだ」。  
そして……。

「私を撃てる、セーラー・マーズ?」

軍服に身を包む彼女。『氣づく』とレイはマーズの姿だった。ゆっくりと構える。この構えは……!

「マーズ……」

やめて! 身体が言つことを利用かない。

「フレイム……」

標的をつねりに定める。

「スナイパー」

「やめてええ……」

レイは叫び声を上げ、ガバッと起き上がった。  
一瞬、自分がどこにいるのかわからなくなる。

「夢…か…」

レイは近くにあったクッションを抱きしめ、顔をうずめた。

「つかれ……」

その日の午後。

レイは美奈子、まじと、亜美と共にクラウンに座っていた。まじと

と美奈子の膝にはそれぞれアルテミスとルナが座っている。

「ダーク・キングダムの指揮官……」

美奈子が呟く。どうしても衛が洗脳されていた時の事が重なってしまつ。

「ちびうせひやんには言わないほうがいいだろ?」

「やうね、うわぎひやんとは戦わせたくないのですし」

まことの言葉に亜美が同調する。

「レイちゃんもそれでいいだろ?」

上の空で反応しないレイに、美奈子がもう一度声をかけた。

「レイちゃん……」

「あつごめん、聞いていなかつた」

「困るなあ、しつ……」

口を開こうとするアルテミスを、美奈子は慌てて押さえ込んだ。

「「めん、私、帰るね」

レイは立ち上がりると、クラウンを出て行った。

「何をするんだ、美奈」

抗議をするアルテミス。

「レイちゃんの気持ちもわかつてやれよ、アルテミス」「まことかが悲しそうに笑う。外を見ると、むすびレイが出てきたところだつた。

「なんだかんだ言つてうさぎちゃんの事、一番気にかけているのはレイちゃんなんだからさ……」

レイの姿を見送りながら、まじとはやつ笑いた。

レイ、しつかりしなさい。自分に何度も叱咤する。でも……。

「きやつ」

考えこんでしまつていたのがいけなかつたのだらう。角を曲がる時、人影とぶつかつてしまつた。宙を舞うスケッチブック。中からもいろんなイラストが道に散らばる。

「いたたた……」

相手は女性だつた。歳はレイより上、せつなぐらいだらうか?

「うわつごめんなさい。大丈夫ですか?」

レイは慌てて立ち上がると、女性に手を差し出した。

「ありがとう」

一人で散らばつたイラストを拾い集めていく。

「あちやー、これは使い物にならないわね……」

大体は埃を軽く払うぐらいですんだのだが、一枚はちょうど水溜りに落ちてしまつた所為か、ビショビショだ。

「じめんなさい。私……」

小さくなるレイ。女性はいたずらっぽい目で、レイの顔をじつと見つめた。

「…………」

「はい?」

「あなた、モ『テルになつてくれない?あなたを見ていたら、なんだ

か良い絵が描けるような気がしてきた

「モデル？えつ？」

思いがけない申し出に、レイは間の抜けた返事しか返せない。

「あつ、自己紹介がまだだつたわね。私は、月影夢見。<sup>つきかげゆめみ</sup>一応、画家、つてとこかな？」

「私、レイです。火野レイ。でも私がモデルだなんて……」

「おねがいっ！」

しぶつていると、夢見は手を合わせ頭を下げた。

「そうしたら、これも忘れるからでー？」

彼女は上目使いで、せりげなく濡れたイラストを持ち出した。痛い所をつかれ、レイは苦笑しながらも頷くことしかできなかつた。一人、いや二人の顔が思い浮かぶ。まったく、どこかの誰かさん達みたいだ。

「……わかりました」

「ありがとーー！じゃあ、そつやへうひに行きましょーー！」

「時空のゆがみができています。セレニティ様がお倒れになつたのは、多分それが原因でしょう」

「どうこうとか、説明してくれませんか、ブルート様」

ヴィーナスの言葉に、ブルートはつらそうに眉をひそめた。そして咳く。

「過去が・・・・・変わろうとしているのです」

彼女の言葉に、他のセーラー戦士達は絶句する。

「そんな・・・まさか・・・」

「クイーンに影響するほどの危機<sup>クライシス</sup>が過去で起きているといつのか？」

「！」

ウラヌスも動搖を隠せない。ざわめく部屋にて、黙っていたエンドレイ

ミオンは口を開いた。

「落ち着きたまえ。君達が慌ててビリするー！」

部屋は再び沈黙に包まれる。

「プルート、続きを頼む」

「わかりました」

プルートは頷くと、説明を続ける。

「今、ウラヌスは『クイーンに影響するほど<sup>クライシス</sup>の危機』と言いましたね？けれどそれは少し違います。時空のゆがみが生じているのは、セレニティ様の存在。過去の世界のセレニティ様の身に、何かが起きたと考えるほうが妥当だと思います」

エンディミオンはその言葉に考え込むかのように黙り込んだ。沈黙に耐えられなくなつたのか、ジュピターが声を上げた。

「くそっ！あたしたちには、何もできないのか！」

見ると、彼女は悔しそうに右手を握り締めている。

「大丈夫だよ」

まるで語りかけるように、エンディミオンは微笑んだ。

「でも、エンディミオン様！」

「セレニティには、多分観えていたのだろう。だからスマール・レディを過去の世界へと送り出した。私達も信じようじゃないか。過去の世界の君達を。スマール・レディを。セレニティもきっと、信じている」

リビングに入るとそこは絵で一杯だった。

「す」「……。これ、全部夢見さんの作品ですか？」

「そうよ～。あつレイちゃん、紅茶で良い？」

「はい！」

キッチンから呼びかけられ、レイは答えた。そしてまるで展覧会を周るかのように部屋を周っていく。なんだか幻想的な絵が多い。初めて見るのに、なんだか懐かしい気分になる。ふと一枚の絵に目が止まった。月明かりに照らされているテラスで踊る、一組の男女。二人だけの舞踏会。自然と、王子と王女、そんな言葉が思い浮かん

プリンス プリンセス

でくる。

「ひさぎ……」

「気に入った絵でもあつたかしら?」

振り向くと、夢見がテーブルに紅茶を運んできたところだった。  
「友達に似ていたので……」

夢見がスケッチブックを持つてきたので、レイは椅子に座った。自由にしていて、そう言われレイはカップを口へと運ぶ。

「その友達、うらやましいなあ~」

「えつ?」

スケッチブックから目を上げず、夢見は淡々と鉛筆を動かしながら答えた。

「さつきのあなたの様子。それを見ていれば、あなたがどれだけ想つていてるのか、わかるわ

そんなに自分がわかりやすく感情をだしていったかと思つと、レイは照れくさに思わず顔を赤らめた。

「でも、悲しい目。何か悩んでいる目」

「すごいですね、何でもわかっちゃう」

レイはもう苦笑するしかなかつた。私ってこんなにまっすぐに感情を出せる人間だつだけ……? そしてそつと心の中で首を振る。それはあの娘がいてくれたから。

「ねえ、レイちゃん? 画家つてね、心を描くのが仕事だと思つ。それが自分の心の事だつてあるし、モデルの心の事もあるわ」「心を……」

「あつ~めん、ちょっと動かないで?」

スケッチができてきたのか、レイは慌てて姿勢を直した。

「夢見さん? もし夢見さんの友達が、間違つたことをしていたら、どうします?」

「まずは話し合おうと思つわね」

「でも話合えるような状況じゃなかつたら?」

夢見はスケッチブックを隣に置き、少しだめてしまつた紅茶を手に

取った。

「難しいわね……」

ゆっくりと紅茶を口に運ぶ。

「そうね、だつたら嫌われてもいいから、ひっぱたくと思つわ。そ  
うして伝わる事もあると思うし」

「強いんですね、夢見さんは」

そんなレイの言葉に彼女はクスッと笑つた。

「強くないわよ、私は。でもね、レイちゃん……」

「……？」

「人は大切のものためなら、いくらでも強くなれるものよ」

夜、玄関前で一人は話をしていた。

「ごめんね、こんなに遅くまで引き止めちゃって」

「あっいや、楽しかつたですよ。夢見さんとお話できて」

「あつそうだ」

そう言って夢見はもう一度、家に駆け込んだ。手にチラシを持って戻つてくる。

「今度の土曜、展覧会があるんだ。良かつたら来て?」

「はい、ぜひ!じゃあ、おやすみなさい」

手を振つて夢見は答える。そしてレイが十分に離れてから、静かに微笑んだ。

「おやすみ、セーラー・マーズ」

居間に入つた夢見は、暗がりに向かつて話しかけた。

「レディの部屋に勝手にはいるなんて、失礼よ?」

呆れたような口調に、男性は笑みを浮かべながら姿を現した。肩までの長髪。吸い込まれるような黒い瞳。レイが気づいていたなら、身構えたであろう人物。

「『人は大切のものためなら、いくらでも強くなれるものよ』か

……。ずいぶんと手際がいいじゃないか」

男の言葉に夢見はかすかだが眉をひそめた。

「……」

「別に文句は言つていなさい。ただ意外に思つてな。『彼女』を知つているから、余計にな」

その言葉に夢見はクスッと笑つた。

「前にも言つたはずよ。私は『彼女』とは違つ。だって、私は……」

十番公園の前まで来ると、突然レイは強烈な耳鳴りに襲われた。

「っく」

うさぎが公園に入つていぐ姿が見える。

「うさぎ！――」

幻影だとわかつていても、声をかけてしまつ。そして手を伸ばす。

「行つては駄目よ――」

知らない声が響き、レイは振り返つた。

「誰？！」

耳鳴りは一瞬で消えた。思わずバランスを崩しそうになる。

「みんな、十番公園で妖魔が……」

マークリーからの通信に返事もせず、レイは迷わず公園の中へと走つていく。

広場まで行くと、そこにはすでに何人か倒れていた。そんな中マークの目に飛び込んできたのは、倒れるマークリーの姿だった。

「マークリー！」

助け起こされたマークリーの視線が泳ぐ。そしてどうにかマークの顔を捉えた。

「マーク……氣、をつけて……、敵の、目を……見ては、だ……め……」

グッタリとするマークリーにマークは血相を変えて搔きぶり、彼女の名を呼ぶ。

「マークリー！マークリー！」

「うつでもうやがの姿を重なってしまいます。

「マー・キユリー！」

ふとマー・キユリーが規則正しい寝息を立てていていた。

「寝ちゃった……？」

「アク・ムーン！…」

「危ない！」

状況がわからないまま、マーズは突き飛ばされた。自分の上にクレセント・ムーンが覆いかぶさっている。妖魔の攻撃から守ってくれたらしく。

「今は迷わないで！戦つて、セーラー・マーズ！やられるわよ！…！」今度は短剣が飛んできた。クレセント・ムーンは瞬時に立ち上がり、叩き落す。みると右手には横笛のようなものを握っている。短剣が飛んできた先を見ると、イラついた様子の彼女の姿があった。

「あなた、誰！」

「私は…」

金色の被衣<sup>かつき</sup>がキラリと光る。まるで蝶のようだ。セーラーティに向かっていく、クレセント・ムーン。後を追おうとするマーズは、妖魔に行く手をふさがれた。

「クレセント・ムーン！…つかれ……」

「お前の相手は、ワタシ」

マーズは唇を噛み締めた。相手の技を自分の技で相殺し、よける。うさぎがすぐ側にいるのに…

そんな思いがちらつき、田の前に集中できない。

「うとう……」

「マーズ！マー・キユリー！」

見ると、ジュピターとヴィーナスが到着したところだった。

「二人共、妖魔の目を見てはいけない！眠らされてしまふわ！」

「もうつたあ…」

一人に警告したときだった。一瞬氣を抜いたため、妖魔に肩をつか

まれてしまつ。

「しまつた」

勢いそのまま押し倒され、目が合つてしまつ。まるで何かはじける  
ように、変身が解けた。

「変身が?!」

次の瞬間、レイはまぶしいぐらいの光に包まれる。まるで底なし沼  
のようだ。もがけばもがくほど、身体が沈んでいく。

「レイちゃん!!」

手首を掴まれる。いつのまにか戻ってきたのか、クレセント・ムー  
ンが私の手首を掴み、引きずりあげよつとしている。

「放して、クレセント・ムーン! このままじゃ、あなたまで……」

「放さないよ! 絶対、放さないから! キヤツ」

努力もむなしく、穴は二人を吸い込んだ。

「レイちゃん! クレセント・ムーン!!」

私は落ちていく。

まるで深い海に沈んでいくかのように。ゆっくりと、そして深く。

もつ、どつでもいいや、そう思にかけたときだつた。

『絶対、放さないから』

そんな余裕はないはずなのに、彼女は私に笑顔を見せた。

「クレセント・ムーン!!」

彼女の名前を叫んでから、私はあたりを見回した。

「こは、どこ…?」

「こはあなたの心の中よ」

声に出していなかつたはずの問いに、誰かが答えた。

「クレセント・ムーンは…」

「あの方なら、大丈夫よ。あの方は特別だから」

「あの方…?」

「でもあなたは大丈夫、レイ？」

「私…？」

声は静かに訊いて来る。

「あなたは迷つてゐる。迷つてゐるから、油断が生まる。だからあなたは、ここにいる」

言い返せない。いつもだつたら、避けれた攻撃だつただろ？。けど……。

「彼女とは戦えない？」

困つたよつな、そして言ひ聞かせるよつな口調で、声は私に訊く。

私は……。

うさぎの顔が浮かんでは消える。

私は……！

「レイ、あなたの使命はなに…」

私が何も言わないのに、痺れを切らしたのか、今度は厳しい口調だ。

「私の使命…」

彼女を、王女を、守る事。声はまたふつと優しくなる。

「そう、だつてあなたは、炎の戦士、セーラーマーズなのですもの」

炎の戦士、セーラー・マーズ。でも……。

「私は守れなかつた！彼女を、うさぎを守れなかつた！」

「だから戦えないの？だからあきらめるの？」

その言葉にハツとする。うさぎはあきらめなかつた。タキシード仮面様が洗脳された時も、ちびうさぎちゃんがブラック・レディとして操られた時も、ほたるちゃんが沈黙のメシアとして目覚めた時も……。いつだつてうさぎはあきらめなかつた。

「私は…」

「今だからできる事があるんじゃない？今だからやらないきやいけない事があるんじゃない？プリンセスを守る戦士として、彼女の友達として」

今だからできる事。今だからやくなくてはならない事。

「きっと、彼女もそれを望んでいる」

「もどりなきや」

すると周りの風景が一瞬にして変わった。今まで自分以外何も見えなかつたのに、一面に広がる青い空。そして目の前には声の主が立つていた。少し照れたように、彼女は笑う。

「そんなに驚いた顔、しないで、レイ」

「セーラー・マーズ…」

「私はあなたを守護する者。私は炎の戦士、セーラー・マーズ。私があなた。あなたは私」

「「めんなさい、私…！」

謝ろうとする私を彼女は微笑みながら、さえぎつた。

「覚えていて、私はいつもあなたと共にいるわ。行きなさい、レイ。みんな、待っているわ」

私は大きく頷いた。ゆっくりと息を吸い、そして叫ぶ。

「マーズ・クリスタル・パワー・マイクアップ！！！」

「うわっ」

攻撃がかすり、ジュピターはバランスを崩した。ニヤリと笑う妖魔。妖魔が連續して攻撃をたたみかけようとした瞬間だった。妖魔は炎に包まれ、悲鳴をあげた。同時にジュピターも瞬時に立て直すと、華麗に避ける。

「何者？！」

「私、もう迷わない

「マーズ！！」

凛とした声の持ち主に気づき、ヴィーナスは彼女の名をほつとしたように呼んだ。

「お前は、ワタシの悪夢に囚われていたはず…悪夢から抜け出すことができたというのか？！」

「やつと氣づけたから、私のやらなきやいけない事に。だから…」

「だったら、もう一度悪夢の世界へと落としてやる…」

妖魔は口から炎を吐き出す。

「炎で私と勝負しようだなんて、10年早いわよ！」

マーズはクスッと笑つた。しっかりと妖魔を見据える。

「マーズ・フレイム・スナイパー！！」

マーズが放つた炎の矢は、妖魔の炎さえ身にまとい、妖魔を貫いた。

「リフレーツ・ショー！！」

断末魔をあげ、妖魔は人間へともどつた。それが引き金になつたのか、倒れていたマー・キュリーも気がつく。

「クレセント・ムーンは？！」

マーズの問いには、爆発音が答えた。

「あっちね！」

「行きましょ！」

セレニティは身を翻すと右手のロング・ソードを振り下ろした。それをクレセント・ムーンは横笛で受ける。

「何故？！あなたを見ていると、イラついてくる」

「その理由、あなたが一番わかっているのではないの？」

「あなたに何がわかるというの！」

セレニティは一気に距離をとり、左手をクレセント・ムーンに向ける。クレセント・ムーンは身構える。けれど波動攻撃は襲つては来なかつた。飛んできた炎の刃によつて、相殺される。

「マーズ！」

「おまたせ、クレセント・ムーン」

無事なマーズの姿を見て、セレニティは悔しそうに舌打ちをする。

「しくじつたわね、アク・ムーン」

右手をかざすと、空間に裂け目が生まれた。

「まあ、いいわ。エナジーは十分手に入れた」

「つかまー！」

マーズの呼びかけに、背中を向けたセレーティの動きが止まった。

「私はあなたを守れなかつた。でもきっと、あなたを救つてみせる

！」

「あなたに私が撃てるの、セーラー・マーズ？」

「もう、迷わない。その必要があるなら、撃つわ！あなたが帰つてくる場所を守るため！」

「そう」

それだけ言つと、セレーティは振り向かず、空間の裂け目へと消えた。

「マーズ」

クレセント・ムーンが声をかけてきた。不思議そうに振り返るマーズにクレセント・ムーンは笑顔で続ける。

「ありがとね。吹っ切れたのね？」

「ええ」

この人は相変わらず何でも知つてゐるんだな、そうマーズは心の中で思つた。

「あなたは一体…」

二人の会話を見守つていたマー・キュリーが、クレセント・ムーンに問い合わせた。

「ごめんね、まだ言えない。また会いましょう」

まるでその答えから逃げるよつて、止める間もなく、クレセント・ムーンは去つていた。

「行つちやつた…」

「そうね…」

ヴィーナスの眩きにマーズも頷く。

「あたし達も帰ろうか」

ジユピターが切り出すと、ヴィーナスとマー・キュリーが歩き出す。

マーズはふと足を止め、空を見上げた。  
「きっとまた一緒に帰れるよね、つさわっ。」

## 第十一話 カルベのためーレイ計画の選択（後書き）

美奈子：『今日は戦う事だけでは駄目だと思つの』

美奈子：『強い想いがなければ、ダーク・キングダムには勝てない』

美奈子：『ついでにやんも……帰つてこない』

美奈子：『だから、あたし………』

「ひめりー・【美少女戦士セーラームーン】Memories  
届け、歌に込めた想いー・美奈子、熱唱ー。」

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十一話 届け、歌に込めた想い！美奈子、熱唱！

「はあ～。やつぱりあたしには無理なのかな～？」

ため息をこぼし、美奈子は机に積みあがつた本の山に頭を乗せた。隣には開いたままのノート。書いては消し、書いては消し、結局まだ一行も書けてはいない。

美奈子はもう一度小さくため息をついた。

「お勉強かしら？」

肩越しに声をかけられ、美奈子は飛び上がった。

「うつうわ、亜美ちゃん？！」

開いてあつたノートに気がついたのか、亜美は覗き込むうとする。美奈子は慌ててノートを閉じた。

「珍しいわね、美奈子ちゃんと図書館で会うなんて」

「あ、あたしだって、調べ物ぐらこするわよ」

なるべく見られないように、後ろ手で片付けていく。

「手伝つてあげましようか？」

「大丈夫だから、今終わつたところだから…じゃあね～」

本と筆記用具をまとめて持つと、そそくわと美奈子は逃げるように、その場を後にした。

「へんな美奈子ちゃん」

亜美は美奈子を見送ると、苦笑しながら呟いた。そして自分も目的の棚へと向かうため、その場を後にする。

その後にやつてきた人物がいた。資料を机に置き、座りうつとする。ふと何かに気づいたかのように机の下を覗き込むと、彼女は一冊のノートを拾い上げた。

「あら…？」

「あーびっくりした」

よくよく考えれば、亜美が図書館にいることなぜんぜん不思議ではない。

「勉強好きの亜美ちゃんだし。だつて猫に真珠つて言ひこ」

妙に納得している美奈子に、壇の上を歩いていたアルテミスがつ。

「美奈、それを言ひなら、猫にマタタビだろ」

「そうそう、猫に小判！」

「だめだ、こりゃ……」

美奈子の怪しこことわざは、今に始まつたことではなかつたが、アルテミスは呆れたように首を振る。

「なあ、美奈。相談したらどうだい、みんなに。最近夜もずっとかかりつきりだろ？」

「ううん。これはあたし一人でやりたいの」

心配そうなアルテミスの言葉に美奈子は首を横に振つた。

「どうしてだい？」

「この前、レイちゃんが言ひた言葉、覚えていの？」

「レイが……？」

『あなたに私が撃てるの、セーラー・マーズ？』

そんな残酷なほどに冷たい質問をしたうわきみちゃん。レイちゃんはひるむことなく、まっすぐと答えた。

『もう、迷わない。その必要があるなら、撃つ！あなたが帰つてくれる、この場所を守るため！』

「その時感じたの、レイちゃんの強い想い。あたしも思つたの、負けてられないな～って」

思い出すよつに遠くを見ていた美奈子はアルテミスの方へクルリと振り返る。

「それにね、アルテミス。今回は戦う事だけでは、駄目だと思つ。強い想いがなければ、ダーク・キングダムには勝てない。うわきみ

やんも……帰つてこない」

そつ言つと美奈子はスカートのポケットから、綺麗に折りたたんだチラシを取り出した。

「だからね、このコンテストで自分の気持ち、確かめたいと思つたの」

【シンガーソングライター】コンテスト　あなたの想い、歌つてみませんか？】

「美奈がそこまで考へていいなら、僕はもう何も言わない。でもあまり無理はするなよ？」

「わかつた」

チラシをしまおうと、美奈子はカバンを開けた。

「あ～！ノートがない！」

「図書館に忘れてきたんじゃないのか？」

「あたし、ひとつてくるー。」

「あれ～？ないな～」

机の下にもぐり、あたりを探る。けれども見つからない。

「ここに落ちていると思つたのにな～」

ふと畳の前にノートを差し出された。

「探し物はこれかしら？」

「あたしのノートー！」

美奈子は思わず机の下にもぐつていたことを忘れ、飛び上がつた。

当然ながら、ゴンッといつ鈍い音が続く。

「いたつあ～い

「シー！～」

同時に飛んでくる、つむせー」と言つ図書館利用者の怖い視線。

「あらあら、ijiijiやお話できないから、外出ましょ？」

ノートを差し出した女性が、苦笑しながらささやいた。

「はい……たたた」

美奈子は頭をさすりながら頷いた。

「見つかってよかつた～ありがとウイークこます、えつと……図書館の外にあるベンチに座ると、美奈子はノートを見つけてくれた女性に再度、礼を言った。

「夢見よ、月影夢見」

「ありがとうございます、夢見さん！」

「どういたしまして、愛野美奈子ちゃん」

えっ？ 予想が浮かぶと同時に、美奈子は自分の顔が赤くなつていくのを感じた。そんな美奈子の表情に、夢見はおどけたように謝る。

「ごめん。中、見ちゃった」

「うわ～はずかしい～」

「恥ずかしがらなくとも大丈夫よ、素敵な歌ばかりだつたじゃない？」

美奈子は背もたれによりかかり、空を見上げる。

「やつ言つてもらえると、嬉しいです。でもなかなか満足できるものができないんですね。時間がもつないのに」

「時間がない？」

夢見が不思議そうな顔をすると、美奈子はチラシを取り出した。

「ここに、参加しようと思つてこいるんです。曲はもつできこるのに……」

小さくため息をつく美奈子に、夢見は笑顔でつながす。

「ぜひ聞かせてよ、美奈子ちゃんの書いた曲」

「いいですよ」

美奈子はノートをパラパラとめくつた。出来上がつた楽譜もここにはさんであつたのだ。改めて見つかってよかつたなと実感する。取り出し、美奈子はラララでメロディを歌いだした。すると夢見は聞き入るよつこ、目を閉じた。

「どう……でした……？」

歌い終わり、恐る恐ると美奈子は感想を訊いた。

「素敵な曲！」

夢見は拍手をする。

「でも……」

「でも？」

夢見は何かが引っかかっている様子だ。

「ちょっと直してもいい？」

「えつ？ あつはい」

そんな風に訊かれて、美奈子は楽譜を渡した。夢見は鉛筆を取り出すと、軽く書き込んでいく。

「す」「いー夢見さん、もしかして音楽家さん？」

「違う、違う。ほんの趣味よ。趣味。少し手を加えただけ。まあ、心を形にするってところは似ているかも知れないけどね」

意味が分からず、キヨトンとしていると、夢見は悪戯っぽく笑った。

「さつきのチラシ、よく見て『りん』？」

「えつ？」

思いがけない言葉に美奈子はチラシを取り出し、じっくりと眺めた。イラストの隅に小さなサインを見つけた。『Yume』ヒロー

マ字で書かれている。

「もしかして、この絵を描いたのも」

「『』答。それが私の仕事」

「す」「いー。音楽に絵に。あたしとは大違いだ」

「そんなことないよ。さつきの曲だって私はほとんど何もしてないもの」

夢見は腕を組んで考え込む。

「どう言えばいいのかな？ そつねーはつきさせた、つてといひかなな？」

「はつあつ？」

「やう。せつかくのいい曲なのに、迷いで曇っていた、といえばわ

かるかしら？きっと、何か気にかかる事があるんじゃないの？」

夢見の言葉に美奈子は言葉を失った。不思議な人だ。さつきから、かなり的確に見てている。まさかあたしの迷いまで気がついていたとは、びっくり。

「美奈子ちゃんが誰かのために歌おうとしているのは、曲やノート見ていればわかるわ。そしてその人が、大切な人だとも、よく伝わってくる。後は迷いさえなくなれば、本当にいい曲になるとと思うの」

「どうすれば？」

「それはあなた自身で見つけなくてはならないわ。自分の気持ちを、そのままぶつけてみるのもいいんじゃない？」

心配そうな顔をする美奈子にそう言って、夢見は彼女の背中をポンと叩いた。

「大丈夫、美奈子ちゃんなら、書ける！」

少し離れた木の上で、アルテミスは一人を見下ろしていた。夢見が立ち上ると、美奈子は手を振つて別れた。アルテミスは夢見が座つていた場所へと着地する。

「アルテミス？」

「今のは、一体誰だい？」

「月影夢見さん、ノートを拾つてくれていたの」

「そう」

いつたいなんだつたんだ、今、感じたのは？  
彼女が立ち上がつた時、確かに何かを感じた。

優しい月の波動に似た、何か。

アルテミスはそんな事を考えながら、夢見が消えた方向をずっと見守つていた。

コンテスト当日。

会場はすでに結構な人であふれていた。

「うわ～ 緊張してきたあ～」

「大丈夫、美奈ならできるよー。」

「アルテミスの言つとおりだよ、美奈子ちゃん」

思いがけない声に振り向くと、そこには亜美、まこと、そしてレイの三人が立っていた。

「みんな…」

「本当に水臭いんだから、何も言つてくれないんなんて」寂しそうな顔をするまこと、美奈子はあわてる。

「「めん、あたし……」

「な～んてね！」

表情を口元と変え、まことは美奈子に微笑みかけた。

「わかつているわ、美奈子ちゃん」

「亜美ちゃんまで…」

思わず涙ぐみそうになるのを必死で抑える。

「それにも、どうして……ってアルテミス！」

一人、いや一匹しかいないじゃないの。あたしが彼の名前を怒ったように呼ぶと、案の定、彼は小さくなる。

「おやおや、やつているね」

「はるかさん、みちるさん！」

近づいてくる一人を仲間達は笑顔で迎えた。

「君達も参加するのかい？」

「参加するのは、美奈子ちゃん。あたし達は応援さ」

美奈子の肩をポンと叩き、まこと答えた。

「あついたいた～！美奈子ちゃん～！」

振り返ると、一人の女性が走つてくるところだった。

「夢見さん～」

「夢見さん… つて、えつ？」

美奈子とレイの声が重なる。思わず一人は顔を見合わせた。

「あつ、レイちゃんも。知り合いだつたんだ一人。」うちの二人とは、初対面だね」

「水野亜美です」

「あたしは木野ま」と

「私は月影夢見。よろしくね」

夢見は手を差し出し、亜美とともに自己紹介をした。

「それにも夢見。」の子達と面識あるとは知らなかつたわ  
「お互い様よ、みちるさん」

「えー？ 梦見さん、はるかさん達とも知り合いなんですか？」

大げさに驚く美奈子に、はるかは半ばあきれながら苦笑する。

「オイオイ、美奈子ちゃん。みちるも夢見も、今日の君にとつては、大切な人なんだぞ？」

「えつ？」

はるかの言葉に意図を見出せない美奈子に、夢見は悪戯っぽくみちるに話しかけた。

「しようがない参加者ね。ちゃんとパンフレットに田を通しておかなきや駄目でしょ？ そう思いません、『海王』審査員？」

「みちるさん、審査員なんですか？！」

みちるも負けずに切り返す。

「ずるいわ、私だけ正体をばらすだなんて、『月影』審査員？」

「えへへ！ ！」

みちるの言葉に美奈子は大声を上げた。夢見は大げさに耳を押さえながら笑う。

「美奈子ちゃん、驚き出すぞ。」めん、」めん、隠すつもりはなかつたのよ」

話をしていると、あたりを見回していた男性が近づいてきた。

「海王さん、円影さん。」ちらりといたしましたか。打ち合わせがあるので、控え室のまへくお願いできますか？あつ君は参加者だね。参加者はあつちの部屋に」「

「じゃあね、美奈子ちゃん。がんばってね！」

「きつと大丈夫。信じているから」

そつ置いて、みちると夢見は男性の後に着いていった。

「あれ？ はるかさんは一緒に行かないんですか？」

「僕は審査委員ではないからね。君たちと一緒に客席から見るよ」「じゃあ美奈子ちゃん、応援しているからね…」

「うん、あたし、がんばるから！」

美奈子はまるでモテルのようにクルリと回ると、仲間達にウインクで返した。

そして本番。

次だ。進行役の声がマイクを通して、はつきりと聞こえる。

「次は五番。愛野美奈子さん！」

その声と共に、舞台の上に出て行く。

「同じくコメントをいただいています。『今は少し遠くに行つてしまつた友達の事を思つて、書きました。きっとまた一緒に笑える日が来ることを信じて』。では愛野美奈子さんで『月の光』」前奏が流れ、歌いださつとした瞬間だった。いきなりライトが消え、会場は暗闇に包まれる。

「えつ」

「何？」

「どうしたんだ」

周りから聞こえてくる感心の声。

その瞬間、スポットライトが一点を照らした。  
誰かが立っている。

「はーい みなさーん、今日はアタシのために集まってくれて、あ  
りがとう」

語尾にハートマークをつけ、以上に甲高い声。

「つまみ出せ」

そんな様子も気にかけず、人影は続ける。

「お礼にアタシの取つておきの歌を、聞かせせて、アゲル  
イトルは『妖・魔・に・ラブソングを』」

たる。

一何これつ

密帶に纏つていた観密達は次々と氣を失つてハグ。意識を失わなハ

でいるのは、戦士達だけぐらいだ。それでも耳を塞ぎ、何もできな  
いでいる。

凛とした声が響き、不協和音が消えた。

「今女！」

他の戦士達が変身する中、ネプチューンの隣をウラヌスが飛び出す。

「アタシのコンサートを邪魔する人はお仕置きよ?」

で見るものなら、やってみるんだな」

ウラヌスは一気に間をつめ、格闘戦に持ち込もうとする。けれど妖魔は空中へと飛び上がった。

「逃がさないわよ！ヴィーナス・ラブ・アンド・ビューティー・シヨック！」

妖魔は黄色い悲鳴をあげながら、ヴィーナスの攻撃を器用に避けた。

「もう、あぶないじゃない！」

相変わらず語尾を上げ、ハートマークを連発する妖魔に、ステージに上がってきたジュピターはあきれたように言った。

「こちいち癪にさわる相手だね」

技を繰り出そうとする身構える戦士たち。その時、空間に裂け目ができ、彼女が現れた。

「構わないわ。やつてしまいなさい、アイドール！」

「つさぎちゃん！」

「わっかりましたあ～セレーティ様」

おどけた返事をして、妖魔はひざまずいた。

一瞬、妖魔の姿がぼやける。そして次の瞬間、妖魔は六体に分かれていった。それぞれセーラー戦士たちに飛び掛っていく。

「どうせ、幻なんでしょう！」

そう思つて、油断したのがいけなかつた。

「誰が幻だつて～？」

ヴィーナスは一気に間をつめられ、突き飛ばされた。

「全部、実体？！」

体制を立て直す間をとえず、妖魔がヴィーナスに飛び掛けた。

「ヴィーナス！」

よけられない、思わず顔を背ける。

けれど、攻撃はやつては来なかつた。

目を開けると、光の刃が妖魔のギターに突き刺さつてゐる。妖魔の顔から余裕の表情がなくなるのが、手に取るようにわかつた。刺さつた場所からひびが入り、ギターが碎け散る。同時に妖魔は断末魔を上げ、後を追うかのように消えた。

「だれ！」

まるで金色の蝶のよう、クレセント・ムーンが彼女の前に舞い降りる。

「幻月の戦士、クレセント・ムーン。ここに参上」

「みんな！妖魔の弱点はギターよ！」

次々と倒されしていく妖魔の分身。セレニティは怒ったように手を握り締めていた。

「また、あなたなの？」

そうイラついたように言つと、セレニティはクレセント・ムーンに切りかかっていった。右手にはいつの間にか、剣が握られている。

「あぶない！」

背中を向けていたのにもかかわらず、クレセント・ムーンは瞬時に向き直ると攻撃を受け止めた。

「ヴィーナス！ 歌つて！」

戦いながら、クレセント・ムーンが叫んだ。戸惑うヴィーナスに厳しい言葉をぶつける。

「彼女のために書いたんでしょう……美奈子ちゃん……」

「何、ごちゃごちゃ言つてるの……」

鋭い一閃にクレセント・ムーンは体制を崩した。

「クレセント・ムーン……」

マーズが悲鳴を上げた。

「もうつた！」

新たな攻撃に、セレニティが剣を振りかぶった時だった。

彼女の動きが止まる。見るとヴィーナスが歌つていた。

最初は戸惑いながら小さな声で。でもだんだんと声は大きくなつていく。大きくなつていく歌声につれ、セレニティが頭を抑え、苦しみ始める。

「歌を……やめ……」

「やめては駄目！ 歌つて、ヴィーナス」

「やめて……」

セレニティはヴィーナスに右手を向けた。クレセント・ムーンが間

に飛び込む。セレーティの攻撃を一身に受け、クレセント・ムーンはしゃがみこんだ。

「クレセント・ムーン！」

助け起こうとするヴィーナスの手を乱暴に振り払い、クレセント・ムーンはよろめきながらも、セレーティをしつかりと見据え、立ち上がった。

「あなた自身わかっているはずよ！今のその姿があなたの本当の姿じゃないことぐらい！だから苦しいんでしょ？だから痛いんでしょ？あなたの場所はここよ、うさぎ！」

「私は…ダーク・キングダムの剣士、セレーティよ…」

叫び返す声には、戸惑いが感じられる。畳み掛けるよつてマーズが続けた。

「じゃあ、なぜあなたは泣いているの…」

その言葉にはっとしたように、セレーティは自分の頬に触れた。マーズがそっと手を差しだす。

「おねがい。戻ってきて、うさぎ」

差し出された手に、セレーティが触れようとした瞬間だった。彼女の身体が黒い影に包まれる。彼女は苦しげな悲鳴を上げた。

「うさぎ…」

「うさぎちゃん！」

力なく倒れる彼女のそばへ駆け寄る暇も与えず、ネフライ特が現れた。そして意識のないセレーティを抱き上げる。

「ネフライ特、貴様！」

ウラヌスが飛び出す。けれど間に合わず、ネフライ特は姿を消した。

「うさぎちゃん…」

悲しそうに咳くヴィーナスに、元気付けるかのようにマーズはポンと彼女の肩を叩いた。

「大丈夫。あなたの歌はちゃんと、うさぎに届いていた」

「マーズ…」

「あれつクレセント・ムーンは？」

ジユピターの声に、ヴィーナスは辺りを見回した。あたしをかばつて怪我しているはずなのに。

「ネプチューンとウラヌスもいないわ」

あたしは思わずマーズと顔を見合させた。嫌な予感がする。

当のクレセント・ムーンは会場の外に居た。右肩をかばいながら、その場を後にしようとする。けれど柱の影から出てきた一人が、道を塞いだ。

「今日は逃がさないぜ、クレセント・ムーン」

「あなたの正体を教えてもらひまではね」

ウラヌスとネプチューンの一人だ。痛みで顔を引きつらせながらも、クレセント・ムーンはおどけたように答えた。

「あらら、一人には見つかっちゃたわね」

「教えて、あなたは一体何者なの！」

にらみ合い。お互い、一步も引こうとはしない。

「言えない…って言つたら？」

「少し手荒なまねをしても、聞きたしてやるまさ。ワールド・シエイキング」

先手必勝とウラヌスは、技を放つた。地面を這つていく光の球体をクレセント・ムーンは咄嗟に避けた。けれど怪我の所為か、体制を崩す。

「やめてええ！！」

ヴィーナスの悲鳴に似た叫びが、張り詰めていた緊張感を破つた。クレセント・ムーンが瞬時に二人の間を駆け抜けていく。

「また会いましょう、お二人さん」

「しまつた！」

追いかけようとするウラヌスを、ヴィーナスが呼び止める。

「ウラヌス、ネプチューン…どうして…」

「クレセント・ムーンは私たちの事を何度も助けてくれた。敵じゃ  
ないわ！」

必死に訴えるマーズ。そんなマーズにネプチューは困ったような  
目で答え、ウラヌスは厳しい表情を崩さず、マーズにある問いを叩  
きつけた。

「彼女がネフライトと繋がっていると知つても、同じ事を言えるの  
か、セーラー・マーズ！」

## 第十一話 届け、歌に込めた想い！美奈子、熱唱！（後書き）

「つむぎ……『え～まいちゅうさん、クッキー作るの～？』

まいこと……『あつひやがむちゅん？…』

「つむぎ……『一人でずるこ、ずるこ、ずるい～あたし出番、少ないのに

まいこと……『じつ今度作ってあげるから、機嫌直してよ～』

「つむぎ……（グスッ）ホント？（上田達也）』

「つむぎ……【美少女戦士セーラームーン Memories  
クッキーは思い出の味？まいとの手作りクッキー】

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十二話 クッキーは思い出の味？まじと手作りクッキー

「気分はどうだ」

目覚めたセレーニティはまだ視線が定まらないのか、虚ろな目で俺を見つめた。

「…………ネフ、ライト…………」

「もう少し休め」

ベッドに腰掛け、俺は彼女の額に触れた。彼女のまぶたはどんどんと重くなり、やがて規則正しい寝息が聞こえてきた。俺はペンダントを開け、枕元において。優しげなメロディが流れ出す。

「一時の安らぎ、誰も文句は言わないだろ？」

亜美、美奈子、まこと、レイの四人は珍しく火川神社ではなく、十番公園に集まっていた。ブランコに亜美と美奈子がすわり、まこととレイは側にぼんやりと立っていた。

『彼女がネフライ特と繋がっていると知つても、同じ事をいえるのか、セーラー・マーク！』

『うそ…………』

呆然とするマークに、ウラヌスはうんざりとしたように、顔をしかめる。

『助けてくれたから、敵じゃない、か……。相変わらず甘いな』

『ウラヌス』

そんなウラヌスを嗜めるように、ネプチューンが彼女の名前を呼んだ。そして困ったような顔で、ネプチューンは内部系戦士達に向き直る。

『助けてくれた。それは認めるわ。でもね、私達は見てしまったの、彼女がネフライ特と話している姿を』

『そんな……』

『その時彼女は、私達に気づいた上でソリソリと話した。自分の目的のためなら、何だって利用するって……』

『真意の見えない相手を、君達は簡単に信用できるのか？僕はいやだね』

気まずい沈黙が流れる中、話を切り出したのはレイだった。

「やっぱり私は、クレセント・ムーンが敵には思えないわ」

「私も。何度も私たちを助けてくれた。敵だとしたら、銀水晶を狙わないのはおかしいと思うの」

亜美がつむぎのブローチを眺めながら、咳く。

「だったら目的は？あたしたちの正体も知っている様子だつたし」「まことかが髪を？き揚げる。彼女の考えるときの癖だ。

「もしかして、つむぎちゃんを元にもどそうとしているんじゃない？」

樂観的な見方なのは、美奈子だ。

「だつたら、正体を明かしてくれてもいいのに……」

「そうですね」

レイの咳きに新たな声が会話に加わる。

「せつなさん？！」

「いつの間に……」

相変わらずの神出鬼没つぶりに半ばあきれながらも、レイはせつなに意見を求めた。

「せつなさんはどう、思います？やっぱり、はるかさんやみんなさんの様に……」

「確かに一人が警戒するのは、わかります。でもわかつてください。それはあなた達より大きな力を与えられたものとしての警戒。それが私たち、外部太陽系戦士のつとめでもあり、使命でもあるのです」

その言葉に戦士達はうなだれる。やはり考え方では外部系戦士たちと、ぶつかってしまう事が多い。今までだつて、何度もあった。

「ネフライトと繋がっていた、その事実は見過」せませんが……あそこまで警戒はしなくていいと思つています。彼女からは……そうですね、『セガセガ』と同じエナジーを感じるのです」

「『セガセガ』と回じ……？」

「プレー！みんな！」

そんな声が戦士達に考える間を『えなかつた。

「ここにちわ、ちびうさちゃん」

亜美が少女を笑顔で迎える。

「じゃあ、行こつか？」

まことが訊く。するとちびうさは無邪氣にうなずいた。

「行くつて？」

不思議そうに訊く亜美に、まことは『しまつた』といつ表情で頭をかく。

「あれつ？言つてなかつたけ？あたしの知り合いで料理教室やつている人がいるんだ。あたし、たまに手伝つていて」

「今日、クッキー焼くんだ！」

ちびうさがうれしそうに笑つた。

「で、ちびうさちゃんを誘つたつてわけ」

「ずつる～い。まこちゃん言つてくれたら……」

「つまみ食いに行つたかしら？」

レイの言葉に美奈子はこけそうになる。

「レイちゃん、意地悪う～。あたしは……」

美奈子は『彼女』の名前を口にしそうになつて、あわてて飲み込んだ。

「そんなに食ひ意地、張つてませんよ～だ。そりや、もぢりん食べたいとは思つけど……」

小さく付け足す美奈子にまことは苦笑する。

「『めん、『めん。今度みんなの分も焼くからせ～？今日は見逃して

！』

手を合わせ、上田遣いで美奈子を見る。

「じょうがないな、今日だけよ」

「サンキュー。じゃあ、行こうか、ちびつかわちゃん」

「みんな、またね~」

レイたちは一人を手を振つて見送つた。そして二人の姿が見えなくなつたところで、レイは咎めるように美奈子に言った。

「美奈子ちゃん、気をつけてね」

「じめん」

うさぎがいなくなつてから数日。衛が大学の関係で急にアメリカに飛んだのが重なつたせいか、ちびうさは、うさぎが衛とアメリカにいると思い込みはじめた。最初は戸惑いを隠せなかつた戦士達だったが、その日を境に戻つてくる彼女の笑顔。うさぎが傷ついたことを忘れ、無邪気に振り舞つちびうさは、とうとう本当の事を戦士達は告げられずにいた。

「でも、ずっと隠し通すことはできないわ」

亜美的言葉は、まるで重りのよつに伸し掛かつた。

『…………』

誰かが呼んでいる。

『…………さこ…………』

違う。私は…………。

『うわー』

温かい光に包まれた誰かは、手を差し出した。

ワタシハ…………。

その手に触れようとした時だった。地面が消え、私は暗闇に投げ出された。

「いやあ~」

ガバッと起き上がり、あたりを見回す。

「いやあ~」

「「」」せ……」

自分の部屋。頭が重く、記憶がはつきりとしない。

「私は・・・・・・」

セレニティ。ダーク・キングダムの指揮官。そう、それが私。まるで自分に言い聞かせるように、確認する。

ふと、無意識に動かした右手が硬いものに触った。

「ペンドント・・・・・・・？」

ちびうわとま」との到着を、黄色いエプロンをつけた女性が出迎えた。

「あつまひちゃん、こんにちわ～。可愛らしくお密さんつれてきてくれたのね」

「この前話した、ちびうわちゃん。ちびうわちゃん、この人がここ

の先生の早苗さん」

「ちびうわです。よろしくお願ひします」

エプロンで手を拭きながら、早苗はクスリと笑った。

「ふふっ、こんにちわ。そうそう、私のほうもゲストがいるの」そんな話をしていると、当の本人が入ってきた。

「夢見、こつちこつちー！」

手招きすると、彼女がやつてきた。

「あつ、まこちゃん」

まことに気づき、夢見が笑顔になる。

「夢見さん、こんにちわ」

「えつ?一人共、知り合いたつたの?」

キヨトンとする早苗に、まことは夢見と視線を交わした。

「じゃあ、ちよつどいいわ。彼女の事はお願ひ。ちびうわちゃん、私たちに向ひつよ」

「はーい」

料理教室は無事終わり、夢見は後片付けをするまじと眺めながら、

手帳に何かを書き込んでいた。

「夢見さん、今日はどうでした？」

まことは後片付けの手を休めずに、彼女に話しかけた。すると、夢見は手帳から目を上げた。

「すげく楽しかったわ～。思わず、取材つて事、忘れるべりー」

「取材？」

まことが訊き返すと、夢見は苦笑いしながら手帳を見せた。なにやら下書きのようなものがいろいろと描かれている。

「私がイラストレーターつて事は知ってるでしょ？それでちょっと面倒な事引き受けちゃったのよね…。テーマはお菓子」「へえ～」

「でも私、料理はぜんぜんだから、早苗さん泣きついたわけ」夢見はまるでいたずらが見つかって子供のように、ペロリと舌を出した。

「私がどうかしたって？」

自分の名前だけ聞こえたのか、早苗が不思議そうな顔をしながら、部屋に入ってきた。

「何も～」

わざと含みを持たせて、夢見は無邪気に笑った。

「まったく……」

早苗は今度はまことに向き直る。手を目の前であわせ、上田遣いでまこと見る。まことは『しあわせがないな』、と小さなため息をついた。

「用事が入ったんですね……？」

「そう～じつめん、まこちゃん。向こうの後片付けも頼めるかしら？」

「わかりました」

「うわつもん、こんな時間？じゃあ、あとお願い。バイト料はその分プラスするから～」

やつ血ひで、早苗はあわてて部屋を出て行つた。

「あらり。忙しい人ね」

やつ取りを見守っていた夢見は手帳を置くと、苦笑しながら立ち上がりつた。

「まこちゃん、私も手伝ひわ」

「いいですよ。あたしの仕事だし」

「一人でやればすぐでしょ？早く終わらせて、どうか夕御飯、食べに行こう？」

「はい」

夢見が洗つた料理器具や皿を、まことiga手際よく拭いてしまつていぐ。夢見は洗う手を休めずに、まことに話しかけた。

「まこちゃんって、料理…好きでしょ？」

夢見はまるで、恋人の事を訊くかのように楽しげに訊いてきた。そんな問い合わせにまことは素直に答える。

「好きです」

「やつぱり。見ていてすぐわかつたわ」

「特にクッキーみたいに、みんなで作るのは一番楽しいですよ？クッキーと一緒に思い出もできますし」

あたしは夢見さんの言葉に、自然とみんなでクッキーを焼いた時ことを思い出していた。

レイちゃん、美奈子ちゃん、亜美ちゃん。いつか亜美ちゃんにちびりちゃん。みんなであたしの家に集まつたときの事。亜美ちゃんはあたしが教えることもなく、手際よく作業していく、レイちゃんも結構うまかったよな。美奈子ちゃんは…美奈子ちゃんなりにはがんばつていたと思ひ。けど…やはり彼女らしいといつか、なんと言ひか。そしてうわざわちゃんにちびりちゃん。あの二人はクッキー焼きながらもケンカしていたよな。まったくそつくりな親子だ。

心が温かくなると同時に、当たり前のよううずく。何もできなかつた無力な自分。そしていまだに変化しない現状。

「ふふっ、クッキーは思い出の味つてとこね  
ふと氣づくと、夢見さんがあたしの顔をじっと見て笑っていた。思

い出している間、作業の手も止まっていたらしい。

「はは、ホントだ」

あんな風にまたみんなで一緒に笑うためにも、あたしは……。  
あたしは改めて自分に言い聞かせる。

「あたし、『コミ』出しますね」

この『コミ』は、外にまとめて置くのが決まりになつていて。あたしはビニール袋を片手に、夢見さんに声をかけた。片付けも終わつたので、彼女はまた手帳とにらめっこをしている。

「行つてらっしゃい~」

外はすでに暗くなり、街灯がポツポツと、明かりを灯し始める時間帯になつていた。そんな中、道を走る一人の少女の姿があつた。

「あたしのバカバカ」

彼女は自分を叱咤する。ちびつかだつた。

「忘れ物するなんて。これじゃ……」

まるでバカうそぎと同じじゃない。そう心中で呟いた途端、何故かそれは波紋のように広がつた。走る速度も自然と落ちる。

「つむぎと回じ。

『つむぎ』と同じ。

『つむぎ』。

彼女の名前が何度も心の中で木靈する。

「つむぎは、まちやんとアメリカ。何、変な心配しているんだろ

「ひ

ちびうわせその不安を振り落とそうとするかのよつて、頭を振り、また足を速めた。

「まだ、まこちゃんか早苗先生いるかな～？」  
角をまがると、料理教室が開かれた家が見えてくる。ひみつど玄関のところにまことが立っていた。

「まこちゃん～！」

名前を呼ばれ、道のぼりを見てみると、思いがけない少女が走つてくるところだった。

「ちびうわせちゃん？」

どうしたんだい？ そう続けようとした時だつた。何かが割れるような音に、夢見の悲鳴。庭のぼりに夢見がまるで突き飛ばされたかのように、転がり出できた。

「夢見さん！」

動かないところを見ると、意識を失つてしまつていゆらしご。その後を追つて出てくる奇妙な形の影。

「まこちゃん～！」

「ちびうわせちゃん、とにかく変身だ」

「オルバー」

ロボットのような姿のその影は、意識のない夢見に触れよつとした。

「そこまでだ！」

ジコペターの声に妖魔の動きが止まる。ちびムーンはその間に夢見に駆け寄り、彼女の身体をゆすった。

「夢見さんー夢見さんー」

「あなたたちは……」

少女の姿を視線に捕らえると、頭を抑えながら夢見は立ち上がった。

「ちびムーンー夢見さんを安全などいろい」

「わかつた！」

ジュピターは妖魔を見据えながらも、ちびムーンが混乱する夢見を連れ、その場を離れたのを確認する。

「それにしても、どうしてこんな所に…？」

でもこれで戦える。そう思った反面、腑に落ちないとこりもあった。妖魔が襲い掛かつてこない。それどころか、ジュピターの事も田に入っていない様子だ。まるで何かを探しているかのよう。

「なんだか調子狂うな」

でも動くたびに、巨体がどこかにあたり、周りを少しづつ壊していく。

「考えている暇はないか。早く倒さないと… スパークリング・ワイド・フレッシュヤー！」

稻妻の攻撃を妖魔は簡単に避ける。いや、避けたのは偶然だったのかもしれない。今まで定めつていなかつた妖魔の動きが、狙いをつけたように逆方向へと変わった。まるで、探し物が見つかったかのように、巨体に似合わないスピードで走っていく。

「あつこひ、待て！」

「ジュピター！」

妖魔との追いかけっこの中、後ろからヴィーナスが合流した。妖魔は十番公園の中へと入っていく。そして広場にでたところで、まるで妖魔を挟み撃ちするかのように前方にマーズとマークьюリーが現れた。

「ナイス！」

「おまたせ！」

「みんな、気をつけろーー」の妖魔、なんだか様子がおかしいんだ！」

前方の一人を気にすることもなく妖魔はまた立ち止まり、あたりを見回している。

「私に任せて！」

ジュピターの警告に何かに気づいたのか、マーズが飛び出した。手

には『悪靈退散』と書かれた御札を持っている。

「臨・兵・鬪・者・皆・陣・列・在・前」

マーズの手から離れた御札はまるで、刃のように空を切る。

「悪靈退散！」

御札は燃え上ると、妖魔も姿を変えた。巨大な影はどんどん小さくなり、最後には小さなものがポトリと地面に落ちた。そして子守唄のようなメロディが流れ出す。

「オルゴール…？」

マーズが拾い上げようと近づきかけた時、少女の声が後ろから聞こえてきた。

「みんな…ここにいた~」

振り返るとちびムーンが走つてくる所だった。

「ようやく見つけたと思ったら、もう倒されていたなんてね」

背後から聞こえてきた声に、マーズは思わず息を飲んだ。目の前のちびムーンの顔から血の気が引いていくのが、手に取るようにわかる。彼女は目を大きく見開き、呆然とオルゴールを拾い上げる人物を見つめていた。

「つ…そ…」

「可愛らしい、セーラー戦士ね。あなたとは初めて会うわね」

冷たい微笑を向け、彼女の言葉はちびムーンの心を凍りつかせた。

「う…わ…ぎ…」

「うわぎ？私は、ダーク・キングダムの指揮官、セレニティよ」

「うわぎー！」

走り出しそうになるちびムーンを、マーズは手で止めた。

「今日は別に戦いに来たわけではないわ。私はこれを取りに来ただけ」

セレニティはオルゴールを左手に持ち替え、右手をかざす。一瞬の内に空間に裂け目が出来上がる。

「また会いましょう、セーラー戦士のみんな」

そう言い残すと、セレーネは姿を消した。

「みんな知っていたんだ…」

内部系戦士達は何も言えず、少女を見つめていた。うつむき、握り締めた右手は、かすかだが震えている。

「みんな知っていたのに、何も言ってくれなかつたの？あたしには何も！」

夜の十番公園に悲鳴のような少女の叫び声が響いた。

「ちびうさちゃん…」

かける言葉が見つからず、レイは少女の名前を呼んだ。

「みんなのバカア！…！」

「ちびうさちゃん…！」

涙を溜め走り去る少女の小さな後姿を追いつくことができず、まじまじただ悲しげに彼女が消えた方を見つめていた。

## 第十一話 クッキーは想い出の味？まじめの手作りクッキー（後書き）

はるか：『誰だって犠牲者は出したくない。それで全世界が救われるなら、お前ならいいわー。』

みちる：『それが私たちの使命なのよ』

「たゞ…『タリスマンなんかなくても、世界は救えるー。』

「たゞ…『あたしが、救つてみせるから…。』

【美少女戦士セーラームーン】Memories  
運命の出会いー・ワラヌスの遠い日

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十四話 運命の出会いーウラヌスの遠い日

「みんな、知っていたの……？」

「知っていたのに、あたしには何も教えてくれなかつたの？」

少女は膝を抱え込み、呟いた。

「みんなの……バカ……」

蘇つてくる記憶。

あたしを守るために現れた影。  
あたしを守るために倒れた影。  
あたしの所為だつたのに……。  
全部、全部あたしの所為だつたのに！  
こんな、こんな大切な事、忘れていたなんて……！

「一番のバカはあたしじゃん……」

ポツリポツリと振り出した雨は少女の頬を伝い、地面へと落ちた。  
いや、それは彼女の涙だつたのかもしれない。

大人気なくて、泣き虫で……。

でもまっすぐで、強くて……。

少女の脳裏に彼女の姿が浮かんでは消える。そして……彼女はダーグ・キングダムの指揮官と名乗つた。まるで突き刺さつたトゲのよう

うご、心をうずかせる。

「うせぎ……あたし、どうすればいいの……？」

頼りなく呴かれた少女の言葉は、強くなる雨音に飲み込まれた。

「行つてやらないくても、いいのか？」

男性の言葉に女性は顔を背けた。

「私に……その資格はないわ」

「資格なら十分あるじゃないか。だつてお前は……」

「私と彼女は同じ存在かもしれない。でもやっぱり、私は彼女とは違うわ」

女性は寂しそうに呟いた。彼女の視線の先には座り込んでいる少女の姿がある。

「様はお前がどうしたいか、じゃないのか？お前の顔には、あの子の側にいたい。そうはつきりと書いてあるぞ？」

渋る女性の背中を男性はそつと押す。女性が動きかけた時だった。視線の先に、少女に近づく人影が写り、女性は足を止めた。

ふと、雨がさえぎられた。赤い傘だ。顔を上げると、心配そうに少女を見つめる女性の顔があつた。

「スマール・レディ……」

「パーも知っていたの？」

『『パーも知っていたの？』』その問い合わせ、いろいろな事を示しているのを、女性はわかつていた。申し訳なさそうに、女性はうなずく。『どうして……』

小さな身体を震わせ、まるで搾り出すかのように少女はその問い合わせ口にした。抑えていた声もだんだんと大きくなり、最後には叫びへと変わる。

「どうして、何も言つてくれなかつたのー・どうしてー・

「スマール・レディ！」

女性は濡れることも気に留めず、持っていた傘を投げ出した。雨にぬれ、冷えてしまった小さな身体。彼女の口から発せられる悲痛な叫び。全てを包み込むかのように、女性は彼女をしっかりと抱きしめた。少女は始めは抵抗しようとしたが、やがて抵抗をやめ、小さな声で繰り返し呟いた。

「大っきらい。パーなんて大っきらい……大っきらいなんだから……」

…

「こんな日は……あの日の事、思い出すわね」

「えつ？」

驚いてみちるに田をやると、彼女は紅茶の入ったカップを手に取り、口元へ運ぶところだつた。

「あなたも、あの日の事、思い出していたのではなくて？」

優しい、おだやかな表情でみちるが訊いて来る。僕は苦笑するしかなかつた。いつもの事だが、彼女には敵わないと改めて思う。

「ああ」

そう答えてから、僕はまた窓の外を見た。空は灰色の雲で覆われ、シトシトと雨は降り続ける。

あの日も、こんな淀んだ口だつた。

タリスマンが、そして、聖杯が現れたあの日。

僕達は世界の破滅を阻止するため、聖杯へ導くと言われる、三つのタリスマントを探していた。それを救世主メシアに託すため。僕達は何を犠牲にしても、たとえどんな手段を使っても、タリスマンを手に入れつゝもりだつた。だから僕達は、彼女達ともぶつかりもした。

『誰だつて犠牲者は出したくない、だがそれで全世界が救われるならば、お前ならどうする!』

『それが私たちの使命なのよ』

『タリスマンなんかなくても、世界は救える!』

『あたしが、救つてみせるから……』

『大丈夫。彼女は戻つてくるわ』

まるで僕の心を見通すかのよう、みちるが言つた。そして無意識

の内に握り締めていた僕の手にそっと触れる。

「みちる……」

チャイムが鳴り、みちるが立ち上がった。

「こんな時間に、誰かしら?」

来客の予定はない。僕はみちるの後を追い、玄関へと向かつ。

「こんばんわ、みちるさん、はるかさん

ドアを開けるとそこには思いがけない人物が立っていた。

「夢見?」

「一人を連れてきたの」

彼女の後ろから、せつなとちびつさが現れる。

「せつな? ちびつさちゃん? 一人共びしょ濡れではなくて? …さつ

早く中へ。風邪を引いてしまうわ

みちるが濡れた二人を中へと促し、一階へと連れて行く。

「ありがとう、夢見。一人を送ってくれて」

そう礼を言つと、彼女は笑顔で首を振つた。

「別にお礼を言わることはしてはいないわ。当たり前の事をしただけ。じゃあ、私はこれで」

僕は一礼して、去ろうとする彼女を咄嗟に引き止めた。

「せつかくだから、少しあがつていかないか?」

「…じゃあ、お言葉に甘えて」

居間のソファーに、それぞれ腰掛けてからじばりくすると、みちるが部屋に戻ってきた。

「どうだい、おちびちゃんの様子は?」

「眠つてしまつたみたい。大丈夫、せつなが側にいるわ

「そつか」

「夢見、ありがとう。一人を送つてくれて」

小さく笑うと、夢見は首を振つた。

「はるかさんにも言つたけど、私は別にお礼を言われるよ」など、  
してないわ。当たり前の事をしただけ」

みちるは紅茶を新しく入れ直し、夢見の前にカップを置いた。

「ありがとう」

「ねえ、パー」

小さなスタンダードランプだけが点る、暗い部屋。ベッドで横になつて  
いるちびうさのすぐ側に、せつなは座つていた。

「なんですか、スマール・レディ」

「さつきは」めんなさい、嫌いって言つちやつて……」

せつなはかすかに微笑むと何も言わずに首を振つた。

「パー。あたし、どうしたらいいのかな？」

少女は落ち着いた声で、問いをせつなに向ける。せつなは静かな声  
で、まるで昔話をするかのように語りだした。

「スマール・レディ。人には、それぞれ使命があるものです」

「使命?」

「ええ。それはその人にしかできないこと。私にしかできない事が  
あるように、スマール・レディ、あなたにしかできない事もあるは  
ずです」

「あたしにしかできない事」

思ひにふけるちびうさに、せつなは優しく声をかける。

「だから、ネオ・クイーン・セレーティ様も、スマール・レディを  
この時代に来るよう、おっしゃったのではないでしょ」うか

「訊かないのか?」

一瞬困ったような顔をし、夢見は紅茶を口に含んだ。

「こちおう、踏み入つていい場所とそうじやない場所はわきまえて  
いるつもり」

その言葉に、はるかはかすかに目を細めたが、何も言わなかつた。

代わりに、はるかの隣に座つたみちるが話を続ける。

「そういえば、夢見。せつなと面識あつたかしら？」

「いいえ、でもちびうさちゃんには会つたことあつたし。あの状態の一人を放つておく事は……どうしても出来なかつた」

二人に出会つた時のこと思い出しているのか、夢見はどこか遠くを見ている。そんな彼女の様子に、みちるは素直な感想を述べた。

「優しいのね、夢見は」

今度は夢見が顔をしかめる番だつた。静かに頭を横にふる。その顔がどこか寂しげにも見えたのは、見間違いだつたのだろうか？

「優しくないですよ、私は。目的のためだけに動いてる、いやな人間ですよ」

「意外だな。君がそんな風に自分の事を見ていたなんて」

夢見とはもう何度か話をしたことがある。そしてあの子達とも面識がある。その点から、『彼女』みたいな考え方なのかなと思っていた。まっすぐすぎて、甘い考え方だと思うが、それでも彼女は、全力で何事にもぶつかつていつた。

「おー一人だつたらどうします？何をしても果たさなければならない目的。そんな目的があつたら」

寂しげな彼女の表情に、僕は言葉に詰まつた。何を言えばいい。僕たちだつてそうやつて、戦つてきた。だからこそ、言葉に意味がない事がわかっている。そしてその重圧も、決して軽いものではない事も知つている。僕にはみちるがいつも側にいた。一緒に歩んでくれるパートナーがいたからこそ、僕は今日まで歩いて来ることができた。

「少し喋りすぎたわね。そろそろ、私、帰るわ」

「えつ？」

夢見が立ち上がり、僕は現実に引き戻された。

「もう、こんな時間だし、泊まつていつたら？ねえ、はるか？」

みちるが僕に同意を求めてくる。

「ああ、雨もかなり強くなってきたみたいだし。どうだい？」

雨は話をしている間に強くなり、まるで窓にたたきつけるかのよう  
に降っている。音は聞こえないが、たびたび遠くの空で稲光が見え  
る。

「でも悪いわ……」

「ねつ？」

みちるの説得に夢見はとうとう折れ、うなずいた。

「はるか、部屋に案内してあげて」

「ああ。わかつた」

はるかと一緒に居間を出る直前、夢見は振り返った。

「じゃあ、みちるさん、おやすみなさい」

えっ？一瞬だが、彼女の姿が重なる。反応が遅れそうになり、あわ  
ててみちるは返事をした。

「おやすみ、夢見」

彼女が出て行くと、私は窓際の寝椅子に移った。外は暗く、たたき  
つける雨のため、様子はわからない。

今のは一体…？

私は目を閉じ、集中すると手鏡が現れた。私のタリスマントレーナー・アクア・ミラー】。この鏡はいろいろなものを映し出してく  
れる。けれどこの鏡にも捕らえられないものもたくさんある。たと  
えば、夢見。さつき感じた違和感の正体を知るために、鏡を出したが、  
鏡は答えてはくれない。

私は諦めて、鏡を横に置いた。一瞬だが、夢見の姿につきぎが重な  
つた。顔も、髪も、表情も、どこも彼女とは似ていない。考え方だ  
つてそうだ。けれど……。

「どうした、みちる」

気づくと、戻ってきたはるかが、私の顔を覗きこむように、見下ろしていた。

「不思議なのよ」

はるかがかすかに目を細めた。

「彼女が……夢見が、いつさきに見えたの……」

次の日、はるかはガレージでバイクの整備をしていた。誰かが入つてくる気配がした。振り返らず、声をかける。

「みちるか？そこのレンチを取ってくれないか？」

手を伸ばすと、レンチが手渡された。けれど、予想とはべつの声が返ってくる。

「どうぞ、はるかさん」

「すまない、夢見だつたか」

ボルトを締め、僕は立ち上がった。

「はるかさん、すごいですね。バイクも自分で整備するんですか？」

「まあ、好きだからね。ハンドルを握っているときが一番落ち着く」

「風みたいだから……？」

「えっ？」

彼女が何気なく呟いた言葉に僕は心底驚いた。『風』。僕にとって、『風』は大きな意味を持っている。僕が戦士だから？それもあるかもしれない。けれど、それ以上に、『風』は僕の目標、そして生き方のつもりでもあった。

「ああ。そうだね」

夢見は楽しむかのように続ける。

「はるかさんが風なら、みちるさんは海から？」

朝食が終わり、夢見はふと思いついたように提案した。

「今日、みんなの予定は？近くで展覧会をやるんだけど、来ない？」

「どうだい？せつな、おちびちゃん？」

せつなは笑顔でうなずく。ちびうちは少しためらつてこぬよつだ。

「みんなも来るわよ？ちゃんと謝りなくちや」

夢見の言葉に、ちびうさはようやくうなずいた。

「僕とみちるはちょっとある場所があるから、一緒ににはいけないけど、後から顔を出すよ」

「じゃあ、早速出かけようか、ちびうさちゃん？」

「…うん」

夢見とちびうさに続き、せつなも立ち上がる。はるかと田が合ひつと、彼女はそつとうなずいた。

「では、先に行っています」

「そういえば、まだちゃんと自己紹介していませんでしたね」  
夢見は笑顔でバックミラーを見ながら、後部座席に座るせつなに声をかけた。

「月影夢見です。えつと一応、画家…かな？」

「私は冥王せつなです。天文台に勤めています」

「二人は親戚なのかな？すゞく仲がいいみたいだけど」

そんな夢見の台詞に、せつなが会話に加わった。

「親戚じゃないけど、パーは私にとつて大切な人だよ！」

少女の言葉にせつなが口元がかすかに緩んだ。

「へえ～。うらやましいな。大切な人がこんなに近くにいるなんて」

「夢見さんにもきつといるはずですよ、大切な人」

夢見は目を細めると、じつと前を見つめながら小さく呟いた。

「大切な人か……」

そしてまるで自分に言い聞かせるかのように、しつかりとした口調で言った。

「今は少し遠くに行つてしまつていますけどね。いますよ、大切な人」

人

田の前で静かに眠る少女を見つめ、はるかは驚きを隠せずにいた。

「まさかここまでとはな…せつなの一言つていていた通りだな」

「ええ。あと10年もしたら、きっと…」

少女の姿が彼女の姿と重なる。

病室を後にし、廊下を歩いていく。

「なあ、みちる。彼女、僕の事を『風』と言つたんだ…」

意図がつかめず、みちるは不思議そうに首をかしげた。はるかが続ける。

「君の事は、『海』って言つたんだ…」

「私を『海』…」

会場に着くと、そこには夢見たちを待つ人影が立っていた。

「あつみんな、じつち、じつち」

呼びかけると、五人が近づいてくる。

「あら? そちらの方は?」

いつもの四人の隣に、一人の男性が立っていた。

「地場衛です」

「私は月影夢見。よろしく」

簡単な自己紹介をすませ、夢見は決まり悪いちびうさの背中をそつと押した。

「ちびうさちゃん」

ためらいがちにみんなの前に出る。

「レイちゃん、亜美ちゃん、まいちゃん、美奈子ちゃん、まもりやん…」「めんなさい」

謝る少女に五人は笑顔でうなずいた。

「おかえりなさい、ちびうさちゃん」

「みんな…」

彼女が仲直りができるのを確認すると、私はメンバーに声をかけた。

「私はちょっと向こうに顔を出さなきやいけないから、適当に楽し

んでいいってね」

向かう先はテラスだ。奥のテラスなら人はあまり来ない。なので、お互い、話をしやすいだろう。

テラスに出て、潮風を胸いっぱい吸い込む。空は昨日と変わって、一面の青空だ。個人的に、このテラスは結構気に入っている。手すりの向こうは、断崖絶壁ですぐに海。ちょっとあぶないかも知れないが、ここなら海も空も一番身近に感じられる。手すりに寄りかかりながら、私はじっと風を感じていた。

「月影、夢見さん？」

しばらく待つていると、私は声をかけられた。少女の声だ。私は振り返らず、答える。

「そうよ、土萌ほたるさん」

「私の名前を…」

「あなたはほたるには会った事はないはずですよ？」

もう隠していい必要はない。いや、隠している時間が惜しい。そんな焦りを顔に出さないように、私はゆっくりと振り返った。少女の後ろにせつなが立っている。

「そう、初対面。白状すると、あなたの名前も顔を合わせる前から、知っていたわ、冥王せつなさん。それとも時空の門の守護者とお呼びしたらしいから、セーラー・ブルート？」

予想に反して、彼女の表情はあまり変わらない。いつもることを知っていた？変わりにほたるが私を驚いたように見つめる。

「あなたは、いつたい…？」

「それは僕たちも知りたいな」

声と共に、はるかとみちるも現れた。

「会ってきたよ、本物の月影夢見に。ただ事故にあってからこん睡状態で目覚めないらしいが」

「他人とは思えないぐらい、彼女はあなたに似ていた。そして同じ名前…」

「君は一体何者なんだ！」

しばらくのにらみ合いの後、根負けしたかの様に夢見は肩をすくめた。

「あ～あ。もうそんな事までバレているなんてね。さすが外部太陽系四戦士だわ」

その言葉に四人は身構える。

「外部からの侵入者だったら、私たちには強く感じられるはずです。これはせつなだ。せつなに夢見はおどけたように返事をする。

「だったら、内部なんだろうね？安心して、敵ではないわ」

「敵かどうかは、僕たちが決める」

「私たちが知りたいのは、あなたの正体と目的よ

みちるの言葉に夢見の表情も鋭くなる。

「私の目的は、彼女が戻つてくること。私の正体は……もうじきわかるわ。彼女が戻つてくること、それは私が消えることを意味しているから」

突然、突風が戦士達を襲つた。顔を反射的に背ける。

「きつと、もうすぐ」

突風がやむと、夢見の姿も消えていた。

「消えた…」

考える間もなく、中から悲鳴が聞こえてくる。

「みんな、変身よ！」

悲鳴をあげ、四人目の戦士が絵の中に閉じ込められた。

「マーズ！」

見ると、四つの絵が宙に浮かんでいる。それぞれに外に出ようと必死な様子のマーズ、マーキュリー、ヴィーナス、ジュピターの姿。

「くつ」

横目で閉じ込められたマーズを確認した瞬間だつた。思いがけない方向からの攻撃で、タキシード仮面は体制を崩してしまつ。

「しまつた」

「ゲイジユーツ！」

額をまるでたたきつけられるかのように、タキシード仮面も絵の中に取り込まれてしまつ。

「タキシード仮面様！」

向かい合つた妖魔がニヤリと笑つた。やられる……！

「ワールド・シェイキング！」

妖魔とちびムーンの間に張り詰めていた緊張感を、光の球がなぎ払つた。妖魔は飛びのくと、怒つたように叫ぶ。

「何者！」

198

「天空の星、天王星を守護に持つ、ひじょう飛翔の戦士、セーラー・ウラヌス」

「深海の星、海王星を守護に持つ、抱擁の戦士、セーラー・ネプチューーン」

「時空の星、冥王星を守護に持つ、変革の戦士、セーラー・ブルート」

「沈黙の星、土星を守護に持つ、破滅と誕生の戦士、セーラー・サターン」

「外部太陽系四戦士、新たな危険に誘われて、ここに参上……」

「みんな……！」

「お待たせ、おちびちゃん」

ウラヌスはワインクをし、ちびムーンに笑いかける。

「忌々しいセーラー戦士達ね。ゲイジユーツ、やってしまいなさい！」

「うさぎ……」

声と共にセレニティが現れた。

「危ない！」

ネプチューンはいきなり影に飛びつかれ、一緒になつて倒れる。間髪おかずに、頭上を妖魔の攻撃がかする。

「ありがとう」

礼を言うと、彼女は照れたように微笑んだ。

「また、あなたなの？！クレセント・ムーン！」

「彼女の事は私に任せて！」

そう叫ぶと、クレセント・ムーンは駆け出していく。二人はぶつかり、また距離をとる。クレセント・ムーンがテラスへと飛び出すると、セレニティが後に続いた。

「うさぎ！」

後を追おうとするちびムーンを、サターンが厳しく呼び止める。

「妖魔が先よ！ちびムーンも手伝つて！」

一瞬戸惑いながらも、ちびムーンは妖魔を見据えた。

「デス・リボン・レボリューション！」

「デット・スクリーム！」

「ピンク・シユガー・ハート・アタック！」

サターンの技が妖魔にまとわりつき、ブルートとちびムーンの技が重なった。妖魔が消滅すると同時に、囚われていた戦士達が絵の中から解放された。ちびムーンは振り返らずに、まっすぐとテラスに駆け出していく。

「スマール・レディ！」

ブルートもあわてて少女の後を追う。

「ここは私にまかせて、一人はちびムーンを！」

「わかった」

サターンの言葉にウラヌスが頷く。

セレニティイの放った攻撃を受けきれず、クレセント・ムーンは地面にたたきつけられた。入れ替わりに現れたウラヌスが、セレニティイに飛び掛っていく。

「大丈夫？ クレセント・ムーン」

ネブチューンが倒れている彼女を助け起こす。

「ありがとう」

「ゲイジユースはしへじつたみたいね」

「思い出してくれ、お団子！ 君だってこんなことは望んでいないはずだ！」

「つるさい！」

ウラヌスの言葉にセレニティイはイラついたように波動を放つ。ウラヌスは防ぎきれず、壁に叩きつけられた。右肩を抑えながらも、ゆっくりと立ち上がる。

「ウラヌス！」

「つさぎ、おねがい！ やめてえ！」

少女の叫びにセレニティイは苦痛に顔をゆがませた。

「うるさい……！」

セレニティイはちびムーンに向かって、右手をかざした。

「スマール・レディ！」

プルートは手に持っていたガーネット・ロッジを投げ出し、間にに入る。

「プー！」

プルートは一身に攻撃を受け、倒れこんだ。

「私はつさぎ、では、ない。私は、ダーク・キング、ダムの指揮官、セレニティイよ」

まるで自分に言い聞かせるように、けれどたどたどしく彼女は繰り

返し呟いた。

「じゃあ、あなたは何故、そんなに辛そうな田をするの？」  
悲しそうな表情で、ネプチューンはセレーティを見つめる。  
「わかつているはずよー今の姿が本当の姿でない事を…」

クレセント・ムーンの言葉と共に、中にいた仲間達が現れた。

「つむぎー…」  
「つむぎーん…」  
「つむぎー…」  
「つむぎー…」

次々に呼びかける。

「つむぎー、つむぎー、つむぎー、つむぎー…！」

セレーティは右手を空に向かってかざした。まるで暴走するかのように、エネルギー弾が降り注ぐ。

エネルギー弾の一いつがちびうさ」当たった。自分の身体が宙を舞うのが感じる。そしてその身体は手すりを乗り越えた。

「スマール・レティー！」

ブルートが氣づき、叫びを上げる。

「ちびムーンーーー！」

これはサターンだ。

「ちびうさあーーー！」

「しまつたー！」

誰も動けない。

もひ、だめ。やつ思つて田を開じた時だつた。手首を掴まれる。驚いて田を開けると、そこにはセレーティの顔があつた。

「つむぎー…？」

セレーティは無言でちびムーンは引き上げる。そして呆然として、田惑つた顔のまま空間に裂け田をつくると、彼女は姿を消した。

ふらつきながらプルートが、ちびムーンに近づいてきた。

「大丈夫ですか、スマール・レディ？」

「プー…うさぎが、うさぎがあたしを助けてくれた！」

その事実に、興奮しながら話すちびムーンに、プルートは優しげな微笑を向ける。

「プー…うさぎ、戻ってくるよね？」

プルートの代わりにクレセント・ムーンがそっと呟いた。

「ええ、きっと。きっともうすぐ、彼女は戻ってくる」

## 第十四話 運命の出会い～ウラヌスの遠い日（後書き）

夢見 : 『まだ、私の事を敵だと思つてこますか?』

はるか : 『わからない。僕は彼女のようによつに人を無条件に信用することはできないからね』

夢見 : 『月野うさぎ、セーラー・ムーン、月のプリンセス。そして未来のネオ・クイーン・セレニティ』

はるか : 『彼女の事、ずいぶんと詳しいんだな』

夢見 : 『あつと彼女以上に…』

うわわわ : 『【美少女戦士セーラームーン Memorises】

亜美、友情の叫び！クレセント・ムーン消失』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十五話 亜美、友情の叫び—クレセント・ムーン 消失

私は…。

中身をあおり、私はグラスを壁にたたきつけた。砕け散り、破片が周りに飛び散る。

「私はどうして…」

あの子を助けたんだ。その事だけが頭の中をぐるぐると回る。あの掴んだ手から伝わってきたぬくもり。あれは…。

「わかつていてるはずよ

まるで幻影のようにグラスの破片から、影が浮かび上がった。

「ぐ、クレセント・ムーン」

「わかつていてるはずよ」

彼女は静かに繰り返した。彼女の言葉だけは、いつも確実に私の心をかき乱す。

「私はダーク・キングダムの指揮官、セレーネティよ…」

私はムキになつて声を張り上げた。そんな様子も気にかけず、クレスント・ムーンは続ける。

「あなたの居場所はここではないわ

「うるさい！」

私は短剣を投げつけた。短剣は空を切り、実態のない彼女の身体を通り抜け壁に突き刺さる。

「みんな、待つていてるわよ、つざわ」

「今日、みんなに集まつてもらつたのは、これを見てもらつたかつたら」

メンバーは十番公園に集まつていた。細長い木のテーブルを囲み、レイ、ちびうわ、まこと、美奈子が亜美に注目する。亜美は目の前のノート型パソコンを仲間達に向ける。

「つやきちゃんの写真じゃない?」「

事故よりも前の写真、以前みんなで海に行つた時の写真だ。亜美はゆっくりと写真を表示させていく。

「これは… 事故直後の…」

落ち込むつやきを励ますため、美奈子が無理やり取った写真だ。明らかに前の写真とは表情が違う。以前に比べて、どこか遠くを見つめるようになったつやき。どこか暗い影が顔にかかっている事が多くなつた。

「ひちは、植物園に行つた時のだね」

バラ迷路に入る前のアーチで、みんなで写つてゐる。衛が撮つた写真だ。つやきは戸惑いながらも笑つてゐる。

そして夢幻想。レイは思わず右手を握り締める。つやきとじやれ合つつきの姿は、一見ただけでは以前のつやきの姿とは見分けがつかない。

次の写真は軍服に身を包んだ、つやきの姿。一枚の写真が並んで、表示される。ちびうちは思わず顔を背けた。

「亜美ちゃん、それで何が言いたいの?」

「ひちは自分がセレーニティとして初めて現れた時の写真。隣がこの前の展覧会での写真。ちょっと比べてみてほしいの」亜美に言われ、戦士たちはじつくりと見比べる。ふとレイが気がついたように、声を上げた。

「田よ。初めの頃は、闇のエナジーに染まつてゐる。でも戻つてきてる。つやきの田」

「それは、つやきさん。いやセレーニティの中で、何かが変わつつあるからだと思つます」

「ほたるちゃん!」

声に驚き、振り返るとそこにはほたるが立つていた。

「変化をもたらしてるのは、私達。特にちびつかやんです。そして何よりも、彼女」

そう言つて、ほたるは写真の隅を指差した。

「クレセント・ムーン…か…」

「まことか考へ込むかのように彼女の名前を呟いた。

「そういえば、彼女はいつから現れたんだっけ？」

「ママが来たとき！」

ちびうさの言葉をレイは否定する。

「ちょっと待つて。多分その前よ。うさぎが事故にあつた日だわ。その時、クレセント・ムーンの姿は見なかつたけど、光の攻撃が私達を助けてくれた。あれも多分、クレセント・ムーンよ」

「じゃあ、うさぎちゃんが事故に合つた日と、クレセント・ムーンが現れたのは同じ日…？」

けれど、そこから続かない。

「うーん」

「みんなで集まつて、作戦会議かしら？」

考へ込む仲間達の前に、夢見が突然現れた。

「ゆ、夢見さん？」

亜美はさりげなくパソコンを閉めた。見せるようなものではない。

「こんな所でどうしたんですか？」

首をかしげる美奈子に、夢見はクスッと笑う。

「打ち合わせの帰りなの。そうだ、せつかくだから宣伝していこうかな。きっと亜美ちゃんとか、いい線、行くんじゃないの？」

そう言つてから夢見は、カバンから数枚のチラシを取り出し、仲間達に配つていく。

「チエス大会…？」

「こりや、亜美ちゃんの独壇場だね～」

仲間の視線は自然と頭脳明晰な亜美へと集中する。亜美は照れたようになくなつた。

「ほたるちゃんも、どう？」

夢見は少し離れて立っていたほたるにもチラシを手渡した。

「でも私、チエスわかりませんし」

「大丈夫。大会に参加しなくても、初心者コースとかもやっているから。ねつ？」

熱心な説得にほたるはどうとう頷いた。

「じゃあ、みんなで明日行きましょうっ。亜美ちゃん参加で、私達応援！」

「賛成！」

「ちょ、ちょっと、みんな？」

話が勝手に進んでいくので、亜美はあわてて立ち上がった。

「みんなもこう言っている事だし、ぜひ参加してよ。私も参加するつもりだし」

「夢見さんも…？じやあ…」

亜美が頷いたので、夢見はうれしそうに笑った。

「決定！ そうだね、明日11時に会場に集合、でどうかな？」

仲間達からは反論は来ない。

「じやあ、また明日ね～」

角をまがり、六人から見えない場所で、彼女達はまるで私を待ち受けるかのように立っていた。

「やつと見つけたよ、夢見」

「一体どうこうつもり？あの子達を誘つて

みちるとはるかの鋭い視線が痛い。

「？！」

こんな時に……！

私は思わず胸を抑えた。彼女達には見せたくないのに！呼吸が乱れ、嫌な汗が額を伝つ。

「二人には敵わないわね。は、るかさ、ん、み、ちる…ゲホッ」

咳き込むと同時に、私はバランスを崩し、思わずしゃがみこんだ。

「おいつ！ 大丈夫か、夢見！」

「ゆめ……」

二人が私の名前を繰り返し呼ぶ声を聞きながら、私は意識を手放した。

墜ちていく。深い意識の海の中、私は墜ちていく。

あの日、意識の海に放り出され、何もできなかつた私は、あの少女に出会つた。

あの子は、私に名前を貸してくれた。

あの子は、私に姿を貸してくれた。

あの子は、私に自分の未来を貸してくれた。

私はずるい人間。

自分の目的のためだつたら、何だつて利用する、ずるい人間。

浮かんでは消えていく、彼女達の姿。

『あつ、自己紹介がまだだつたわね。私は、月影夢見。一応、画家、つてどこかな?』  
偽りの名前。

『すごひーい。音楽に絵に。私とは大違ひだ』

偽りの姿。

私はずるい人間。自分の目的のためだつたら、何だつて利用する、ずるい人間。

『だつたら何故、はるかさん達にあんな事言つたの?』

そんな声が聞こえたような気がした。

『優しくないですよ、私は。目的のためだけに動いている、いやな人間です』

隠し通すつもりだった、本音。あれは…ホント、どうしてだろううね?

『本当はわかつていいんじゃない?』

「そうね。私は…

せつなは濡れたタオルで、夢見の額に光る汗をふき取った。まぶたがかすかに動き、夢見がゆっくりと目を開ける。

「気がつきましたか?」

不思議そうな顔をしながら、夢見は起き上がった。

「(口)は…?」

「私達の家よ」

見ると、みちるとはるかの一人が側に立っている。

「僕達の前で倒れただこと、覚えているかい?」

「覚えているわ」

「それで病院より、ここに運んだほうが良いと判断したのよ」  
みちるさんの言葉に私は理解した。きっと二人は見たんだ。改めて私にはもう時間がない事を思いしる。私にも、そして彼女にも。私はベットから立ち上がった。ふらつくかと思つたが、大丈夫だ。今は、安定している。でもまたいつ崩れるかわからない。私は一人一人の顔を見つめ、頭を下げた。

「ありがとう、みちるさん、はるかさん、それにせつなさん」

「それにしてもあなたは何者なの。こんなに近くにいるのに、私の鏡であなたの正体を掴むことができない」

みちるの手には、彼女のタリスマングラフを握っていた。

私の問いに、夢見は軽く首をかしげ、悲しげに笑つた。

「間違つていいわ、みちるさん。あなたにはもう、わかっているはず。いいえ、あなただけじゃない。はるかさん、せつなさん、それにほたるちゃん。他のみんなだって。みんなわかっているはず。私が何者なのか」

そういうと彼女は一步一步、確かめるように踏み出す。

「明日、会場に来てください。またおちやんにチラシは渡してあります」

「待ってください」

せつなが呼び止める。その声に彼女は足を止めた。

「明日、きつと…」

それだけを言つと、彼女は部屋を出て行つた。私もはるかも、彼女を呼び止める」とはできなかつた。彼女の表情が声をかけることを許さなかつた。私は彼女が出て行つた扉を見つめながら、氣づくと呟いていた。

「夢見…ううん、クレセント・ムーン。あなたは一体どれだけのものを背負つているの?」

次の日。

会場の一角に見慣れた顔を見つけ、美奈子は走つていつた。

「『うめ~ん!』

「美奈子ちゃん、おっそーい」

レイとまこと。亜美が見当たらない。

「あれ亜美ちゃんは?」

「今、夢見さんと参加登録しにいっているわ」

「みんな~」

ちびうさの元気の良い声に振り返ると、おひつや、はたる、せつな、はるか、みちるの五人が歩いてくるといひだつた。

「『うきげんよ!』

「やあ~」

「おはよ!」「やれこまむ

「おつ集まつてゐる。集まつてゐる」

今度は夢見達だ。夢見、亜美、そして衛までいる。

「衛さん?」

「どうして」

当たり前の疑問に、衛は答えた。

「知り合いに手伝いを頼まれてね。ちょうど、一人と向ひで会つたんだ。じゃあ俺はまだ仕事あるから、亜美ちゃん、夢見さん、がんばって」

衛はみんなに挨拶をするためによつたらしい、足早に戻つていぐ。

「亜美ちゃんも参加するのか?どのグループなんだい?」

亜美の番号札に気づき、はるかが覗きこむように訊いてきた。

「私はAです」

「じゃあ、私と同じね」

みちるが可笑しそうに微笑んだ。

「夢見は…?」

「私はBよ」

「夢見は、僕と同じか」

はるかも面白がるように笑つた。

『予選を行いますので、参加の方は会場のほうへ集まつてください』

話をしていると、アナウンスがホールに流れた。

「じゃあ、行こうか?」

はるかが他の三人を促す。

「みんな、がんばってね~」

ちびうさの声援に見送られ、四人は会場の中へと入つていく。

『……つさ!』……』

セレニティは耳をふさいだ。今朝、彼女が現れてから声がやまない。

「一体誰なの…」

『つさ!』

「やめてえ！」

足がもつれ、壁に寄りかかる。息が乱れ、頭がガンガンする。浮かんでは消えていく、セーラー戦士達の姿。

『「つかれ』』

皆、笑顔で私に手を差し出してくる。

「いや！」

『「みんな待ってるわよ、つかれ』』

彼女の言葉。クレセント・ムーンの言葉。

「ワタシハ・・・！」

「亜美ちゃんはわかるけど、さうすが、みちるさんにはるかさんね～」  
チエスの試合は順調に進み、結果を見ながらレイが感心したように呟いた。

「ほんと、かつこいいー」

美奈子が田をきらめかせながら言った。ちょうど試合が終わった本人と目があったのか、彼女は元気よく手を降る。

「でも夢見さんも」

今度は夢見の試合が終わつたらしい。席から立ち上がつた。彼女の勝利が表示される。

「あつ、つぎ準決勝だよ。Aグループがみちるさんと亜美ちゃん！Bグループがはるかさんと夢見さんだ！」

まさかの身内対決に、戦士達の視線は、試合が表示されるモニターへと集中する。

準決勝から個別の部屋で試合が行われる。試合はモニターで中継されるが、試合中、部屋の中に残るのは当事者の一人だけだ。みちるは席に着くと、向かいに座つた亜美に対して微笑みかけた。

「よろしく、亜美ちゃん」

「よろしくね、よろしくお願ひします」

「手加減はしなくてよ?」

「私だつて」

係りの男性に説明を受け、亜美がゲームを始めた。亜美が白、そしてみちるが黒だ。

「久しぶりね、あなたとこいつやって勝負するなんて」

「プール以来、でしようか」

「二人共、駒を動かしつつも会話を続けていく。

「また是非プールで勝負したいわね」

みちるの一手に亜美は一瞬考へる。そしてルークを進め、ずっと考えていたことも躊躇いながらもみちるにぶつけた。

「みちるさんは、まだクレセント・ムーンが敵だと思いますか?」

「あなたはどう思つのかしら?」

まるでその問い合わせることをわかっていたかのよつて、みちるは落ち着いた声で切り替えた。

「私は…」

亜美は視線をチェス盤から放し、みちるをまっすぐと見つめた。

「私は信じます。彼女の事を信じます。うれせりやんだって、きつ

とそうしたはずだから」

みちるはふつと息をつき、どこか遠くを見るような目で、亜美の言葉に答えた。

「そうね。あの子なら信じたでしょうね。優しさが子だから、きっと自分の身を犠牲にしてまで、信じたでしょうね」

そういうと、みちるは黒のキングを倒した。

部屋を出て、仲間たちの元へ戻りながら、みちるは続ける。

「でもこれが私達の戦い方。わかつて、とは言わないわ。彼女は優しくいるから。自分が傷つくとわかつていても、彼女は進んでいつてしまうから。だからと言つて必要のない傷を、負う事はないわ。それは私達が引き受ける」

何か言葉を返す前に、仲間達のところについたので、亜美はみちる

に何も言えなかつた。答える余裕があつたとしても、みちるに返す言葉を見つけれたか、亜美には自信が持てなかつた。

「亜美ちゃん、決勝進出おめでとー」

「残念でしたね、みちるさん」

「そうね、でも楽しかつたわ」

さつきとはぜんぜん違う表情でみちるは笑いながら答えた。

「みんな、次の試合が始まるよ」

「まさか、君とこんな形で勝負することになるとはな……」  
少し困った表情をするはるかに、夢見は笑顔で答えた。

「でも私はうれしいですよ、はるかさん」

ゲームが始まり、少しの沈黙の後、夢見は切り出した。

「まだ、私の事を敵だと思つています?」

「わからない、と言つのが本音だらつ。僕は彼女の様に無条件で人を信用することはできないのでね」

体制を変えないまま、はるかは視線をチェス盤から放した。そんなはるかの様子を気にかける事もなく、夢見はチェス盤に視線を落としたまま、駒を掴んだ。

「月野うさぎ、セーラー・ムーン。月の王女、<sup>プリンセス</sup>そして未来のネオ・クイーン・セレーティ」

「彼女の事までずいぶんと詳しいんだな」  
はるかはかすかに目を細めた。

「彼女の事は、多分彼女以上に……」

含みを持つ夢見の言葉の意図がつかめず、黙つていると夢見が顔を上げた。

「はるかさん、あなたは何故戦つのです? 王女に仕える戦士としての使命感ですか?」

「使命…確かにそれもある」

はるかはふつと笑うと、過去を思い返していた。確かに世界を沈黙から救う、ただそれだけを使命として動いていた時期もあつた。

「でも単純に守りたいからだ。光を。彼女はやさしそぎる。自分が傷つく、犠牲になることがわかつていても、彼女は進んでいくだろう。それが彼女だから。だったら無用な傷は僕達が引き受け」

「優しいんですね、はるかさんは」

「僕が優しい？まさか」

はるかは眉をひそめ、自嘲するような笑いを浮かべた。夢見はそれに対して首を横に振る。

「みちるさんも、はるかさんも優しい人。それでいて自分には甘えない人」

はるかは諦めたように笑い、一緒にキングを倒した。

「君には本当に適わないよ。僕の負けだ」

「話ができるよかつた」

はるかと夢見が観客席に戻ると、一人は仲間達に迎えられた。衛も仕事が終わったのか、合流している。

「決勝は亜美ちゃんに夢見さんか～」

無邪気に喜ぶうちびうさ。はるかは小さく笑うと、みちるに話しかけた。

「僕達は相手が悪かったな。なあ、みちる？」

「ふふつ。そうね、はるか」

まるで一人は、負けたことを楽しんでいるかのようにも見える。

「決勝まで時間があるから、みんなでお茶しに行こう？」

「賛成」

美奈子の言葉に率先して明るく賛成するのは夢見だ。レイが無邪気に騒ぐ二人に苦笑する。

「夢見さんまで、美奈子ちゃんみたいなんだから～」

一人の言葉で決まった午後のお茶会に移るため、歩き出した時だつた。会場のシャッターが突然落ちるようにしまっていく。

「何？！」

足場が安定せず、戦士達はふらついた。

「空間が……！」

「これは……」

「ようやくわかった。全て壊してしまえば、私はもう苦しまなくてすむ」

声が響いた。声の主もすぐに姿を現した。顔は蒼白で、目は虚空を見つめている。

「だから、私が殺してあげる」

セレニティは戦士達に向かって、右手をかざした。まるで重力が変わったかのように、戦士達を地面へと押し付ける。

「ぐ、そつ……！」

「う、ごけない」

「ヒキガエルのように、地面に押しつぶされて、死んでしまえばいいのよ！」

セレニティのヒステリックな笑いがあたりを包んだ。

「う、う、う……！」

押し付けられていた力がふつと消えた。顔を見上げると、そこには戦士達を守るかのように夢見が立っていた。身体は優しい光に包まれ、その後ろ姿は彼女を彷彿とさせる。

「セーラー・ムーン……？」

「みんなは私が守るから。守つて見せるから」

夢見はまっすぐと、セレニティを見据えた。そのまま光のベールに包まれ、姿が変わる。金色の被衣に白い着物。

「……夢見さん……」

『大切なもののためなら、いくらでも強くなれるものよ?』

『だから苦しいんでしょう?だからつらいんでしょう?』

『大丈夫、美奈子ちゃんなら、書ける!』

『今は迷わないで戦つて!』

『まいにちやんつて、料理…好きでしょ？』

『幻月の戦士、クレセント・ムーン、ただいま参上』

『みんなもこう言つている事だし、ぜひ参加してよ』

『みんなは私が守るから。守つて見せるから』

「夢見さんが…クレセント…ムーン…」

言葉を失い、戸惑つ戦士達に、クレセント・ムーンは厳しい口調で叫んだ。

「今のうちに変身して…早く…」

変身した戦士達を憎憎しげな顔で見つめ、セレーティアが指を鳴らした。黒いもやのようなものが集まってくる。一気に分かれ、やがてある形をかたどつていいく。

「そんなん…！」

立ち上がったもや達の姿に、戦士達は絶句する。

「ドッペルゲンガー達よー…やつてしまいなさい…！」

まるで鏡のように、戦士達の姿を写し取つたドッペルゲンガー達が襲い掛かってきた。

「うわっ！」

ジュピターが声を上げた。見ると、一人のジュピターがもつれ合っている。

「ジュピター…！」

ヴィーナスは思わず叫んだ。ドッペルゲンガーの姿はまるで鏡のようで、見分けがつかない。攻撃したら、本物に当たつてしまつかもしれない。

「よそ見していると、死ぬわよ」

偽ヴィーナスが放つた、光のチーンが脇をかする。

「…」

「どう？一緒に戦えないもどかしさは…手を出したら、仲間を傷つ

けてしまうかもよ！」「

セレニティは自嘲的な笑いを浮かべ、叫んだ。その表情は明らかに無理をしている。

「つざぎ！…」「

「どこを見ているの？あなたの相手は私よ」

もう一人のマーズが立ちふさがる。

「邪魔よ！…

けれどももう一人のマーズは攻撃を同じ技で相殺してきた。

ドッペルゲンガーに戸惑い、苛立ちを感じていたのはマーキュリーも同じだった。攻撃を避けながら、同時にゴーグルを通して解析を進める。

早く、早く、早く。どこにあるはず。何かがあるはず。こんなに正確に技を写すのには、かなりのエナジーが必要なはず。その場所さえわからば……！

ふと、ゴーグルが反応した。

「みんな！ティアラの石が弱点よ！」「

クレセント・ムーンとタキシード仮面が、本人のドッペルゲンガーを倒したのを横目で確認しつつ、マーキュリーは仲間達に叫んだ。

「余計な事を……！

明らかに余裕をなくしている偽者が飛び掛ってくる。

「偽者になんか負けないわ！マーキュリー・アクア・ラブソーディー！」

必殺技が炸裂し、石が割れた。同時にドッペルゲンガーが消滅する。マーキュリーの指摘に、他の仲間達も、次々と自分のドッペルゲンガー達を倒していく。ほっと息をつき、戦況を見守っていたマーキュリーは、背後に迫る影に気づかなかつた。

「マーキュリー！後ろ…」

「えっ？」

振り返ったマー・キュリーは、金色の被衣<sup>かつぎ</sup>が、まるで花が散るかのように、舞い落ちるのが見えた。セレニティの攻撃を一身に受け止めたクレセント・ムーンは、一歩、そしてもう一歩とふりつき、床へと崩れ倒れた。まるで共鳴するかの様に、セレニティも頭を抱え苦しみ始める。黒いもやのようなものが彼女の身体から抜けていき、やがて彼女もまるで力が抜けたかのように、ゆっくりと倒れた。タキシード仮面がすかさず彼女を抱きとめる。

「うわあー…夢見さん…」

「クレセント・ムーン！…クレセント・ムーン！…夢見さん！」

自分をかばい、倒れた彼女の名前を繰り返し呼び続ける。

ふと、あることに気づいたマー・キュリーは息を飲んだ。

彼女の身体が、身体が透けて見える。

「亞美…ちゃん…チエス…勝負…でき…なかつ…た…ね…」

夢見は申し訳なさそうな顔をしながら、微笑んだ。話している間に

も、身体はどんどん透け、見えなくなっていく。

まるでシャボン玉が割れるかのように、夢見の身体は無数の光の粒になつて、はじけた。光はグッタリとするうわざの身体に降り注ぐ。

「夢見さん…ゆめみさんああんんん…」

「うわあ…一つをぞごー…目を開けなさいよ、うわあこー！」

タキシード仮面の中でも、グッタリとするうわざの肩を、マーズは揺り動かしている。マーズはハツと咲づき、涙をぬぐつのも忘れ叫んだ。

「うわあ、息してなー！」

まるで戦士達の不安に呼応するかのように、空間がゆがみ始める。

「マーは危ない…といあえず脱出だー！」

『夢見ちゃん…傘、返しにきたよ…』

おねえちゃん…?

少女はゆっくりと目を開けた。

「夢見?…」

何かが割れる音。音のしたほうを向くと、そこには少女の母親が目を大きく見開き、立っていた。床には粉々になつた花瓶が散らばっている。

「ママ…?」

「夢見…」

母親に抱きつかれ、少女はまた彼女の声を聞いたような気がした。

『夢見ちゃん…本当にありがと…』

## 第十五話 亜美、友情の叫びークレセント・ムーン 消失（後書き）

声 …『「わざわざ、わざわざを助ける事は、できないんですか…』

声 …『黙ってみているだけだなんて、私達にはできない…』

声 …『信じていたよ、「わざわざちゃん』

声 …『「わざわざ、」わざわざ…出でなくて…』

「わざわざ …『【美少女戦士セーラームーン】Memories』  
迷い込んだ戦士達 「わざわざ、心の迷図」<sup>ラビリンス</sup>

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十六話 迷い込んだ戦士達 つやめ、心の迷宮

衛の部屋。リビングには亜美、ちびっ子以外の戦士達が集まっていた。

「くそつ何で、何で…」

まことは感情をぶつけられる先を探して、何度も何度も呟いていた。

「ようやく戻つてくれたのに」

「つやめ…」

その場に居たはるかは何も言わなかつたが、硬く手を握り締め、震わせている。みちるがはるかのそんな様子に気づき、そつとはるかの手に触れた。ドアが開く音がして、亜美と猫の一匹が入つてきた。

「亜美さん、つやめさんの様子は？」

ほたるの質問に亜美はつづむいた。

「残念ながら、あまりよくなないわ。彼女のエナジーが異様に低いの」

「そんなん…！」

「今は、ちびっ子と衛を、つやめにリンクさせたけど…」

「…それは一時しのぎにしかならないわ。早く何か手を打たなければ」

追い討ちをかけるような一匹の言葉。

「でも一体、どうすれば…？」

亜美もソファーに座り、氣まずい沈黙が流れる。沈黙を破つたのは、レイだつた。

「それにしても一体、どうして…」

「私が説明しましょうう」

自問自答する言葉、別に返事は期待していなかつただひつ。けれど、透き通つた声が部屋の中に響いた。見ると、テーブルの上においていた、つやめのブローチが光つてゐる。

「銀水晶が…？」

銀水晶はまるでホログラムのよう、一人の女性の姿を映し出した。

「あなたは…」

「クイーン・セレニティ様！」

せつなが驚いたように叫んだ。そこに映し出されていたのは、はるか遠い昔、月の王国、シルバーミレニアムに君臨した女王の姿だつた。前世のうわさ、プリンセス・セレニティの母親、クイーン・セレニティ。

「笛さん、お久しぶりです。それに嬉しいことです。まだ私が必要とされていることは」

「それで、クイーン・セレニティ様、うわきの身に何が？」  
みちるが切り出した。クイーンの顔が曇る。

「それにはプリンセスの身に起きた、あの事故まで遡らなければなりません。あの事故もダーク・キングダムの仕組んだものだったのです」

「あの事故も？」

「はい。もともとは彼女の娘を狙つたものでした」  
ちびうわきちゃんを？その言葉にまことは納得した。

あの時、何が起こるかわかつていなくて、うわきちゃんは本能的に感じていたんだろう。あの時のうわきちゃんの取り乱しそう。何もできなかつたことが余計、悔しい…。

「そして、その時、セレニティの心はバラバラになつてしまいまし  
た。後の事はみなさんのほうが、ご存知でしょう。そして先日、離  
れていた心が戻つてきたことで、元に戻りつつあります」

「じゃあ、何故うわきは田を覚まさないのよー」

レイは声を荒げた。言つてから、ハツとする。叫びだしそうになりそうになるのを、押し殺しているのに出てしまった。

「それはセレニティの中にはまだ、ベリルの邪悪なエナジーが残つ  
ているからです。心のかけらはそろいました。けれどまだ、その邪  
悪なエナジーが彼女が目覚める邪魔をしています」

「つさぎを、つわめを助ける事は、できないんですか！」

「これはレイだ。

「黙つてみているだけだなんて、私達にはできない！」

「亞美。そんな二人にはるかとみちるが微笑んだ。

「だつて、お団子頭は…」

「大切な光ですもの」

「今度は、私たちが彼女を助ける番です」

そしてほたる。

クイーン・セレーニティは仲間達の反応に、静かに微笑んだ。

「本当に、セレーニティは素敵な仲間を持ったものです。わかりました。私がセレーニティの心へと導きましょう。ブルート、手伝っていただけますか？」

せつなは頷くと右手をかざした。彼女のタリスマント・ガーネット・ロッドが現れる。

「どうか、私に、いえ、銀水晶に心を合わせてください」

その言葉と共に、銀水晶の光が強くなる。まるで共鳴するかのように光りだす、ガーネット・ロッド。そして戦士達はまばゆい光に包まれた。

気づくと戦士達は見知らぬ場所にいた。いや、知っている。初めて見るその風景は、何故か懐かしさを思い起こした。

「見て！」

亞美が指差す先には、見慣れた銀の月ではなく、青く輝く地球があつた。

「じゃあ…！」

「そう、ここはシルバーミラーームです」

まるで故郷に帰ってきたかのように、せつなが懐かしそうに呟いた。

「ここが…」

「あしたちが居た場所…」

戦士達が感傷深くあたりを見回す。

「見て、ムーン・パレスよ！」

美奈子が指差した先には、宮殿があつた。同時にあがる煙。一瞬の間をおき、聞こえてくる爆発音。

「ムーン・パレスが攻撃されている…」

「みんな！」

ムーン・パレスの前。

妖魔<sup>ようま</sup>に囮まれながらも、ボロボロで一人戦う戦士の姿がそこにあつた。近づいてきた妖魔をなぎ払い、攻撃を防ぐ。

「きりがないわね…」

肩で息をしながら、ポツリと呟いた。

やつと戻つてこれたけど…。歯を食いしばり、技を放つ。べつに狙わなくたって、敵にはあたる。その事実が妖魔の数を物語つているといつても過言ではないだろ？。いや、まだあきらめられない。だつて、やつと戻つてこれたんだから。

「あきらめ…」

目の前の景色がゆがんだ。体制を立て直そと必死になる。けれど身体が言つことを利かない。うご…かない。

クレセント・ムーンは前のめりに倒れるしかなかつた。うさぎ、じめん…守れなくて…。

「ワールド・シェイキング！」

「ディープ・サブマージ！」

「デット・スクリーム！」

抱き起こされ、私は目を開けた。心配そうに覗き込むマーズの顔が目に入つてくる。

「マーズ？」

「大丈夫？」

「来て、くれたんだ…」

「早くパレスの中に！」

サターーンの言葉に、ジュピターが私を軽々と抱き上げた。離れたくはなかつたが、抵抗することもできず、私は苦笑するしかなかつた。でも少しの間ぐらいなら大丈夫のはず。パレスの中に入り、扉を閉めると、静けさに包まれた。外の妖魔など、うそみたいに思える。

「ジ、ユピター。下ろして」

そう言うと、ジュピターが私を柱に寄りかかるようにして、下ろしてくれた。

「そろそろ、説明してくれるわね、クレセント・ムーン。いえ、夢見」

ネプチューンが私を見つめながら言った。けれど前のような厳しい視線ではない。思わず笑みが広がる。認めて、くれたのかな？「ここまで来れたということは、少しは知っているんじゃないの？」そう訊くとマーキュリーが頷いた。

「クイーン・セレーニティ様に」

目を閉じ、ゆっくりと深呼吸をする。少しづつ身体に感覚が戻ってくる。大丈夫。まだ戦える。

「そう。じゃあ、彼女は言っていたはず、月野うさぎの心はバラバラになってしまった。そして、その心が戻ってきたと」

戦士達を見ると彼女達は頷いた。

「それが私。月野うさぎの心の一部。私は月野うさぎの本質」

「夢見さんが、うさぎちゃんの心？」

「うさぎの本質？」

ヴィーナスはキヨトンとした顔で私を見つめる。

「私はうさぎと同じ存在。けれどわたしと彼女は違うの。普段は彼女が起きていて、私が眠っている。月野うさぎは私の事は知らない」

戦士達は何も言わず、私の言葉に耳を傾けている。戸惑いの表情。

意味がわからない。そんな表情だ。

「セーラー・ムーンを側で見てきたあなた達なら知っているはずでしょ？彼女の想い。彼女の願い。それも元々私から来る感情。そしてその感情が事故で薄れたのを感じなかつた？彼女から表情が無くなつた、そう感じた事はなかつた？」

私は戦士達の顔を一人一人見回す。予想外にウラヌスが口を開いた。「君はお団子の原型。そう考えていいのか？」  
「そうね。そう考えてもらつて構わないわ。用野うさぎが光だとしたら、月影夢見、クレセント・ムーンは影なの。本来は外に存在してはいけないもの」

そこまで言い切ると、私は息をついた。そろそろだ。

「でも、みんなに会えて、本当によかつた」

私が立ち上がると同時に、パレス宮殿が鈍く揺れた。戻らなくちゃ。

「敵か？」

「みんな急いで！彼女は奥にいるはずよ。敵は私にまかせて」それだけ言うと私は飛び出した。後ろでマーズが呼ぶ声がしたけど、私は振り向かなかつた。

「クレセント・ムーン！」

私は大声で彼女の名前を呼んだ。けれど、彼女は止まらず出て行つた。あんなにボロボロなのに、まだ戦うだなんて……私が動く前に、動いた影が四つあつた。ウラヌスたちだ。

「マーズ！クレセント・ムーンは僕達に任せろ」

「みなさんは奥へ行つてください！」

ブルートの声にジュピターが頷き、駆け出す。私は一瞬迷つたが、みんなの後を追い、奥へと走り出す。

一瞬だつたはずなのに、かなり距離を迫られている。宮殿のバリアが限界だ。みんな、急いで！私は右手に集中する。もうかなり集中しないと、詠唱もできない。私の放つた光の刃は、妖魔を切り裂き

飛んでいく。足がもつれた。

駄目！後ろを！そう思つたが遅かつた。避けれない。

「ディープ・サブマージ！」

海のような暖かい光に包まれ、後ろから襲い掛かつてきた妖魔が消えた。

「ワールド・ショイキング！」

今度は光の球が風のように、妖魔を消滅させていく。

「みんな…」

守るようここでルートとサターンが私の前に立ちはだかる。

「私たちにも…」

「…手伝わせてください」

「さあ、行ぐぞ！」

中庭を抜けると、扉が並ぶ廊下へと出た。ヴィーナスが立ち止まり困つたように見回した。

「奥まで来たのはいいけど」

「これじゃ、手間取りそうだな」

「いつたいどこから、探し始めたらいのかしら？」

そう言つて四人はゆっくりと進んでいく。

「でもどうしてかしら。初めて見るはずなのに、すこく…懐かしい」

不思議そうに言つマーキュリーに、ヴィーナスがクスリと笑つた。

「きっとあたしたちにも前世の記憶があるのよ」

前世の記憶と言つても、別に全ての事を思い出せるわけではない。たとえば、前世のセーラー・マーズが何を考えて、この宮殿で生活していたのかなんて、私にはわからない。でも、この戦士の力は確かに前世から受け継がれたもの。

『レイちゃん…』

ふとつわざの声が聞こえたような気がした。田の前の扉が田に留まる。右手で扉に触れてみる。

「マーズ、どうした？」

立ち止まつた私にジュピターが声をかけてきた。

「この先に、いるわ」

何故かわからないけど、私はそう確信した。

「じゃあ、迎えに行かなくちゃいけないわね」

「みんなでね」

私たちはみんなで扉に触れ、一緒に扉を開いた。

「まぶしい！」

中から、光があふれてくる。光が消え、ふたたび目を開けてみると、そこはさつき通つてきた中庭だつた。でもみんなの姿がない。

「みんな？ヴィーナス！ジュピター！マー・キユーリー…つわざー。」

返事は返つてこない。

殺氣を感じ、私は条件反射で飛びのいた。見ると、私が立つていた所には、剣が刺さつている。

「待つっていたわ、セーラー・マーズ。決着をつけましょっ」

彼女だ。偽りの軍服で身を包んだ、彼女。

「どうして！どうしてあなたを戦わなければいけないの！」

「問答無用！」

「まもちゃん！」

ちびつわは思わず衛に呼びかけた。握ったうわざの手がどんどん冷たくなつていいく。衛はうさぎを握り締める手を強め、噛み締めた唇からは彼女の名が零れ落ちた。

「つわざー！」

「氣づくとびつわせ叫んでいた。

「つやかの夢見る明日は、まもちやんとこいつも一緒になんでしょう。田を覚ましたよお、つやかー。こんなところで、負けないで！」

うわさの肩を揺ゆかし、呼びかけた。けれどつやかは変わらず眠り続ける。

「つやか……」

涙を溜めながら、ちびつとはなつむいた。

「大丈夫だよ、ちびつむせ」

「えつ？」

衛の声にちびつとは顔をあげる。

「セーラー・ムーンは無敵の戦士だ。こんな事で負けたりしない」

「まもちやん」

「絶対、戻つてくる。信じよつ」

「…………うん」

ちびつとは涙をぬぐつと、大きく頷いた。

「うぐい

クレセント・ムーンは胸を掴み、しゃがみこんだ。ネプチューンが心配そうに駆け寄る。

「クレセント・ムーン！あなたは中に！」

「そういうわけにも、いかないのよ。私が中に入れば、バリアが消える」

みんなが彼女に会うまでは、それは絶対にできない。

「だったら下がつてろ。敵は僕達でどうにかしてみせる」

私はウラヌスをじっと見つめた。決して引かない、そんな意思が感じられた。

「じゃあ、お願ひ

ウラヌスはネプチューンと視線を交わす。それだけで通じたのか、ウラヌスはまた敵の中へと飛び込んでいった。

「立てる、夢見？」

情けないことに、力がはいらない。

「ごめん、肩かして」

「みんな、どこに行つたんだ！」

あたしの声は、洞窟にこだまするだけ。扉を開け、光に包まれたところまでは覚えている。気づいたら、あたしは洞窟の様な場所にいた。

「考えていても、しようがないか」

少し進むと、広い場所に出た。今までの洞窟の風景とは打って変わり、人工的な建造物。不自然な円形の場を囲むのは切り立った崖。まるで闘技場。そんな言葉が不思議と出てきた。円形の場に足を踏み入れると、通つてきた橋が崩れ落ちた。

閉じ込められた？あたしは咄嗟に身構える。

まるであたしを待つていたかのように、声が響いた。

「よく来たな、セーラー・ジュピター」

目を凝らしてみると、暗闇から人影が浮かび上がった。

「貴様は、ベリル」

集中し、詠唱に入る。けれど、遮るようにベリルは笑った。

「おつと、まだ自分が置かれている状況をわかっていないようだな。その言葉と共に、あたりが明るくなる。ベリルは一人ではなかつた。隣に彼女が立つてゐる。

「セーラー・ムーン！」

けれど、セーラー・ムーンの眼がうつりだ。あたしの声にも反応しない。

「セーラー・ムーンがどうなつてもいいのか？」

ベリルがセーラー・ムーンの頬を撫でる。けれどセーラー・ムーンやはり反応しない。

「くつ」

「セーラー・ムーンの命はわが手の中にある。忘れるな

勝ち誇ったように笑うベリル。

「さあ、セーラー・ムーン。ジュピターを倒すのだ」

「はい、クイーン・ベリル様」

セーラー・ムーンは虚ろな目で頷いた。

「セーラー・ムーン！」

返事の代わりに返ってきたのは、攻撃だつた。

「さあ、どうする？ セーラー・ジュピター」

「みんな、どこよ～？」

ヴィーナスが声を上げると、凜とした声が戻ってきた。

「誰です？」

周りの様子がはつきりとしてくる。寝室のよひだ。窓の近くに、白いドレスを着た女性が立っている。

「あなたは…」

「どうしたのですヴィーナス、こんな夜更けに？」

「つかきちゃん…」

「つかき～誰の事ですか」

あっ、そっか。

「あなたはプリンセス・セレーティなのですね」

キヨトンとするセレーティに、ヴィーナスは変身を解いた。

「あたしは…」

「みんなどこに行つたのかしら？」

そう呟いたのは、マークリーだった。扉を開き、光に包まれたところまではつきりとしている。けれど、そこで他の3人とはぐれてしまつたのだ。

「マークリー」

私を呼ぶ声。

「誰？」

テーブルがその場に現れた。両側には椅子が置いてある。そして片

方の椅子には、彼女が座っていた。

「私よ、セーラー・マー・キュリー」

「夢見さん」

「また、会えたね」

静かに笑う夢見。夢見に促され、亜美は座った。

「でも、どうして？」

「クレセント・ムーンが外にいるのに、どうして私がここにいるのか、と言つことかしら？」

手を組み、悪戯っぽく亜美を見つめる。亜美は頷いた。

「それは外の私が、ここにいる私の一部だからよ」

夢見はテーブルの上に手をかざした。チエス盤が現れる。

「チエスの相手になつてもらえる、水野亜美さん？」

「勝負できませんでしたからね」

「ありがとう」

交互に駒を動かしていく。

「話を戻すけど、あなたの目の前にいる私が、夢見またはクレセント・ムーンの本体」

「どういうことですか？」

「私も、月野うさぎの心の一部。ここに戻ってきた今、私も宮殿<sup>パレス</sup>からは動けないの。でも宮殿のバリアが弱っている今、私がどうにかするしかなかつたの」

「強いんですね」

マーキュリーがそういうと、夢見はさびしそうに笑つた。

「そうね、私は言つのであれば、月野うさぎの想いを具体化したような存在だから。でもみんなが来てくれなければ、正直危なかつた」夢見がゆっくりと語りだした。一緒にビショップの駒を動かす。

「月野うさぎが事故にあり、私は彼女の心からほうりだされた。戻るうと思つたけど、すぐには戻れなかつたの。私がすぐに力をコントロールできなかつた、っていうのもあるかもしれないけど」

夢見はふっと息をついた。ポーンを動かし、亜美のルークを脅すが、簡単に返される。

「そういう内に、彼女がダーク・キングダムに奪われてしまった。いや、そう言つたら語弊があるわね。そう仕向けたのは、私はそのためにネフライトと? でもどうして?」

「状況が動かない。そう、感じたから。もしかしたら、もつと簡単な道もあつたのかもしれない。けれど私には時間がなかつた。それあなた達にも、戦士として改めて自覚してもらう必要があつた」私は息をついた。

「結果的にうさぎには邪悪なエナジーが植えつけられ、彼女を内からも蝕むよつにもなつたの。だから、ピースがそろつた今も、まだうさぎは田覚めることができないでいる」

亜美は真剣な目つきで私の話に耳を傾けていた。ふと彼女が聞いてきた。

「私たちを導いてくださつた、クイーン・セレーティ様は? あの方も、うさぎちゃんの記憶なの?」

「あの方は違うわ。もちろん、クイーン・セレーティ様もうさぎの記憶としてあるわ。うさぎの前世、プリンセス・セレーティの記憶としてね。みんなが会つたクイーン・セレーティ様は、銀水晶の記憶」

「この宮殿はいつたい…?」  
（パレス）

「さつきも言つたとおり、月野うさぎの心、その物とこうといふでしおうね。この宮殿の奥で、本来の月野うさぎが眠つてゐるわ。今頃、みんなも会つてゐる筈よ、うさぎのバラバラになつた心たちにみんながみんな、穩便で済むとは思わないけど。そつ心の中で付け加える。

「今度は私から訊いてもいいかしら?」

「何ですか?」

亜美はビショップを持ち上げる。ゲームはもう終盤だ。

「マー・キュリー。ううん。亜美ちゃんは何故、今まで戦つて、うさぎを守るうつとしてきたの？ やっぱり、あなたがセーラー戦士で、うさぎが王女、プリンセス未来の女王だから？」

亜美は一瞬考え、ビショップで私のポーンをとる。  
「それも、もちろんあるわ。セーラー戦士の使命は、プリンセス王女とプリンセス王子を守る事。でも…」

「でも…？」

私はわざと意地悪っぽく訊きかえす。

「うさぎちゃんは、私にとって大切な人だから。うさぎちゃんがいなければ、私はずっと一人だった。うさぎちゃんは優しい子だから、光のような子だから。みんなのために一生懸命になってくれる子だから…だから…」

亜美にはめずらしく、感情そのままに話しているのが感じられる。

「だから私は戦つてきた。だから私は戦つ」

必死になる亜美に私の口元に笑みが広がる。

「やあ。本当にいい友達を恵まれたわね、うさぎは…」

少しうらやましい。私はそつとキングを倒した。

「私の負け。やつぱり強いね、亜美ちゃん」

「夢見さん…」

「」の先に進めば、扉があるわ。その扉の前に彼女が眠っている  
亜美が立ち上がったので、私も立ち上がる。私は手を差し出した。

「亜美ちゃん、最後にチエスができてよかつた」

「夢見さん、私、忘れません」

事情を話すと、プリンセス・セレーティは静かに微笑んだ。うさぎちゃんとは又違う雰囲気の彼女。あたしはこの人に仕えていたんだ。改めてそんな実感がわいてくれる。

「そういう事だったのですか。私の生まれ変わりが…」

「何かご存知ありませんか、プリンセス・セレーティ様」

プリンセス・セレーティはじっとあたしの顔を見つめる。あたしが

顔を逸らさずいると、彼女は訊いてきた。

「どうして、そこまで必死なのですか、ヴィ…いや美奈子さん？」

「あたしはうわがやさんの友達です。それだけじゃ、理由になりません？」

せん？」「

そう答えると、プリンセス・セレーティは愉快そうに小さく笑った。

「セーラー・ヴィーナス、生まれ変わつてもぜんぜん変わりません

ね、あなたは」

「えっ？」

「ここの先にいるはずですよ、あなたのお探しの方は」

そう言って、彼女は奥の扉を指差した。

「ありがとうございます、プリンセス・セレーティ様」

「さあ、どうするジュピター。もう後はないぞ。まだ戦わないつも  
りか？」

ベリルが見下すように笑った。セーラー・ムーンの攻撃を避けてい  
るうちに、ジュピターは崖っぷちに追い詰められてしまった。

「戦つつもりはない」

「やれ、セーラー・ムーン」

ベリルの命令にセーラー・ムーンがゆっくりと近づいてくる。そん  
なセーラー・ムーンに、ジュピターは静かに微笑みかけた。

「信じているから、セーラー・ムーン」

セーラー・ムーンは動きを止めた。虚ろなセーラー・ムーンの瞳にこ  
かすかな光が灯る。

「何をしている」

ベリルの声にも、セーラー・ムーンは動かない。

突然、大きな揺れが闘技場をおそつた。

「うわっ」

崖っぷちに立っていたジュピターはバランスを崩した。身体は何も  
ない空中へと投げ出される。

「キヤッ」

落下は長くは続かなかつた。温かい光に包まれ、ジュピターは眼をあけた。そこにはセーラー・ムーンの顔があつた。

「セーラー・ムーン……」

「じめんね、まこちゃん」

謝る彼女の目には光が戻つていた。

「信じていたよ、うさぎちゃん」

「どうして、戦わなければならぬ」の…「なぜ…」

「その名で、呼ばないで！」

鋭い切つ先は私をかすりそうになる。避けるのは難しくはない。少しヒステリックな彼女の攻撃は読みやすい。けど…。いまだ私は戦いの意味を見出せないでいた。

『レイ、あなたの使命は何…！』

そんな言葉が脳裏で再生される。私の使命…。私が戦つてきた理由。『今だからできる事があるんぢやない？今だからやらなきゃいけない事があるんぢやない？王女プリンセスを守る戦士として、彼女の友達としてだから私は戦つてきた。彼女が戻つてくるべき場所を守るため。私はまっすぐとうさぎを見た。次の攻撃のため、彼女は剣を振りかぶる。

私は変身を解いた。切つ先は私の右肩を切りつけた。言葉にならぬいほどの痛み。私が避けると思っていたのだろう、驚いた表情をするつさぎ。剣が彼女の手から滑り落ちると同時に、消えた。うさぎ自身の勢いも、行き場を失い、私たちは一緒にになって倒れこむ。

「どうして…！」

「あ、なたに、帰つてきてほしいからよ…「うさぎ」

痛みに顔を引きつらせながらも、私はそっと微笑んだ。

「レイちゃん…」

「うさぎ…」

そつと彼女の髪を撫でた。「うわあの田から涙があふれてくる。そして私にすがるよつに泣き出した。

「レイちゃん、レイちゃん、レイちゃん！」

「おかえり、うわあ！」

次の瞬間、マーズ、マーキュリー、ヴィーナス、ジュピターの四戦士たちは、ひときわ大きな扉の前に立っていた。

「みんな！」

「この先に……」

「うわきちゃんがいるはずね」「

「みんなで、たたき起こしに行きましょう！」

四人は顔を見合わせ、うなずいた。

「これで、片付いたな」

ウラヌスはブルートとサターンと視線を交わした。かすり傷を居つているものの、二人共無事だ。

ネプチューんに肩を支えられ、クレセント・ムーンが近づいてきた。

「ウラヌス、ブルート、サター……」

ネプチューんから離れ、自分で歩きかけるが、クレセント・ムーンはゆっくりと前のめりに倒れた。地面に倒れる前に、ウラヌスがさつと受け止める。

「夢見……」

クレセント・ムーンは弱弱しく笑つた。

「あり、がとう。その名前で呼んでくれて」「身体が少しずつ透けていく。

「身体が！」

サターンが叫びをあげると、クレセント・ムーンは困ったよつな口

調で言つた。

「ははは、この身体も限界みたい。でも安心して、みんなは、間に合つたわ」

不安そうな顔をする戦士達に、クレセント・ムーンは静かに微笑むかける。

「大丈夫。私は本来いるべき場所に、戻るだけ。私は眠りにつき、彼女が目覚める」

「夢見さん！」

クレセント・ムーンは一人一人の顔を見ていく。  
「セーラー・ウラヌス。セーラー・ネプチュー、セーラー・サターン、セーラー・プルート。円野うさぎの事を、お願い。泣き虫で頼りないけど…」

戦士達をみると、目に涙を溜めている。あのウラヌスをえ、涙をこらえている様子だ。クレセント・ムーンの身体はもうほとんど消えかかっている。

「私の、こと、も…おぼ、え、て…いて、くれ…ると…、うれ…しい…な…」

まるで泡がはじけるように、クレセント・ムーンの身体は無数の光になつて消えた。

「ゆめみい！－！」

そして全ては光に包まれた。

目を開けると、そこには衛の部屋のリビングだった。

「ここは…？」

「僕達は、戻ってきたのか？」

「うわわー…」

レイは声をあげると、戦士達はまるでなだれ込むように寝室に入つた。衛とちびうさが驚いたように目を丸くする。

「みんな？」

二人に答えず、レイは横たわるうさぎを揺さぶつた。

「うさぎ、うわわー…」

まるで彼女の声に反応したのかのように、うさぎはゆっくりと皿を

開けた。少し視線が泳いでいたが、レイの顔を捉えると口元に笑顔が広がった。

「レイ、ちゃん…」

彼女の視線は、ゆっくりと移っていく。

「まもちゃん、ちびつか、亜美ちゃん、まこちゃん、美奈子ちゃん。  
はるかさん、みちるさん、せつなさん、ほたるちゃん」

美奈子はベットの側に駆け寄った。隣で亜美がほつとしたように泣き崩れる。

「つさわちゃん…！」

泣き崩れる亜美の背中をまことがそっと押した。レイは涙をぬぐうのも忘れ、戻ってきた彼女を迎えた。

「おかえり、つさわ」

## 第十六話 迷い込んだ戦士達 「わしゃ、心の迷図（後書き）

声 …『セ、セー、セイ』

「わしゃ…『おぬ様…』

姫 …『あなたは、こま、しあ、わせ、ですか?..』

「わしゃ…『おせです、おぬ様! レイちゃんがいる。』

おいかちゃんも、亜美ちゃんも、美奈子ちゃんも…。  
さぬかさん、みちるさん、

せつなさん、ほたるちゃん…

まむちゅんに、うらわい！みんな…

みんな、私のそばにいてくれます…。』

「わしゃ…『だから幸せです、おぬ様…』

「わしゃ…『【美少女戦士セーラームーン】 Memorial』

「わしゃ涙…虹の王国、最後の虹』

『虹の光は、愛のメッセージ』

## 第十七話 つむぎ涙—月の王國、最後の日

私はバルコニーにいると、空を見上げた。そこには美しく光る、白い月が浮かんでいた。

「エンディミオン様」

きっとあの方はまた、月の王女プリンセスと一緒にいるかのように、息苦しくなる。

『エンディミオンヲ、ワタシノモノニ……』

はっと我に返り、私は頭を抑えた。震えが止まらない。まだ……。

私の視線は月を離れ、あの彗星がいるであろう場所へと向かう。あの彗星が近づいてくるのは、ずいぶん前からわかつていた。でもこれは予想はしていなかつた。彗星が近づくにつれ、強くなつていく邪悪な波動。私は唇を噛み締めた。ここ数日頭が重く、気をつけていないと意識を持つていかれそうになる。

「誰です！」

気配を感じ、振り返るとそこには召使いが立っていた。あまりにも厳しい表情になつてしまつていたのか、怯えた目で私を見ている。

「ごめんなさい。驚かせてしまつたようね」

「よ、夜の風はまだ冷たいです。お体に触ります。中に入られたほうが……」

私を心配そうに見つめる彼女に、私はそつと微笑んだ。

「ふふ、ありがとう。でも大丈夫だから。あなた、初めて見る顔ね？」

「先日からお世話をさせていただきました、ラビットと申します」

ラビットはそつと深々とお辞儀をした。彼女の透き通るような目は、どこかあのを彷彿とさせる。だからだつたのか、私は気づくと、自分でも思ひがけない言葉を口にしていた。

「ねえ、ラビット。少し話しあう手になつてもうれないかしら?」

「わたくし  
「私で良ければ、喜んで」

私の問いに、ラビットは一瞬戸惑つた顔をしたが、すぐに微笑むとバルコニーに出てきた。

「ねえ、ラビット。今地球に向かつて、邪惡な彗星が近づいているわ」

「邪惡な彗星……」

「その所為で地上でも、邪惡なものが発生してきているわ。そしてもうすぐ、流星雨が降り注ぐことでしょうね」

ラビットは何も言わず、静かに私の言葉に耳を傾けていた。私は苦笑しながら、また空を見上げた。

「きっと綺麗でしょね……不吉の前兆なのに……」

私はため息をついた。

「じきに暗黒の神が目覚めるわ」

「暗黒の神……」

「本当ならその暗黒の神を封じなければならぬといつのこと……。私つたら……。全て壊れてしまえば良いと思つていて」

言つてしまつてから、私は顔を背けた。

「月の王国も、地球の王国も……私もみんな……」

自分で何故、召使いのラビットに向かつてこんな話をしているのか、わからなかつた。けれど何故かやめられない。

「そして……」

私は彼女に向き直つた。

「そしてあの人をどんな形でもいいから手に入れたい。そんな邪惡な事を考えてしまうの」

私はもう一度、彗星がいるはずの場所を見上げた。

「あの彗星の力に、影響されてしまつたのかしら?」

私は自嘲気味に呟いた。わかっている。彗星はきっかけにしか、過ぎない。この気持ちは私自身のもの。

「ダメですよ！」

ラビットが思いがけず大きな声を上げたので、私は目を丸くした。彼女自身もその事に気づいたのか、声が極端に小さくなる。

「ダメですよ。邪悪な力で愛を掴んでも、それは本当の愛ではありません。負けないでください」

ラビットは必死に私に訴えかけてきた。まっすぐな目。本当に似ている。彼女に。月の王女<sup>プリンセス</sup>に。多分、彼女も同じことを言うのに違いない。

「ありがとう、ラビット。もう戻がつていいわ」

私は扉の前に立ち止まると、ノックをした。返事は返つてはこない。ちょっと不思議に思ったものの、私は声をかけ、扉を開けた。

「失礼します」

中に入つてみると、明かりはついてなく、部屋は暗かつた。部屋の主を探して、少し見回す。ふと白いベールのようなカーテンが、風になびいているのに気がついた。

「セレニティ様」

私はバルコニーに出ると、思いにふけり、空を見上げていた彼女に声をかけた。白いドレスを着た彼女は、ゆっくりと振り返る。

「ヴィーナス」

振り返った彼女の表情はどこか暗かつた。多分、彼の事を察じていたのだろう。

彼女の思い人。地球の王子、プリンス・エンデイミオン。

直接かわりのない私達から見ても、彼は申し分のない人間なのが、残念な事に、最近、地球の王国について、あまり良い噂を聞かない。

「大丈夫ですよ、セレニティ様。クイーンも、地球の王国の事は気にかけていらっしゃいます。それに私達、セーラー戦士もいます」

こんな言葉で彼女の不安を取り除けたとは思わなかつたが、彼女は

微かに笑つた。少し間をおいて、彼女は訊いて來た。

「ねえ、ヴィーナス？どうしてあなたは、こんなにまで優しくしてくれるの？私が月の王女<sup>プリンセス</sup>で、あなたがセーラー戦士だから？」

思いがけない問いに、一瞬反応が遅れる。

「突然どうしたのですか、セレニティ様？」

彼女の目を見て、ようやく私は理解した。彼女は不安なのだ。あの女王の娘といつても、彼女はまだ14歳。そしてなるべく彼女には伝えないようにはしているが、最近漂つている不穏な空氣には、彼女も気づいているだろう。特に地球の事。<sup>プリンス</sup>王子の事。

「セレニティ様が私の大切な友達だからですよ。それだけじゃ、理由になりません？」

よほど私の答えが意外だったのが、彼女は一瞬キヨトンとし、そして小さく笑い出した。

「ありがとうございます、ヴィーナス。そういうえば、何か用事があつて来たのでは？」

「あつ、忘れていました。お母様がお呼びですよ？来週の式典の事で話があると」

彼女が玉座に姿を現すと、二人はひざまずいた。

「楽にしてください、二人共」

その言葉に二人は立ち上がる。

「久しぶりですね、ウラヌス。ネプチューーン

「お久しぶりです、クイーン」

「お久しぶりです、クイーン・セレニティ様」

白いチュニックに身を包んだ二人は、女王の言葉に頭を下げた。

「海王星、天王星は変わりありませんか？」

「おかげさまで平和なものです。こうして僕達が自由に動けるほどウラヌスの言葉にネプチューーンもうなづく。

「そうですか。それは喜ばしいことです」

女王<sup>クイーン</sup>のどこか疲れた表情に、ネプチューーンの視線が厳しくなった。

「クイーン、やはり地球ですか？」

女王は悲しそうにうつむいた。

「ウラヌスにはまた、甘いと怒られてしまいそうですね」

「僕は別に……」

反論しようとするウラヌスを、女王は静かにさえぎった。

「甘いのは、わたくし私自身わかっています。けれどセレニティのため、そ

して月の民ため、来週の式典は絶対に成功させたいのです」

女王の表情からは一途な願いを読み取ることができた。

「サターンとプルートには別の勤めがあるため、外せませんでした。代わりにあなた方を呼び戻しました。協力してはいただけないでし

ょうか？」

女王の問いに一人は答えず、同時にひざました。

「二人共ありがとうございます。長い旅路で疲れたでしょう? とりあえず休んでください。他のセーラー戦士達にも、ぜひ顔を見せてあげてください。きっと喜びますよ」

そこには肩までのそろえられた黒髪の少女が座っていた。けれどどこか心ここにあらずという様子。突然、彼女は立ち上がり、部屋の扉へと向かつた。手をかけると扉は開き、長い髪の女性が現れる。「どこに行くつもりですか、サターン」

小さく溜息をつき、彼女は困ったようにサターンを見つめた。

「プルート、私…………！」

サターンの考えを分かつているかのように、プルートは悲しそうに首を横に振った。

「ダメです。クイーンの言葉、忘れたのですか？」

「でも！」

諦めきれないサターンは声を上げた。そんなサターンにつられたのか、プルートの声も大きくなる。

「私に時空の扉の守人という使命があるよ二、あなたには巫女としての使命があるはずです！」

その言葉にサターンは思わず息を飲んだ。その様子にプルートもあわてて顔を逸らす。彼女も分かっているのだ。つらい気持ちは自分と同じ。

「プルート、『めんなさい、私…………』

「いいのですよ。あの二人もいることです。信じましょう、サター

ン」

「ええ。そうね、信じましょう」

部屋を出たところで、誰かとぶつかりそうになつた。両手に書類を抱えていたため、咄嗟にバランスを保つこともできず、よろける。誰かに支えられ、耳元にささやかれた。

「おっと大丈夫かい、子猫ちゃん？」

甘い声に思わず顔が赤くなりそうになつた。上擦りそうになる声を、あわてて抑える。

「ウ、ウラヌス様、お久しぶりです。相変わらずのようで」  
クスクスという笑い声とともに、ウラヌスの影からネプチューも顔を出した。

「お久しぶりですわ、ヴィーナス」

「ネプチュー様も、お元気そうで」

「ずいぶんな荷物だね？どこまで？持つてあげるよ」「えつでも」

「久しぶりなんだからさ。手伝つよ」

「じゃあ、離宮の資料室まで、お願ひできます？」

そう言つて私はウラヌスに、持つていた書類を半分手渡した。

三人で会話をしながら、パレス富殿の廊下を歩いていく。

「最近、どう？」

ネプチューの言葉に、ヴィーナスはため息をついた。

「やっぱり、平和、とは言い切れませんね。お一人も来週の式典の事で呼び戻されたんでしょう？」

ネプチューンがうなずくと、ヴィナースは少し疲れたように続ける。

「ついでに彗星が近づいているのを、お二人はご存知ですか？妖魔の出現率も上がって、頭の痛いことだけですよ」

ムーン・パレスと離宮を結ぶ渡り廊下にてた。ヴィーナスは立ち止まり、ふと空を見上げた。地球が青く、輝いている。

「そういえば、あの娘たちを見ないけど……妖魔のせいしから？」

「マーズたちの事ですか？ええ。私は式典の準備で手が離せないので、彼女達に出てもらいました。もうすぐしたら、戻つてくるはずですよ？」

三人はまた歩き出し、離宮に入る。

「ヴィーナス、ずいぶんと急がしそうだけど、僕達に手伝える」と、他にも何かないかい？」

資料室につき、ウラヌスが訊いて来た。

「大丈夫ですよ。式典の準備は、ジュピターが戻つたら、手伝ってくれることになつてゐるし、お一人は今朝ついたばかりでしょう？ 今日は休んでください」

ヴィーナスの言葉にネプチューンはクスリと笑つた。

「クイーンにもそう言われたのだけど、ウラヌスはやることがないと、落ち着きがなくて」

「おいおい、ネプチューン。それじゃまるで僕が子供のよつじやないか」

「あら、違つたかしら？」

半ばあきれながらも、じゅれ合つ一人を見ていて、ヴィーナスの口元にも笑みが浮かんだ。この二人は本当に仲が良い。

「じゃあ、セレニティ様にも顔を見せてあげてください。きっと喜びますよ」

「ジュピター！」

マーキュリーの声にジュピターは一ヤリと笑つた。目の前に迫つてくる妖魔。

「こいつはまかせておいて！スパークリング・ワイド・プレッシャー！」

放たれた電撃は妖魔を消し去った。

「やつたわね。って、キヤ！」

電撃は勢いを失うことなく、マークをかすりそうになる。そして電撃はようやく暗い空へと消えた。

「もう、ジュピター……！」

「ごめんごめん。でも、おかしいな……」

ジュピターは、怒るマークをなだめながら、不思議がっていた。ここまで技の軌道が外れるのは珍しい。

「見て！」

「えっ？」

「あつ……」

声をあげたマークの指差す方向を見ると、そこには空間の裂け目ができていた。裂け目にバチバチと音を立てながら見える小さな閃光。

「あちやーもしかして、あたしの所為？」

次の瞬間、裂け目から人影が現れた。グッタリとした様子の人影は、重力に引かれ、落ちてくる。

「うわっ危ない！」

ジュピターは瞬時に走り出し、まるで滑り込むかのように入影を受け止めた。

「……たたたた。君、大丈夫かい？」

女の子だった。彼女はグッタリとし、返事は戻つてこない。

「ジュピター、大丈夫？」

マークとマークユリーが遅れて走つてくる。

「その子が裂け目から落ちてきた子？」

「あつ裂け目は？！」

「大丈夫よ。その子が現れると同時にふさがったわ。安定しているから、そうすぐに開くことはないわ」

マー・キュリーは「ゴーグルで確認しながら言つた。

「それより……」

「問題は彼女よね……」

「どうする?」

三人は思わず顔を見合せた。

「放つておくわけにもいかないし、とりあえず宮殿パレスに戻りましょう」

「こには…」

目を開けると、そこは白い天井だった。起き上がり見回す。知らない場所だ。はつきりしない思考に戸惑つていると、声が聞こえてきた。

「良かった、気がついたのね」

そこには白いチュニックを着た亜美が立つていた。チュニックと言つても、現代のモダンなものとは程遠く、どちらかと言つて、ギリシャで着されていた服に似ている。まるで女神のようだ。

「亜美ちゃん…？」

「あら、お友達にでも似ていたのかしら？私はマー・キュリーよ」  
亜美にそつくりな女性は、小さく笑うとそう答えた。しぐさもそつくりだ。うさぎが目を丸くしていると、扉が開き、声と共に一人の女性が入ってきた。やはり、見覚えのある女性。スラリとした彼女もまたチュニックを着ていた。長身の彼女には、マー・キュリーとは違つた意味で白くて長いワンピースは栄える。

「マー・キュリー、はつきの子…って目を覚ましたみたいだね」「まこちや…じゃなくて…もしかしてジュピター？」

「光榮だね、あたしの事を知つているなんて」  
ジュピターは照れたように前髪を搔き揚げた。

「あたしはいつたい…。それにこには…」

少し余裕ができたうえでは、部屋を観察した。  
まるでどこかの宮殿のような豪華なつくり。

でも…何故がなつかしい。

「あちやー。君、何も覚えていないのかい？」

「ジュピター？元はと言えば、あなたの所為でしょ？」

ジュピターはマークュリーに怒られ、小さくなる。そんな様子にうさぎはクスッと笑った。まことと亞美、そのままだ。笑い出すうさぎに一瞬キヨトンとする一人だったが、顔を見合わせ、一緒に笑い出した。

話を聞いてみると、妖魔との戦いで、ジュピターが放った技が反れたらしい。けれどそれだけに収まらず、空間に裂け目を作り…。

「そこから、あたしが落ちてきた？」

驚くうさぎに、ジュピターはコクリと頷いた。

「まったく、ジュピターの馬鹿力には困ったものよね～空間に裂け目まで作っちゃうなんて」

新しい声がしたと思つたら、扉には新たな人影が立っていた。レイちゃん！そんな言葉がうさぎの喉元までかかる。

「マーク…」

「あたしだって、わざとやつたわけじゃないのに…」

マークの辛口な口調に、ジュピターは口を曲げる。

「はいはい、拗ねるのはあと、あと！ジュピター、ヴィーナスが怒つていたわよ？式典の用意、手伝うんじゃなかつたの？」

「あついけない

ヴィーナスもいるんだ。うさぎはそんな事を考えていた。

やつぱりここは、過去の世界。多分、ムーン・パレスだろう。みんなの前世の姿。あまりにもそのままなので、自然と笑顔になつた。ジュピター、マークュリー、マーク、ヴィーナス。彼女達が転生して、うさぎの知るまこと達が生まれる。たぶん、自分の前世や衛の前世も、この宮殿にいるに違ひない。月の王女、セレニティ。そして地球の王子、エンディミオン。その事を考えると、心が痛んだ。この先に待つている未来。わかっていても、つらい。

マーズの言葉にジュピターはベットからスッと立ち上がる。

「じゃあまた後でね、あつえっと……」

あつ、そういうえばあたし、まだ名前、言つていない。

「うさぎ。あたし、うさぎ」

「うさぎちゃんだね。じゃあ、またね」

ジュピターは人差し指と中指をたて、軽く挨拶をした。

「調子いいんだから、ジュピターは」

マーズは苦笑しながら、あたしに向き直つた。

「はじめてまして、うさぎ。私は……」

「マーズでしょ？」

マーズはキヨトンとした顔になる。

「私の事まで知つているなんて、不思議な子ね、あなたは」

「マークリー？もう大丈夫でしょ、この子」

「怪我もないようだし、大丈夫よ」

「いらっしゃい。クイーンが会いたがつていたわ」「  
クイーンつて……。そんな言葉を飲み込み、うさぎはマーズに連れられで、マークリーの部屋を後にする。

階段を降り、中庭を通つていく。バラが咲き乱れる中庭。初めて見るはずなのに、懐かしい気分になる。ふと空を見上げた。そこには青く美しく光る星、地球があつた。

「うさぎ……？」

振り返ると、彼女は足を止め、空を見上げていた。似ている、そう思つた。プリンセスもいつもあんな表情で空を、地球を見上げている。ふとキラリと何かが光つたのが見えた。見間違い？

「大丈夫、うさぎ？」

もう一度声をかけると、彼女は向き直つた。見間違いではなかつた。彼女の目から、一筋の線が光に反射する。

「つむぎ、泣いているの？」

私の問いは彼女は驚いたように自分の頬に手を触れた。私は苦笑しながらも近づき、彼女を抱きしめる。途端に堰を切ったように泣き出す彼女。

「レイちゃん。レイちゃん」

知らない名前を彼女は何度も何度も呟き続けた。

『レイちゃん…』

私はもう一度、強く彼女を抱きしめた。

「落ち着いた？」

あたしは目を逸らしつつも、頷いた。

「良かつた。じゃあ、行きましょう。クイーンがお待ちだわ」  
マーズは笑顔で微笑んだ。泣いてしまったのに、理由は聞かず、ただ抱きしめてくれた。前を歩く彼女に、あたしは心の中で呟いた。  
『ありがとう、レイちゃん』

「クイーン・セレーニティ様、お連れしました

「お入りなさい」

凛とした声が帰ってくる。マーズが扉をあけると、そこは女王の寝室だった。立ち上がる女性。わかつていたこと、わからきっていたこと。それでもうさきは息を呑んだ。

「ありがとうございます、マーズ。しばらく一人にしてもらえるかしら？」

「はい、では私は外で待っています

マーズはさっとお辞儀をすると、部屋を出て行つた。そして女性はあたしに向き直つた。

「もしやと思つていまつたが…

「あたしは…！」

あたしは唇を噛み締めた。ダーク・キングダムがこの戸の王国を滅ぼし、ベリルを封印するため、この人は死んでしまうのだ。

「わかつています。この事は私の胸の内にだけことどめておきましょう

「でも…！」

「私はこうして、あなたに会えただけで嬉しいのですよ。さあ、お行きなさい」

全てを悟ったかのようなその笑顔。あたしは直視できず、戸外へ飛び出していた。

マーズが驚いたように追いかけてくる。

「つさぎーどうしたの、つさぎー！」

マーズがつさぎの腕を掴んだ瞬間だった。爆発音が宮殿を揺らした。

「まさか！」

マーズは躊躇せず、つさぎの腕を掴んだまま引っ張っていく。

「マーズ、痛いよ、放して！」

抗議しても、マーズは何も言わない。厨房につくと、床の戸を上げ、つさぎを無理やり中へと押し込んだ。

「マーズ！」

「つさぎはここに入ってきて、しづらへの間なら安全のはずだから」「マーズ！」

マーズはそつとつさぎの頭の上に手を乗せた。

「そんな顔しないの、この泣き虫さんが。この炎の戦士、セーラー・マーズ様がそう簡単にやられるわけないじゃないの…」

そう言って笑うと、マーズは無理やり戸を開めた。つさぎは暗闇に包まれる。かまわずつさぎは戸をあげようとした。けど、動かない。マーズが戸の上に何かをおいたらしく。

「マーズ！！」

つさぎは戸を何度も何度も叩いた。手が痛くなつても、叩き続ける。

「開けて、マーズ！マーズ！」

また爆発音、近い。ダーク・キングダムが攻めてきたのに違いない。

「あたしだって戦士なのに…きやつ」

突然の揺れにつきはバランスを崩し、頭を打つた。目の前が真っ暗になる。

『今日からは、私が地球と月を支配するのだ!』

『ベリル! プリンセスに指一本でも触れたら、私が許さん!』

『エンティミオン!』

『何故、月の王女をかばう? ! お前は地球の王子。私と結婚すれば月と地球に君臨する、王になれるのだぞ?』

『ベリル。お前は悪のエナジーを秘めた、メタリアに惑わされている。正気を取り戻せ! 邪悪な心を捨てるのだ!』

『ええい、黙れ黙れ! お前も殺してやる! ! !』

『エンティミオン様! ! !』

『来るなあ!』

『エンティミオン様! ! !』

『セレーティ!』

『セレーティ…』

『ハハハハハ、死んだ。月の王女が死んだ!』

『クイーン・セレーティ様。銀水晶を使えば、あなた様のお命が…』  
『私の命など、月と地球の平和にはかえられません』

『プリンセス・セレーティ。そして全てのセーラー戦士たちよ。あなたたちの愛が未来の地球で成就できますように…』

次に気がついた時、あたりは異常な静けさに包まれていた。思い出

すのに一瞬を費やし、つむぎは慌てて戸を開けた。障害物はなくなり、簡単に戸は開く。

「つむ…」

月の宮殿はその面影を残すこともなく、変わり果てていた。見渡すかぎりの廃墟。そんな中、光が地球へ向かって飛んでいくのが見えた。飛んでいくのは月の住民達だ。マーク、ジュピター、マーキュリー、ヴィーナス。プリンセス・セレニティ、そしてプリンス・エンドイミオン。みんなそこにはいる。これで前世のうさぎ達は転生する。

たつた一人、この月に残して。

うさぎは考えるより早く、光が飛び去った場所に向かって駆け出していた。転びそうになりながらも、一生懸命に走っていく。倒れた柱の上に、彼女は横たわっていた。

「お母様！」

うさぎは駆け寄り、彼女を抱き起します。つむぎの声で、女性は目をかすかに開けた。

「セ、レー、ティ？」

「お母様！」

彼女はすぐに微笑んだ。彼女にはわかっているのだ。つむぎが自分の娘が転生した姿だと。

「あなたは、いま、しあ、わせ、ですか？」

そんな彼女の問いに、涙が溢れ出す。

「幸せです、お母様！ レイちゃんがいる。まいりちゃんも、亜美ちゃんも、美奈子ちゃんも！ はるかさん、みちるさん、せつなさん、ほたるちゃん！ まもちゃんに、ちびつかーみんな、みんな、あたしの側にいてくれます！」

うさぎは必死に叫んだ。弱くなつていい鼓動。冷たくなつていい身体。抱きしめた身体からこぼれて落ちていく、命のエナジー。全てを引き止めようとするかのように、うさぎは声のかぎり叫んだ。

「だから幸せです、お母様！」

「よ、かつた…」

皿を開けると、そこには白い天井だった。またムーン・パレス…？一瞬、そんな考えがよぎる。

「気がついた？」

懐かしい声が聞こえてきた。隣を見ると、制服姿のレイが座っている。

「…レイちゃん」

その呼びかけに、レイは優しく微笑んだ。レイちゃんだ。マーズではない。あたしが知っている、レイちゃんだ。

「つかれ…？」

心配そうに覗き込むレイに、つかれは初めて、自分が泣いていたことに気がついた。

「…」

「病院よ。衛さんの部屋では不便だったから、亜美ちゃんのお母さんには頼んだのよ。つかれ、あれから二日も眠り続けていたんだから…」

…

「…田も…？夢、だったのかな…。」

「ねえ、レイちゃん…」

「なあに？」

「あたし…夢を見ていた。ずっとずっと昔の夢。レイちゃんと知り合つより、ずっと前の夢。あたしやレイちゃんが生まれるより、ずっと、ずっと前の夢」

「どんな夢だった…？」

レイちゃんの問いにあたしはそつと皿を閉じた。浮かんでくる前世の世界。前世のみんな。おもちゃさん。あたし。そしてお母様。

「悲しい…夢だった」

## 第十七話 ついで涙ー月の王国、最後の日（後書き）

クレセント・ムーン：『ねえ、ネフライト。たとえあなたが裏切つても、私はあなたを信じるわ』

クレセント・ムーン：『だつて私は信じているから。みんなを。そしてこの世界を』

クレセント・ムーン：『あとはお願いね、ネフライト』

「【美少女戦士セーラームーン】Memories  
月に託す想い！ネフライトの最後」

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十八話 月に託す想い！ネフライターの最後

目を開けると、そこは白い天井だった。

「気がついた？」

懐かしい声が聞こえてきた。隣を見ると制服姿のレイが座っている。

「…レイちゃん」

その呼びかけに、レイは優しく微笑んだ。

「つざわ…？」

心配そうに覗き込むレイに、つざわは初めて自分が泣いていたことに気がついた。

「じじは…？」

「病院よ。衛さんの部屋では不便だったから、亜美ちゃんとお母さんと一緒に頼んだのよ。つざわ、あれから今も眠り続けていたんだから

…」

「ねえ、レイちゃん…」

つざわはそっと自分の涙をぬぐつと、私に話しかけてきた。

「なあに？..」

「あたし…夢を見ていた。ずっとずっと昔の夢。レイちゃんと知り合つより、ずっと前の夢。あたしゃレイちゃんが生まれるより、ずっとずっと前の夢」

「どんな夢だつた…？」

訊いてみると、ぼんやりといつざわは視線を天井へと向けた。でもその様子からして、彼女はどこか遠くを見ているようだった。悲しげで、そしてどこか寂しげな表情もある。

「悲しい…夢だつた」

彼女はそう小さく呟いた。

私には彼女が見た夢はわからない。でも、なんだか想像できるよう

な気がした。彼女の心の中で見た風景。そしてさつきの言葉。

多分、私達の前世の夢を見たのだろう。私達がまだ月で暮らしてい  
た頃の事。私自身、前世について覚えていることは少ない。けれど  
彼女の場合、特別だ。いろいろあつたせいで、記憶がフラッシュバック  
していくても不思議ではない。そこまで考えてから、私の思考は  
前世の事へと戻る。うさぎが月の王女。<sup>プリンセス</sup>私たちがセーラー戦士。そ  
してクイーン・ベリル。彼女とは因縁が深い。彼女こそが栄えてい  
た月の王国を滅ぼした元凶。そして今の私たちが戦士として覚醒す  
ることになつたきっかけ。私は疲れた顔のうさぎを眺めながら、そ  
んな事を考えていると、彼女が私に声をかけてきた。

「ねえ、レイちゃん」

「うん？」

「『めんね、心配かけて』

「ほんと、そうよ。あなたはいつも私に心配ばかりさせて…」

レイは困ったように小さくため息をついた。

「でもね、今はあなたが私の事をまた、『レイちゃん』って呼んで  
くれていることが、本当にうれしい」

「レイちゃん…」

「うさぎ、早く元気になりなさい！元気になつたら、私たちに心配  
かけた分、ぜりんぶ、返してもらうんだからね」

レイはいたずらっぽく笑つた。

「ヒンデイミオン……」

眠りから覚めると、傍らには愛する人の顔があつた。

「おはよづ、セレーニティ」

いつもと変わらない笑顔で微笑んでくれる。

「気分はどうだい？」

「ごめんなさい、心配かけて。もう大丈夫」

私が起き上がるうとすると、彼が助けてくれた。そして抱きしめら

れる。

「信じていたよ、セレニティ」

暮れていく夕暮れの空を見上げながら、ネフライトは周りに気を集中させた。病院を中心に張り巡らせた結界に、不備はない。周りに警戒するべき相手も見当たらない。そしてネフライトはゆっくりと目を開けた。彼女の最後の言葉が蘇る。

『あとはお願ひね、ネフライト』

そう彼女は笑顔で俺に向かって言った。まっすぐで、優しげな眼差し。名を持たないあの女性。月影夢見？クレセント・ムーン？どちらも仮の名前にしか過ぎない。そんな事を考えながら、俺の思考は、彼女と始めて出会った時へと遡る。最初から彼女には驚かされてばかりだった。彼女はまるで蝶のように突然舞い降りた。そして彼女は自分の正体を明かした上で、手を結ばないかと訊いて来た。別に彼女の話を信じたわけではなかった。セーラー・ムーンと知り合つ前だつたら、俺は話には乗らなかつただろう。けれど、俺は話に乗つた。あの目に惹かれたからだ。セーラー・ムーンと同じ……いや、かつて月の王国に君臨した女王<sup>クイーン</sup>と同じ、まっすぐな目に惹かれたからだ。そして、俺は彼女を近くで見てきた。月影夢見、そしてクレセント・ムーン。一見関連性のない行動に見えて、彼女の行動によつて、他のセーラー戦士たちは確かに成長し、眼に見えるぐらいはつきりと強くなつていつた。

『何故、俺を信じられるんだ？』

一度、そんな事を訊いたことがあった。俺の問いに彼女は驚いたよう、俺の顔を見つめた。

『俺がずっと手を貸すとは限らないだろう？単にお前を利用するた

めに、手を貸していいだけかもしない』

すると彼女はおかしそうにクスリと笑った。

『別に私はそれでも構わないわ。私だって同じようなものだもの。目的のためなら、私は何だって利用するわ。その過程にあなたが居たまでの事』

『俺が裏切つたらどうするんだ?』

『それでも私は、あなたを信じ続けると思つわ』

『はつ?』

思いがけない言葉に、俺は間の抜けた返事を返すことしかできなかつた。彼女はいたずらっぽく小さく笑つた。

『そんなに意外?』

『まったくお前には驚かされてばかりだ』

彼女は空を見上げると、静かに話し始めた。

『ねえ、ネフライト。たとえあなたが裏切つても、私はあなたを信じるわ。だって私は信じているから。みんなを。そしてこの世界を。そして彼女は全てを包み込むかのような笑顔で、俺に向かつて言った。

『あとはお願ひね、ネフライト』

「それで、どうなんかい亜美ちゃん?」「さあちやんの様子は?」

まことの間に亜美は安心させるように、おちついた表情で答えた。

「つさきちやんは大丈夫。ちゃんと回復しているわ」

亜美の答えに、美奈子も安堵の表情に変わる。面々はいつもの通り、喫茶クラウンの指定席を囲んでいた。

「問題を挙げるしたら・・・」

「・・・「つさきちやんがまだ戦えない、といつ事かしらね」

アルテミスの言葉にルナが付け加える。

「だから私たちがしつかりしなくちやーー今日はレイちゃんが行つて

いるんだつけ？

「ええ。夕方にははるかさんたちも行くと言つていたわ。私もあとから覗いてみるつもり」

亜美と美奈子が話している横で、まじとは窓の外を見上げた。建物の間から見える空。雲ひとつ無い青空。まじとはもう一度確かめるかのように呟いた。

「本当に恋がしたくて…ハヤシちゃんが房で見てくれて…」

返つたきたのは規則正しい寝息だった。

癪をやつたが、

ショーカなしな。そんな顔でレイは、さきを見つめ、そして腕時計に眼をやつた。もう戻らなくてはならない。6時に火川神社でみんなと会う約束になつていて。ふとノックの音がした。

レイが返事をすると、病室のドアが開き、はるかとみちるが入ってきた。

「出るかやん、みちるやん」

はるかは氣遣うよひ

「つづきの表」が、「はるかは景遷へゆく」と書をかけた。

「ハハハハの様子でござる。」

レイはカバンを取り、軽く頭を下げるといざなって病室を出て行つた。

みちるはレイの座っていた椅子に座り、はるかは近くの椅子を引き寄せた。二人の気配に気がついたのか、うそぎがゆっくりと眼を開ける。

「せぬか・・・わん・・・みちぬ・・・わん・・・・・・・・」

「うむ、おんなじよ。起きてしまつたかしら。」

つむぎは寝起きのボンヤリとした表情で、首を横に振った。そして

彼女が起き上がりうるうとするので、はるかがあわてて立ち上がった。

「どうした？」

「二人に会つてもりたい人が居るので」

「私達に？」

「うさぎは足をもつらせながら、立ち上がつた。そんなうさぎをはるかが咄嗟に受け止める。

「大丈夫か」

「あたしは大丈夫」

レイが神社へと続く階段を駆け上ると、すでに他の三人がレイの帰りを待つていた。

「レイちゃん、 おかえり」

レイが境内に足を踏み入れた瞬間だった。

「？！」

身構える暇も無く、火川神社は邪悪なエナジーに包まれた。

はるかとみちるに支えられながら、うさぎは病院の屋上へとたどり着いた。夕暮れの色に染まっていた空のキャンバスは、もつすでに夜の色に塗りつぶされ、暗くなっている。

「お団子・・・？」

うさぎの意図がつかめず、はるかが不思議そうにうさぎの名を呼んだ。

「はるか」

みちるの声に前を向くと、そこに一人の人間が立つているのに気がついた。人影の正体に気がつくと、はるかとみちるは守るかのように、うさぎの前に立つた。

「お前は！」

「やはり気がついていたか、プリンセス。いや、セーラー・ムーンと呼ぶべきか？」

「ええ。やつとあなたにお礼が言える。ありがとう、ネフライト」

予想に反して、穏やかな表情のネフライトに戸惑いながら、みちるはうさぎに訊いた。

「どういう事、うさぎ？」

「彼はあたしを助けてくれていた。そして守つてくれていた。あなたがあたしの闇のエナジーを引き受けてくれていなかつたら、あたしは戻つてこれなかつた」

「意識があつたのか？」

ネフライトは一瞬驚いた表情をした。けれど、それも一瞬だけ。「別に不思議ではないか」

クスっと笑うとネフライトは続ける。

「だが、お前を傷つけた事には変わりない。すまなかつたあまりにも今まで見てきたネフライトとは違う態度に眼を丸くしながら、今度ははるかが口を開いた。

「お前は何故、お団子を守るような事を……」

「一つは、彼女に頼まれた。そんな所かな」「夢見……」

みちるは思わず彼女の名前を呟いていた。

「そして俺自身も別に復讐をしたかつたわけではない。俺は……ただ眠つていたかつただけなのかもしない。俺はかつて、プリンセス、いやセーラー・ムーン、そしてあの娘こに救われた」

そこまで言うとネフライトは歩み出て、うさぎの前に跪いた。思ひがけない彼の行動にうさぎも目を丸くする。

「俺が言えた義理ではないが、セーラー・ムーン。クィーン・ベルルを救つてくれないか？あの人も本当は孤独な人だ」

彼は・・・・・。みちるは思わず息を飲んだ。以前敵対したネフライトではなく、穏やかに他人を気遣う一人の人間の姿がそこにあつた。どちらが本当の彼か。それは分からなかつた。それを判断するのには、私は彼を知らなすぎる。けれど彼をここまで変えた人物。それは容易に想像することができた。自分の隣に立っている、月野

「つかさ。そして彼と行動を共にしてきた、月影夢見。その一人だろう。そんな事を考えていると、突然、ざわめきを感じた。見ると、遠くでエナジーが放出されている。

「あれは！」

「あつちは・・・まさか・・・火川神社？」

「レイちゃん！」

ネフライトは硬い表情に戻り、舌打ちをした。

「ゾイサイトのやつ、じつちが見つからないかい、向こうに手を出したか・・・」

「待ってネフライト！」

つかさが呼び止める間もなく、ネフライトの姿は焼き消えた。同時に、病院を包んでいた何かが消える。

「ここを結界で守っていたのか？」

「あたし達も行かなきゃ！」

走り出そうとするつかさを、みちるが制止する。

「つかさはここって。その身体じゃ、まだ無理よー。」

「どうして…」

「足手まといだ」

はるかの言葉につかさはキッとはるかの顔を見つめた。数秒のうちに会いの末、つかさが静かに言った。

「いや」

「つかさ・・・わかつて・・・」

みちるが困ったような表情でつかさの名を呼んだ。

「みちるさん、『めんなさい』でもこれだけは譲れないの。みんなが危険な目にあっているのに、あたしだけここに残る事はできない」  
はるかは大きく溜息をついた。

「しょうがない。君が言い出したら聞かないのは、新しいことじやない」

「はるか」

「はるかさん」

「けど一つだけ、約束しろ。無理はしないと  
うさぎは頷いた。

「約束する。無理はしない」

その頃、内部系戦士達は追い詰められていた。エナジーを吸い取るバリアの中、ボロボロになりながらもどうにか立っている状態だ。「さっきの勢いはどうしたのかしら?ふふつ。やつぱりゾイサイト様特製のバリアでは、さすがのセーラー戦士も形無しね。ゾイツ!まるで弄ぶかのように、空中を浮かぶゾイサイトは攻撃を放った。戦士達は飛びのぐが、戦いの疲れの所為か動きが鈍い。

「ハアハア。みんな大丈夫?」

「何とか・・・・・・」

ヴィーナスの問いに、ジュピターが肩で息をしながら答えた。

「ふふつ。ほらほら、逃げないとあたっちゃうわよ?ゾイツ!  
「キヤツ!」

攻撃をかすつてしまつたのか、マーズがふらつき足を抑えている。「しまつた・・・・・・足が・・・・・・」

動けずに居るマーズに気づくと、ゾイサイトはニンマリと笑つた。

「これで止めね、ゾイ!」

「マーズ!」

「マーズ」

「マーズ!!」

避けられない。そう思い、顔を背けた時だった。マーズは、そこに張り詰めていた空気が軽くなるのを感じた。

「バリアが・・・消えた?」

同時に聞こえる、力強い詠唱。

「ワールド・シェイキング!..」

光の球体が地を這いながら、ゾイサイトの攻撃にあたり、相殺した。

「みんな！大丈夫？」

ネプチューンとウラヌスが内部系戦士達の前に立ち、ゾイサイトに向かい合つた。仲間達に駆け寄る、もう一つの影。

「セーラー・ムーン・・・・」

「来てくれたんだ」

安堵する仲間達の表情。

「あら、セーラー・ムーン。見つからなかつたから、彼女達と遊んでいたのよ？やつと出てくれたわね」

「あなたは、ゾイサイト！」

柔らかい物腰とは裏腹に、残酷な面を持つている四天王の一人。

「あなたがダーク・キングダムにいる事は、最初から気に食わなかつたのよ。あなたが裏切つてくれたおかげで、ようやく言い訳ができたわ」

ニンマリと笑うゾイサイトに、ネプチューンとウラヌスは身構える。

「みんなまとめて片付けてあげる」

そういうと、ゾイサイトは指を鳴らした。消えたバリアが内部系戦士達とセーラー・ムーンを包み込むかのように復活する。

「しまつた！」

駆け寄るうつすらウラヌスたちの前に、ゾイサイトが立ちふさがった。

「あなた達の相手はこの子たちよ」

ゾイサイトが再度指をならすと、地面の影がゆっくりと起き上がつた。

「くそつ妖魔か」

「せつかぐの楽しみを、あなた達なんかに邪魔させないわ

ナジーを吸い取る」

マーズの言葉にセーラー・ムーンは安心をせるかのように微笑んだ。

「大丈夫。みんなは、あたしが守るから」

その言葉と共に、彼女の銀水晶の光が強くなつていいく。マークリーは押し付けられている空気が、軽くなつていくのを感じた。けれど、セーラー・ムーンは必死にゾイサイトのバリアに耐えているのが手に取るよう分かる。

「うさぎちゃん！」

その姿にヴィーナスは思わず叫んでいた。

「そんな弱った身体で、いつまで耐えられるかしら？」

ゾイサイトが挑発的な笑みを浮かべ、手をかざした。一瞬のうちに氷の刃が出来上がる。そして微かだがゾイサイトの手が動いた。氷の刃が勢いよくセーラー・ムーンに向かつて飛んでいく。

「セーラー・ムーン！」

「うさぎーーー！」

全ては一瞬だった。あたりは光に包まれた。ウラヌスたちの前に現れた妖魔は消し飛び、内部系戦士達はゾイサイト、そしてセーラー・ムーンが張つたバリアが消えたのを感じた。

「うつ

誰かが声を上げた。

「セーラー・ムーン？！」

光が收まり、あたりが再び見えてくる。声を上げたのはセーラー・ムーンではなかつた。胸を苦しそうに掻んでいるのはゾイサイトだつた。

「ネフライ特、あなた・・・・・！」

憎しみがこもつた目で、ゾイサイトはセーラー・ムーンを守るよう立ちはだかる彼をにらみつけた。

「ゾイサイト。今度は一緒に地獄まで付き合つてもううぜ？」

セーラー・ムーンは大きく目を見開いた。余裕のある口調だが、ネフライ特の肩には深々と、彼女を狙つて放たれたゾイサイトの氷の

刃が突き刺さっていた。

「セーラー・ムーン！」

ネプチューンとウラヌスが駆け寄ってきたのを見ると、分が悪く感じたのか、ゾイサイトはもう一度ネフライトをにらみつけ、姿を消した。その事に安心したのか、ネフライトが肩を押さえ、倒れこんだ。

「ネフライト…」

「無事か？ セーラー・ムーン」

駆け寄るセーラー・ムーンに、ネフライトは笑顔を向けた。けれど、次の瞬間、彼は激しく咳き込んだ。口元が血で汚れる。

「どうして…………」

「さあな、どうしてだらうな…………」

心配そうに見つめるセーラー・ムーンに、ネフライトは穏やかに答えた。

「光には、消えて欲しくなかつた。きっと、お前なら照らせる。どんな暗闇でも…………だから信じてみたくなつた。お前を。お前達を」

その言葉と共にネフライトの視線は他のセーラー戦士たちへと向かう。

「お願ひだ、セーラー・ムーン。クイーン・ベリルを救ってくれないか？」

目に涙を溜めた彼女は何も言わず、ただゆっくりと頷いた。

冷たくなつていく身体、薄れしていく感覚。これでまた眠れる。そうネフライトが思つたときだつた。

「ネフライト、許さないわよ」

突然セーラー・ムーンの口調が変わつた。心なしか、声も別人に聞こえる。

「眠るなんて、私が許さない

「お前は……」

同時に銀水晶が光り、ネフライトの身体は光に包まれた。

「温かい、光だ…」

まるで全てを優しく包み込むかのような、白い月の光。ネフライトは身体が軽くなつていいくのを感じた。

「生きて。今度はダーク・キングダムの四天王ではなく、一人の人間として」

彼女の口から、まるで音色のよつた声で言葉がつむがれる。その姿は彼女の母親、クイーン・セレニティにそっくりだ。

「俺はベリルの元、月の王国を滅ぼした。それなのに……」  
ネフライトはそつと顔を背けた。彼女はまぶしすぎる。彼女の光は温かすぎる。全てを包み込むかのようなその光は、自分の心まで照らしてしまいそうで、居心地が悪い。

「罪の意識を感じているのですか？ だったらその罪は私が赦します。ネフライト、あなたの罪を赦します」

ネフライトは大きく目を見開いた。

「俺はお前を、お前の仲間達を傷つけた。そんな・・・そんな俺をお前は赦すというのか？ 俺に生きろというのか？」  
彼女は静かにうなずいた。

「明日を夢見る権利は、誰にだつてあります。それはあなたにも」  
ネフライトの目から一筋の涙が零れ落ちた。

「セーラー・ムーン……」

「今度は、女の子との約束、破っちゃダメよ？」

おどけたセーラー・ムーンの言葉に、ネフライトは笑つた。まるで重荷を下ろしたかのように、安らかな笑顔。

「ありがとう……」

そんな言葉を残し、ネフライトの身体は光になつて星空へと消えていった。

「彼は……？」

二人の様子を見守っていたマーズが呟いた。他の仲間たちは、ネフ

ライトが消えていった星空を見上げている。

「銀水晶の力で転生するわ。けれど、今度はダーク・キングダムの四天王、ネフライトではなくて、一人の人間として」

そう言うとセーラー・ムーンはすっと立ち上がり、仲間達のほうへ振り返った。目の前に立っている人物が、夢見なのか、うさぎなのか、マーズにはわからなかつた。けれど確かな事が一つだけあつた。彼女はセーラー・ムーン。今はそれだけで十分。

「おかげり、セーラー・ムーン」

マーズがそう言つと、彼女はうれしそうに笑つた。

「ただいま」

## 第十八話 月に託す想い—ネフライターの最後（後書き）

はるか：「おや？なるほど、そういう事が」

みちる：「私もあの子達のおせつかいがつづったのかしら？」

はるか：「君が言い訳なんこめずらしきじゃないか。本当は同じ画家として、あの子を放つて置く事ができなかつただけじゃないのか？」

みちる：「ふふつ。気づかれてしまった？」

「わざわざ…『【美少女戦士セーラームーン】Memories』

守れ少女の夢！ 絵に懸ける想い』

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第十九話 守れ少女の夢！ 絵に懸ける想い

「みんな、また明日ね」

「バイバイ～」

ちびつかちやんと手をつなぎながら帰つて行くつむぎちゃん見送つている。隣に立っていたまこちゃんの声が聞こえた。

「ホントに帰つて来てくれたんだね」

「ええ」

自分の呴きが聞こえていたとは思つていなかつたらしく、彼女は私の事を驚いたように見つめた。

「でも、心配だわ」

「どうしたんだい、亜美ちゃん？」

まこちゃんがキョトンとした表情になる。

「つむぎちゃんの事。いろいろあつたから。今、かなり複雑な気持ちじゃないかしら？」

「・・・ネフライツの事もあるしね」

まこちゃんが溜息と一緒に呴いた。

「大丈夫よ」

私たちの会話に気づいたのか、美奈子ちゃんが加わってきた。

「あたし達がいるじゃない。つむぎちゃんは一人じゃない」

美奈子ちゃんはつむぎちゃんが消えた方向を見ながら、力強く言つた。

「信じましょう、つむぎちゃんを」

「ただいま～」

「おかえりなさい、つむぎ、ちびつかちやん  
家に入ると、育子ママが迎えてくれた。

「つむぎ、帰つてきた早々悪いんだけど、お使い頼めるかしら？ち  
よつと買つて忘れちゃつて」

「わかった」

予想していた反応とは、正反対の物が返ってきた。育子ママも一瞬驚いていたようだったが、お金とメモをつねりに渡す。

「じゃあ、行つて来ます

「お願ひね

うさぎはカバンだけ置くと、また出て行つた。

「やっぱり元気ないわね、あの子

育子ママが目を細めながら、うさぎのカバンを手に取つた。うさぎのバカ。育子ママも心配しているのに。そう、心中で考えながら育子ママを見ていると、育子ママはあたしが見ている事に気づいたのか、笑顔で振り返つた。

「ちびうさぎちゃん、今レモンパイ作つてあるといふの。手伝つてくれるかしら?」

「うん!」

「はあ~」「はあ~

気づくと私はまた溜息をついていた。まったく、なんで私がお爺ちゃんの迎えに行かなきゃいけないのよ~。珍しく雄一郎と出かけたと思つたら、お財布落として一人で立ち往生とは・・・。

「はあ・・・

もう一度溜息が零れ落ちる。まったく・・・。自動ドアをぐぐり、私は週末のにぎわつてゐるデパートに足を踏み入れた。

「この人混みの中を探せと・・・?」

私は半ば呆れながら、三度目の溜息をついた。週末、そして何か催し物もやつてゐるらしく、とにかく人が多い。ここで一人を探さなきゃいけないと思つだけで、うんざつする。

「あら?」「

ふと、一枚の絵が目に入った。その絵の隣には【ファンタジー絵画

【展】と書かれた看板。デパートの催しで、展覧会を開いていた。けれど、他の絵は目に入らなかつた。

「IJの絵・・・」

まるで引き寄せられるかのように、気づくと私は絵に近づいていた。月夜の湖畔がテーマの絵だ。湖の水面に反射して映る白い月が、すぐ印象的だ。

『あなた、モデルになつてくれない?』

『ねえ、レイちゃん? 画家ってね、心を描くのが仕事だと思つ。それが自分の心の事だつてあるし、モデルの心の事もあるわ』

『大切なもののためなら、いくらでも強くなれるものよ?』

「夢見さん・・・」

ふとあの人の名前が零れ落ちた。この絵・・・似ている。夢見さんの絵に似ている。

「素敵な絵よね」

絵に見入つていると、聞きなれた声が肩越しにした。

「みちるさん!」

彼女はレイの横へ立ち、改めてじつくりと絵を眺める。

「これをあの子が描いたなんて、中々信じがたいわね」

「みちるさん、この絵を描いた人を知つてるんですか!」

まるで食いつくように質問するレイ。そんな彼女に、みちるはいたずらっぽい口調で逆に訊いて来た。

「会つてみたい?」

「はい!」

夢見が消え、うさぎが戻つてくると、まるで彼女が最初から存在していなかつたかのように、人々の記憶から消えていた。セーラー戦士たちの記憶を除いて。そんな中に会つたこの絵。気にならないはずがない。みちるは静かに微笑むと、手帳を取り出した。そして何かを書き込むと、そのページを破りとり、レイに差し出す。

「彼女は、ここにいるわ」

「みちるさん………！」

メモを見つめるレイの瞳が、驚きで大きくなる。

「あとは……自分で確かめる事ね」

「ありがとうございます」

「おや？」

すれ違った女性に、キヨトンとはるかは振り向いた。

「レイちゃん？」

脇田を降らず自動ドアに向かって立るレイは、こっちには気づかな  
かった様子だ。彼女が来た方を見ると、みちるが立っていた。

「みちる」

ふと彼女の後ろの絵に目がいく。

「なるほど、そういう事か」

「私もあの子達のおせっかいが、うつったのかしら？」

みちるは少し戸惑ったような表情で、もう一度絵を見上げた。夜の  
湖畔。水面に映る月。月に特別な想いを持つていなくとも、この絵  
は人を惹き付ける何かを持つている。

「君が言い訳なんて、めずらしいじゃないか。本当は同じ画家とし  
て、自信をなくしたあの子を、放つて置く事ができなかつただけじ  
やないのか？」

「ふふつ。気づかれてしまった？」

みちるはレイが出て行つた方をみつめながら、ポツリと呟いた。

「せめて、きっかけになってくれればいいけれど……」

はるかはそつとみちるの肩に手をおいた。

「きっと、大丈夫さ」

レイは立ち止まり、ボンヤリとみちるから貰つたメモを見つめていた。勢いそのまま見舞いのため花束を買つたが……考えあぐねていた。メモにはみちるの整つた文字で、病院、病室、そして『月影

夢見』とこ「う名が書かれている。

「どうしよう……」

この子こそが本来の『月影夢見』。レイが知つてゐる『あの人』ではない。面識はない。彼女の事は、はるか達を通じ話に聞いていただけだ。

会つてどうするの？ 絵が似てゐるからつて『あの人』と重ねすぎでない？ そんな疑問がぐるぐると、頭の中を廻る。

「レイちゃん」

声をかけられ振り向くと、机にはうさぎが立つていた。

「うさぎ」

「どうしたの、ことなといいで？」

「うせきじん、どうしたのよ？」

「ママのお使い。レイちゃんは？」

一瞬、答えに詰まる。

「お、お見舞いに行こうかと……」

「お見舞い？」

うさぎは好奇心旺盛な田で聞き返していく。いつなつたら多分私が話すまで話してくれないだろ？ 私はため息をつきながらも、うさぎに説明することにした。

「……とこ「う事なの。それで迷つてこたんだけど……」

それまで何も言わぬ話をしていたうさぎが聞いてきた。

「ねえ、レイちゃん。レイちゃんはどう思つたの？」

「どうつて？」

うさぎは少し考へ、言葉を続ける。

「絵を見て、みちるさんによ夢見ちゃんの事を聞いて、どう思つたの？」

『会いたい』。『会つてみたい』。ただそれだけだった。

「だったら十分じゃない」

「つかせはピッポンと立ち上がり、手を取り、私を無理やり立ち上がらせた。

「う、つかせ？」

「お見舞いに行くんでしょ？」

そして私の手を握ったまま走り出す。私は思わずバランスを崩しそうになつた。

「う、つかせ！」

「レイちゃん、早く、早く！」

「！」あたりのはずなんだけど……」

「出て行つて！」

病院につき、見舞い相手の病室を探していた一人は、大声に振り向いた。見ると、ある病室の扉が開きっぱなしになつていて。

「ママなんて大嫌い！ 出て行つて！」

少女の声に、一人の女性が押し出されるよつて出てきた。そして女性の目の前でピシヤリと閉ざされるドア。

「夢見！」

「どうしたんですか？」

「お恥ずかしい」とこりを。あなたたちは？」

レイは寂しそうに病室のドアを見つめる女性に声をかけた。

「えつと、その……」

「夢見ちゃんのお見舞いに」

言ひ出せずにはいるレイに変わつて、うさぎが答えると、女性は笑顔へと変わる。

「あら、うーー夢見も喜ぶと思つわ」

「うさぎのは……」

「うさぎ……」

躊躇われる内容の問いかに、レイは思わず声を上げた。その様子に女

性は困ったように笑う。

「いいのよ。見られてしまったし」

そういうと、彼女は近くのベンチに座った。ため息交じりで話し始めた。

「夢見が事故にあったのは、知っているわね？その時、右腕も怪我してしまって。お医者様はリハビリで直ると言われただけど、あの子、すっかり落ち込んでしまって・・・」

「そりなんですか・・・」

レイはデパートで見た絵を思い出していた。あれほどの絵を描く子だ。きっと絵が大好きな子なんだろう。それが怪我で描けなくなり、落ち込むのは不思議ではないかもしねり。

「あら？ もう、こんな時間？」

予定が入っているのか、夢見の母親は驚いたように時計を見ると立ち上がった。

「ぜひゆっくりして行ってね」

そしてちこさく一礼するとその場を去つていった。その様子を考え深く見送っていたレイ。「うわざわは笑顔で声をかける。

「レイちゃん、会つてみよ？」

「えつ？ あつ、そうね。そのために来たんだしね」

半分は自分に言い聞かせている様子のレイに何も言わず、うわざわは病室のドアをガラリと開けた。

「失礼しま・・・ふわや？！」

「う、うわざわいー！」

枕を顔面に受け、伸びるひびき。レイは慌ててうわざわが手放した花束を受け止めた。

「マ、ママじゃない？」

そしてそこには果然とした少女の姿があった。

「『めんなさい、あたし、ママかと思つて・・・』

「気まずそうにする少女に、レイは安心されるように笑つた。

「大丈夫。大丈夫。丈夫さだけがとりえだからね、う・さ・きは」  
レイはワザとらしく『「つかれ』を強調させる。そんなレイに「つかれ」はすぐ反応した。

「あっ、レイちゃん ひどい」

そんなレイと「つかれ」のじやれあいを可笑しく感じたのか、少女は笑い出した。レイと「つかれ」も顔を見合わせ、笑顔になる。

「血口紹介がまだだつたわね。私はレイ。火野レイ」

「あたしは月野うさぎ。よろしくね」

「つかれさん、レイさん」

車椅子の少女は、確認するかのように一人の名前を繰り返した。

「ねえ、夢見ちゃん、天氣いいし、ちょっと外出でみよっ?」

「えつ? でも?」

「つかれの勢いに押され、戸惑う夢見。けれどそんな様子に構わず、つかれは後ろに回りこむと、車椅子を押しはじめた。

「ほりほりー行くよ」

「つかれさん?...」

「本当だ・・・天氣がいい」

うさぎに車椅子を押され、外に出た夢見はゆっくつと深呼吸をした。  
そして小声で呟く。

「忘れてた。外がこんなに気持ちいいなんて」「でしょ~」

前を歩いていたレイがクルリと、笑顔で振り返つた。「つかれ達は足を止め、近くのベンチに座る。寂しそうな少女の横顔に、レイは気づくと口を開いていた。

「ねえ、夢見ちゃん。もう一度だけ、絵がんばってない?」「レイさん?...」

レイの問いに、夢見は不安そうな表情へと変わる。

「今日、デパートで夢見ちゃんの絵、見たの。すくなく綺麗だった。

私、もつと夢見ちゃんの描いた絵が見たい」「でも・・・」

渋る夢見にうやまは優しげな眼差しで微笑みかけた。

「ねえ、夢見ちゃん。どうして、夢見ちゃんは絵を描き始めたの?」「私は・・・」

『ママ、見て見て。絵、描いたの!』

『上手にかけたわね、すごいわ』

『えへへ』

『描きたい』

『夢見、こんどのコンクールでも入賞ですって』

『僕は好きだよ、夢見の絵』

『もつと描きたい』

『救急車だ! 女の子が轢かれたぞ! 早く!』

『月影さん、交通事故にあつたらしいわ。なんでも腕も怪我してしまつたって話よ』

『可哀想に。絵、どうするのかしら。今までのようにはいかないでしょひね』

『描けない』

『指が動かない』

『大丈夫だよ。リハビリでまたすぐに描ける様になるぞ』

『もう、前のようにには描けない』

『もう描けない。かけない、かけない、カケナイ、カケナイ・・・』

「いやあああああ！！！」

「夢見ちゃん、どうしたの？」

胸を掴み、夢見は突然苦しみ始めた。レイは何かを感じ取ったのか、離れる。

「うさぎ、離れて！」

「えっ？」

夢見が立ち上がった。その拍子に車椅子が倒れる。そしてまるで爆発のように、邪悪なエナジーが広がった。

「きやつ！」

レイの声に気を取られ、反応できずにいたうさぎは、波動に突き飛ばされた。

「うさぎ…」

「そんな、夢見ちゃんが妖魔に？」  
「うさぎーとにかく、変身よ！」

レイと領き合いつと、うさぎは自分のコンパクトを掲げた。

「ムーン・エターナル！」

「マーズ・クリスタル・パワー！」

二人の声が重なった。

「メイクアップ！」「メイクアップ！」

守護星の力強い光に一人はそれぞれ包まれる。そして光が消えると、そこにはセーラー・ムーンとセーラー・マーズの二人が立っていた。

「夢見ちゃん！」

まだ夢見の意識が残っているのか、レイの声に妖魔は苦しそうにう

めき声をあげる。けれど、それも長くは続かなかつた。妖魔はもう一度咆哮はあげると、だらりと腕を下げる。瞳に残っていた光も完全に消える。

「脆いものだな」

そんな言葉と共に、一人の男が妖魔の影から現れた。

「あなたは・・・！」

「クンツァイト！」

マーズは今にも噛み付きそうな勢いで突っかかる。

「夢見ちゃんに何をしたのー！」

「たいしたことはしていないさ。俺はただ夢が絶望に変わるよう、

背中を押したまでのもの」

「どうじうことー！」

「絶望ほど、闇のエナジーを生み出すものはない。絶望と夢とは表裏一体。夢見る人間の心など脆いもの。少し揺さぶればこの通りだ」そう言うと、クンツァイトは右手を開いた。ボワッと黒い炎のよつなものが浮かび上がる。

「許せない」

「許せない。夢見る女の子の気持ちをこんな風に踏みにじるなんて、許せない！」

怒る戦士達にかまわず、クンツァイトはあざ笑うように叫んだ。

「まあ、せいぜいほやくんだな。エナジーは手に入れた。もう、ここには用はない」

「待ちなさい！」

追いかけようとする一人の前に妖魔が立ちふさがる。

「お前達の相手など、こいつで十分。行け、ドリームー！」

クンツァイトが命令すると、妖魔の叫び声があたりに響きわたつた。

「ぐああああー！」

「夢見ちゃんー！」

妖魔はマーズの声に反応し、まっすぐと彼女に飛び掛つていく。

「マーズ！」

その様子にクンツァイトはニヤリとする。スッと消えた。マーズは紙一重で、妖魔の攻撃を避ける。

「夢見ちゃん！」

マーズはもう一度彼女の名を呼ぶが、妖魔はただ奇声をあげるだけだ。もう声は聞こえていないらしい。マーズは下唇を噛み締め、しつかりと妖魔を見据えた。妖魔の姿に夢見の姿が重なる。

『夢見ちゃん、私、信じているから』

『夢見ちゃんが絵に懸ける想い。そんな簡単に消えてしまつものじやないつて！』

接近していた状態から、マーズは大きく飛びのき、間を取った。そして凛と響く、炎の戦士の声。

「マーズ・フレイム・スナイパー！！」

マーズの必殺技が妖魔を貫いた。苦しむもがく妖魔。

「セーラー・ムーン！」

「わかつてる」

マーズの声にセーラー・ムーンは右手に集中する。が、妖魔が振り回した腕が彼女を掠りそうになる。

「キヤつ！」

セーラー・ムーンがよろけた。それをチャンスと、マーズの攻撃からよろよろ立て直した妖魔が、腕を振りかぶった。

「セーラー・ムーン！」

マーズの悲鳴。その時妖魔の動きが止まつた。見ると、腕にバラが刺さっている。そして近くの木陰から、タキシード仮面が颯爽と現れた。

「明日を夢見る権利は、誰にだつてあるも。それを踏みにじる悪夢は、この私が許さん！」

「タキシード仮面さま！」

妖魔はバラにひるみ、動けずに入る。

「今だ、セーラー・ムーン！」

「はい！」

セーラー・ムーンは力強く答えた。右手をかざすと、そこにムーン・パワー・ティアルが現れる。以前の戦いで壊れてしまつたステッキであつたが、そんな様子は感じさせずセーラー・ムーンの手の中にスッと納まる。そして彼女はムーン・パワー・ティアルを掲げた。

「シルバームーン・クリスタル・パワー・キッス！」

光がどんどん集まり、あたりは温かい光に包まれた。妖魔は悲鳴をあげると、再び夢見の姿にもどつた。力なく倒れる彼女の身体を、マーズがさつと受け止める。その様子にセーラー・ムーンはほっとしたように、息をついた。

「よくやつたな、セーラー・ムーン。君はこの子を救つたんだ」タキシード仮面は優しげに、セーラー・ムーンに語り掛けた。

「タキシード仮面様……」

「さらばだ。また、会おう」

タキシード仮面はそつと微笑むと、マントを翻し、その場を去つていた。

何かが見えたような気がした。温かい光の中に立つてゐる、あの人は。綺麗……。あれは、天使……？

「夢見ちゃん、夢見ちゃん！」

私の名前。誰かが私を呼んでいる。起きなきや。起きなきや。起きなきや。

「夢見ちゃん！」

目を開けると、そこには心配そうに私を見つめる、レイさんの顔があつた。レイさんの肩越しに、つわぎさんも覗き込んでいる。

「レイ……さん？ それにつわぎさん？」

「良かつた。気がついて」

「あれ、私。どうしたんだっけ」

なんだか頭がボンヤリして、はつきりしない。一緒に外に出てきた事までは覚えているけど……その後、どうしたんだっけ?思い出せない。でも……何かすゞく綺麗なものを見たような気が……。

そこまで考えると、夢見は思わず起き上がっていた。

「レイさん! 私、もう一度がんばってみる。絵、描いてみる!」

「夢見ちゃん……」

「私、天使を見たんだ。すゞく綺麗な天使を。もう一度描きたい。あの天使を描いてみたい!」

レイは夢見の突然の言葉に驚きながらも微笑んだ。また描きたい。そう言ってくれただけで十分。

「ねえ、レイさん。」

そんな事を考えていると、夢見が再び声をかけてきた。

「なーに?」

夢見は少し照れた様子で言葉を続ける。

「私の怪我が治つたら、レイさん、モテルになつてくれる? うわざわざも!」

「もちろん、いいわよ。ねつ、うわざわざ?」

そう言つて、うさぎの方へ振り向くと、彼女はいたずらつぽく答えた。

「綺麗に描いてくれなきや、だめよ?」

「うん!」

そして三人で顔を見合させ、自然と一緒に笑い出した。

「すっかり遅くなっちゃつたわね」

病院を後にすると、すでにあたりは夕方だった。

「でも良かつた。夢見ちゃんに会えて」

嬉しそうに話すうさぎを見ていて、私も笑顔になる。『夢見ちゃん』

とつせき。不思議な縁だ。

「そうね」

そう答え、道を歩いていると、つせきが急に立ち止まり、大声を上げた。

「ああああああああああああああ！」

「ど、どうしたのよ、いきなり」

「ママにお使い頼まれていたんだー！ レイちゃん、またね～」

慌てて駆けていくつせきの後ろ姿を見送りながら、私は苦笑した。

「まつたく・・・」

歩き出そうと足を踏み出した時、ふと頭に何かが引っかかった。私も何か、忘れているような気がする。

「あれ・・・？ 私も何か用事があつたような気が・・・」

立ち止まり、腕を組み、そして考える。でも、思い当たらぬ。

「まつ、いっか。私も帰らうっと

一方、その頃。

「雄一郎・・・」

「・・・・・はい」

「レイ、遅いな

「・・・・・はい」

## 第十九話 守れ少女の夢！ 絵に懸ける想い（後書き）

美奈子（興奮気味に）：『みんな、スクープよ。大スクープ！』

レイ：『どうしたのよ、そんなに慌てて』

美奈子：『まじちゃんの先輩が現れたのよー！』

「あ、ほんの先輩って……」

うさぎ（まことを真似ながら）：『あの人の眉毛の形、音振られた先輩にそっくり（うつとり）』

レイ：『・・・の、あの『先輩？』

美奈子：『そーなのよー！』

# うさぎ：『美少女戦士セーラームーン Memories』

恋は流れ星と共に?まじめやんの先輩現る?

!

『月の光は、愛のメッセージ』

## 第一十話 恋は流れ星と共に?まこちゃんの先輩現る?!

「美奈子ちゃん、まだ行くの?」

まことiga根をあげるのも、不思議ではない。手に一杯の買い物の戦利品。自分の物が混ざっていないわけではなかつたが、ほとんどが美奈子が買つたもの。

「もつちろん。今日は一皿付き合つてもいいわよ、ま・こ・ちゃん」機嫌よく、鼻歌まじりに返つて来る返事に、まことは苦笑した。今日は美奈子と二人でショッピングにきていた。最初の内はそれぞれ自分の物を持っていたが、美奈子の戦利品がかなり増えてきたため『少し持とうか?』と聞いたところ、知らぬ間にまことigaが全面的に荷物持ちになつていていたわけだ。

「別に重いわけじゃないし・・・まついつか」

「まこちゃん!見てみて、この服可愛い!」

見ると美奈子は少し先のショーウィンドウの前で立ち止まり、手招きしている。

「やれやれ」

美奈子の所へ急いでと歩き出した時、ふと呼び止められた。

「まことじやないか!」

「えつ?」

振り返るとそこには眼がねをかけた男性が立つていた。思わず手に持つていた紙袋がストンと落ちる。

「やつぱり、まことだ」

「先輩・・・」

「ひそしげりだね、まこと」

「まこちゃん~!見てみて、この服可愛い!」  
まこちゃんを手招きして、あたしはもつ一度ショーウィンドウに田をやつた。このスカート、いいな~。これにあのブラウスとさつき

買つたアクセサリをつけて・・・。そんな事を考えてくると、あたしはまこちゃんがいくら待つてもこない事に気づいた。

「まこちゃん?」

振り向くと、まこちゃんは男性と話をしていた。

「あら、かつこいい」

あたしはいたずらをしたい衝動にかられ、まこちゃんに後ろから静かに近づいた。

「まこちゃん?」

「う、うわつ美奈子ちゃん?..」

あたしの突然の登場に、飛び上がりそうになるほど驚く彼女。まこちゃんには珍しく、かなり動搖している。微かだが頬を紅く染めているような気さえもある。

「だ~れ~?まこちゃんのお知り合い?..」

「えつと、その、昔、学校で一緒にいた、一挺木先輩（いつみけいせう）」

「一挺木正也です。よろしく」

「まこちゃんの友達の、愛野美奈子です。はじめまして~」  
あたしは素早くまこちゃんを振り向かせ、相手に聞こえないようにこつそりと聞いた。

「まこちゃん、先輩って『あの』?」

「・・・うん」

頬を染め、照れたように頷くまこちゃん。

「やつぱり~」

仲間内の中でもかなり惚れっぽいまこちゃん。それはもう周知の事実。そしてその時いつも飛び出すのが、『昔、失恋した先輩に似ている』だった。そしてその先輩が、目の前に立っている人物らしかった。

こそこそと話をしていると、その一挺木が声をかけてきた。

「どうだい、久しぶりに会つたんだ。お茶でもどうだい?そつちの友達も一緒に」

「・・・はい」

まじとは小さくつねずく。あたしはまじいばばかり、声のトーンをあげた。

「じつめ～ん、まじちゃん。あたし、用事があるんだつた。一人で楽しんできて」

「そりか、残念だな」

「み、美奈子ちゃん？」

あたしに用事がない事を知つていてるまじちゃんは、困惑したようにあたしの名前を呼ぶ。あたしはそつと彼女の耳に口せをやいた。

「ふふ、せつかくの弔余、邪魔するのは悪いわ～」

そしてあたしの戦利品をつけとり、まじちゃんの背中をポンッと叩いた。

「まじちゃん、また明日ね～」

あたしは手をふり、一人と別れた。歩きながらも、一ソマロとした笑みが口元に広がる。

「ウフフ。これは、スクープだわ。みんなに知らせなくちゃー。」

「みんな、スクープよ！大スクープ！」

そしていつものようにクラウンヘと足を伸ばすと、いつものメンバーが集まっていた。うさぎちゃんは三人で出かけていたのか、衛さんちびうさちゃんもいる。

「騒々しいわね、どうしたのよ、そんなに興奮して」

レイちゃんはのんびりとコーヒーへと手を伸ばした。

「まじちゃんの先輩が現れたのよー！」

「まじちゃんの先輩つて・・・」

亜美ちゃんは小首をかしげると、うさぎちゃんが祈るじぐせをしながら、今話題になつてている人物の真似をした。

「『あの人人の眉毛の形、昔失恋した先輩にそっくり』」

「・・・の、『あの』先輩？」

レイちゃんがうさぎちゃんを指差しながら、聞いてきた。

「そーなのよー！」

あたしがそう答えると、三人は顔を見合せた。

そして一瞬の沈黙の後、

「ええええええええええええええええええ？」！

と言つ声がクラウンに響くことになる。

「でつどんな人だつた？」

「かつこいい人だつた？」

「素敵な人だつた？」

質問の嵐。

「まこちゃんが好きになるのも不思議じやないと思つわ。たしかにかつこよかつたですもの」

四人がまことの『先輩』の話で盛り上がり上がつてしているのを眺めていると、ふとちびうさが袖を引っ張つた。

「どうしたんだい、ちびうさ？」

「まもちゃん、あれ」

そう言つて窓の外を指差す。つられて外を見ると、その先には見慣れた顔の人物がこちらへ向かつて歩いてくるところだつた。

「おい、うさこ」

「なーに、まもちゃん？」

「話題の彼女の到着のようだよ」

同時にクラウンの自動ドアが開く。

「あつまこちゃん！」

まるで獲物に飛び掛るかのような素早い動きで、美奈子はまことの右腕を取つた。左腕は一瞬遅れてうさぎが掴んでいる。

「美奈子ちゃんにうさぎちゃん？」

「洗いざらい白状するまで、逃がさないからね」と美奈子。そしてうさぎは好奇心で目を輝かせている。

「こらこら一人共、取調べじゃないんだから」

呆れ顔のレイがまことにしがみつく一人を引き剥がした。

「やつよ、無理強いはいけないわ」

亜美も一人を諭すように言つ。

「でも、隠し事もいけないと思つの」

淡々と続ける亜美の言葉に、あたりがさつと寒くなつた。

「亜美ちゃんが一番こわい…………」

「えつ？あつ？私……」

ちびりの一言に亜美は顔を赤らめ、読んでいた参考書の中へと沈む。

「あははは、こつやまこつたな。ビリセ美奈子ちゃんでしょ～ばらしたの」

今まで黙っていたまことが苦笑しながら席についた。

「だつてえ～。こんな面白い事、黙つているなんてつまらないじゃない？」

まことの言葉に美奈子はあるで子供のように口を曲げた。

「まついいんだけど。あたしもちよつと皆に話を聞いてもらいたくて、ここに来たんだからや」

そんなまことの言葉に、仲間たちの視線が集まる。

「美奈子ちゃんがどこまで話したかわからないけど、二挺木先輩とは、十番中学に転校してくる前の学校で一緒にたんだ」

「ちよつと待つて、まこちゃん」

ふと、亜美が何かに気づいたのか、まことをたえていた。

「一挺木……先輩つてもしかして、私達より一学年上の二挺木正也くん？」

「へえー亜美ちゃん、なんで知ってるの？」

当然の疑問に美奈子が質問していく。

「全国模試で、いつもトップのほうで名前を見かけていて……集中する視線に小さくなりながら、亜美はポツリと呟いた。

「さつすが亜美ちゃん」

「見つける場所が違うわ～」

「ほえ～。まこちゃんの先輩ってそんな頭いいんだ～」

仲間たちはそれぞれ感想を述べる。そんな様子にまことは少し照れながらも微笑んだ。

「そりそり、学校でも有名でね。でもどこか寂しげな雰囲気をしていて、そこに惹かれたんだけどさ・・・」

ニンマリと笑う仲間たちの表情に、自分が何を喋っているのか自覚したのか、まことは思わず赤くなつた。

「つてそんな事はどうでもいいの！でつ今は大学の関係で、しばらぐこの街にいるみたいなの」

「うんうん」

「それで今晚、手伝つている天文台で星見に来ないかって誘われて・・・」

すると、まことは突然手を合わせ、頭を下げた。

「誰か一緒について来てくれない？やつぱり、あたし一人で行くのはなんだか気まずくて・・・」

「天文台？」

「キャー！それってデートのお誘いじゃない？」

「そんなんじやないつて。だつてあたし、昔振られているんだよ？」

「昔は昔。今は今。チャンスよ、まこちゃん！」

「ははは・・・」

「でも、星の下でデートなんて憧れるわね～」

今度は亜美だ。想像しているのか、どこか遠くを見ている。

「亜美ちゃんまで。ほんと、そんなんじやないんだから」

「じゃあ、な・ん・で、一人で行くのが気まずいのかしら～まこちゃん？」

「もつ、みんなしてあんまりいじめないでよ～」

盛り上がるみんなの横でうわきは小首をかしげていた。そして隣に座る衛に声をかける。

「ねえ、まもちゃん。天文台つてもしかして・・・」

「そうかもな」

「ま」「ちやん、その天文台つて東京湾天文台？」

「うん、そうだけど」

ま」との答えに今度はちびうさが加わる。

「じゃあ、パーと一緒にだ」

「えつ？」

「実は俺達、せつなに誘われて、天文台のほうへ遊びに行く予定な

んだ」

「だから、ま」「ちやん、一人じゃないよ」

「ありがと、うさぎちゃん！」

まことは本当に嬉しそうに喜んだ。そんな様子に黙つていないので残りの面々。

「そういえば、もうすぐ流星群がみれるらしいわよね」

「ま」「ちゃんの先輩、気になるな」

「といつ事で……」

「みんなで遊びに来ました～」

数時間後に扉を開けたせつなの大を丸くさせる事になる。

「じ迷惑でしたでしようか……」

小さくなる亜美に、せつなはすぐに微笑む。

「いいえ、ようこそ東京湾天文台へ」

「おじゃします～」

「パー、こんばんわ！」

「こんばんわ、スマール・レディ」

奥に行くと机でなにかパソコンに向かっている青年が座っていた。

メンバーに気づくと、青年は立ち上がった。

「彼は最近仕事を手伝つてもらつている一挺木正也君

「ハンサム～」

「確かにかつこいい～」

「でしょ～！」

予想外の反応に一挺木はキョトンとする。

「あら、みなさんお知り合い？」

「まこちゃんの中学の頃の先輩なんだって」

ちびうさの言葉にせつなの視線はまことへと移る。

「なるほど」

「せつなさんまで、なんでそれで納得するんですか～！」

顔を赤くしながらアタフタとするまこと、場は笑いに包まれた。

「なんだかわからないけど、みんな、まことの友達なんだね。二挺木正也です。よろしく

「」

しばらくそれぞれ観測を楽しんどるといふと、二挺木が立ち上がった。

「せつなさん、俺、お茶でもいれてきます」

「ありがとうございます」

「あたしも手伝つよ」

二挺木の言葉にまことも立ち上がった。

「私も・・・」と言い出しそうな亜美を美奈子がこことぞと大声で押し付ける。

「お願ひね、まこちゃん」

「そつちにポットがあるから、お願ひできるかな？ティーバックは左の棚にあるから」

「はい」

まことに場所を教え、二挺木は他の棚からマグカップを出していく。手伝つといつても、用意をしてしまえば、お湯が沸くまで待つだけだ。まことは寄りかかりながら二挺木がテーブルにカップを並べていぐのを見守つていた。

「まこと、変わったな」

「えつ？ そうですか？」

「変わつた。中学の頃より柔らかくなつた」

「そう、かな？」

「うん」

満足そうに頷く一挺木にまことは少し顔を赤らめた。

「そりゃ、何かいいことありました？」

「えつ？」

「どうしてか、ハ？」  
思いがけない言葉だつたのか、一挺木が振り返つた。

「どうしてかし？」

「腕時計をよく触ります。いい」とかあると、一昔からの癖ですね。」

「えつ？ オツ？」

振り返り、自分の腕時計を触ってしる。自分に気が付いた。一揆木は笑い出した。

「もしかして、本当にありました？」

よく見ていいね。正解。実は語文が読められてアソリナは留学したことになつたんだ。急だけど来週に一度向こうに飛ぶんだ

「すい。先輩、おめでとうござります!」

喜びがまごとの姿に一撮木に少し照れながら、「ありがとう、また。君の苏かざさ」

「えつ？」

「ちょうどボット」お湯を入れていたまことは聞き取れず、振り返つた。

「俺は  
・  
・  
・  
」

『つかまえた』

マグカップが一挺木の手を離れ、床に落ちた。ガシャンと音を立てて、床に破片が散らばる。

「先輩！」

胸を掴み、苦しむ「挺木に駆け寄るま」ことだったが、人間とは思えない力で突き飛ばされる。

「キャッ！」

壁に背中をたたきつけられ、田の前が一瞬真っ暗になる。

「先輩・・・」

呼ばれた相手は、その瞬間、黒いエナジーに包まれた。咆哮と共にそのもやは晴れ、そこには禍々しい姿をした妖魔が姿を現した。

「まこちゃん！」

「一挺木君！」

騒ぎに気がついたのか、せつなと「わざがキッチンに入ってきた。

「妖魔？！」

「まこちゃん！」

一人の乱入者に妖魔は窓を突き破り、中庭へと飛び出した。後を追うようにせつなを身を翻す。

「追わなきや・・・」

ふらつきながら無理やり立ち上がるまこと、駆け寄った。

「そんな身体で無理しないで。あたし達に任せて！」

「あたしは大丈夫だよ、つわさきちゃん」

心配そうにじっと彼女の顔を見つめる「わざが」と、まことは微笑んだ。「それに許せないんだ。夢に向かってあんな生き生きとしている先輩は中学じゃ見たこと無かつた。そんな先輩の夢をこんな風にめちゃくちゃにしようだなんて・・・」

その瞬間、外から鈍い音が聞こえてくる。

「考えている暇はないよ、つわさきちゃん！変身だ！」

「うん！」

まことと額き合つと、「わざがは自分のコンパクトを掲げた。

「ムーン・ヒターナル！」

「ジュピター・クリスタル・パワー！」

一人の声が重なった。

「メイクアップ！」「メイクアップ！」

「マーズ、大丈夫？」

「平気、平気。でもマー・キュリーが」

妖魔の攻撃を受けてしまったのか、左腕を押さえている。

「私の事は気にしないで」

「手強いですね・・・」

ブルートもしつかりとガーネット・ロッドを握り締める。

「みんな！」

そこへセーラー・ムーンとジュピターが駆けてきた。

「遅いわよ」

「ごめんごめん」

「二人共、気をつけて。今まで戦ってきた妖魔よりかなり強いわ」マー・キュリーが言い終える前に、妖魔の攻撃が襲い掛かってくる。飛びのくセーラー戦士達。

「長引くと不利だね。あたしがひきつける

「ジュピター、待つて！」

マー・キュリーが止める前に、ジュピターは飛び出した。突然現れたジュピターに対してひるむこともなく、妖魔は攻撃を乱発する。

「キャッ」

「ジュピター！」

攻撃がジュピターをかする。けれど彼女はひるむことなく、ボロボロになりながらも地面を蹴つた。

「スパークリング・ワイド・プレッシャー！！」

彼女の電撃は妖魔に命中し、妖魔は悲鳴を上げる。

「ひるんだ！」

「今よ！セーラー・ムーン！」

「うん！」

セーラー・ムーンは力強く答えた。右手をかざすと、そこにムーン・パワー・ティアルがスッと手の中に納まつた。そして彼女はムーン・パワー・ティアルを掲げる。

「シルバームーン・クリスタル・パワー・キッス！」

ティアルは輝きを増し、あたりは優しい光に包まれた。妖魔は悲鳴をあげると、再び一挺木の姿にもじり、ぐつたりと倒れた。その様子にジュピターはほつとしたように、ペタンと座り込む。

「ジュピター！」

セーラー・ムーンが駆け寄り、ボロボロの姿の彼女に肩をかした。

他の仲間たちも寄ってくる。

「まこちゃん、無茶しそぎ」

「じめん」

まるで怒られた子供のように小さくなるジュピター。

「まつたく」

そんな様子にしようがないな、とセーラー・ムーンは微笑んだ。

『変わった。中学の頃より柔らかくなつた』

ふと、さつき先輩と交わしていた会話が蘇る。

「そつか・・・みんなのお陰か・・・」

「ジュピター？」

「ううん。なんでもない」

そして後日。場面は変わって、飛行場にまことは来ていた。目の前には荷物を持つた一挺木が立つている。

「ありがとう、今日は見送りにまで来てくれて」

「別に・・・」

照れるまことに、一挺木は微笑むと、空を見上げた。一面に広がる青空。気持ち良いそよ風が前髪をなびかせる。

「まこと、実は俺、ずっと謝りたかったんだ」

「えっ？」

「あの時、俺は君にすいぶんと酷い事を言ってしまった。でも謝る

前に君は転校してしまった」

「あつ・・・・」

「挺木の言葉に昔の事が蘇る。やがて、まことが一挺木に告白したその日の事。

『いい加減にしてくれないかな。迷惑なんだよ』

『そんな・・・』

『それに、このお弁当も君の仕業なんだろ？なんだい、母親いな俺にそんなに自分の幸せを見せ付けたいのかい？』

『その言葉にまことはカチンときたのだった。』

『ふざけるな！あたしは、先輩に食べてもらいいたかったから、作つただけです。それ以上でも、それ以下でもない！自分一人だけが不幸のどん底にいるなんて思わないで！』

「すまなかつた」

「先輩・・・」

「初めてだつたんだ。あんな風に言われたのは、まるで殴られたような気分だつたよ」

「あ、あたし・・・、えつと」

慌てるまことに、一挺木はクスッと笑つた。

「おかげで目が覚めた。だからここまで来れたんだ」

「先輩・・・」

「なあ、まこと。もし・・・」

その時、飛行機が離陸する騒音で一挺木の言葉がかき消された。

「先輩、今なんて？」

音が收まり、まことは聞き返したが一挺木は首を振りながら答えた。

「あつ、いや。いいんだ」

「先輩！気になります」

「あつそろそろゲートに行かなくちゃな

「先輩！」

口を曲げるまことに一挺木は微笑んだ。

「まこと。君にも夢があるんだろう？俺もがんばる。お互い、がん

ぱうひ?」

そつ語つて彼は手を差し出してきた。

「はーーー。」

「・・・あの時、先輩なんて語ったのかな~?」  
ボンヤリと空を見上げながら、まことは呟いた。

「な~に、一人でたそがれちやつていのよ。ま・じ・かひやん?」

「美奈子ちゃん!」

「みんな、待つているわよ」

美奈子が手を差し出してきた。握り返すと、彼女は勢い良くまじと  
を立ち上がらせる。

「行こ?」

「うん!」

## 第一十話 恋は流れ星と共に? もじりちゃんの先輩現る? - (後書き)

亜美：『クシコノ』

まいと：『あれ? 亜美ちゃん、 風邪?』

レイ：『やつぱつ、 亜美ちゃんは出来が違うわね~』

ハセヲ：『レイちゃん、 ハッシュドア! あたしを見るのよ』

レイ：『よく聞ひにやない? 【なんとか】は風邪ひかないって』

ハセヲ：『うひーーー!』

美奈子：『せいやー、 ケンカはほびほびにな』

ハセヲ：『【美少女戦士セーラームーン Memories】

風邪にじじ用心? 痞われた亜美』

『月の光は、 愛のメッセージ』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8955m/>

美少女戦士セーラームーン Memories

2011年10月6日09時43分発行